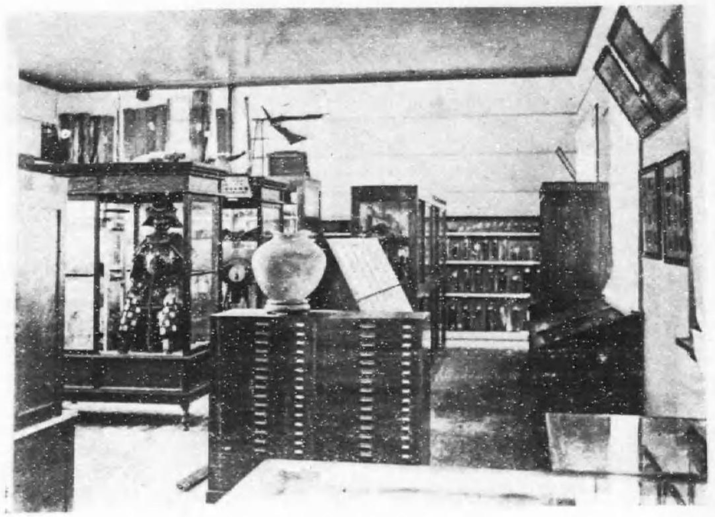
特217
159

鄉土研究

第一輯

鳥取縣女子師範學校

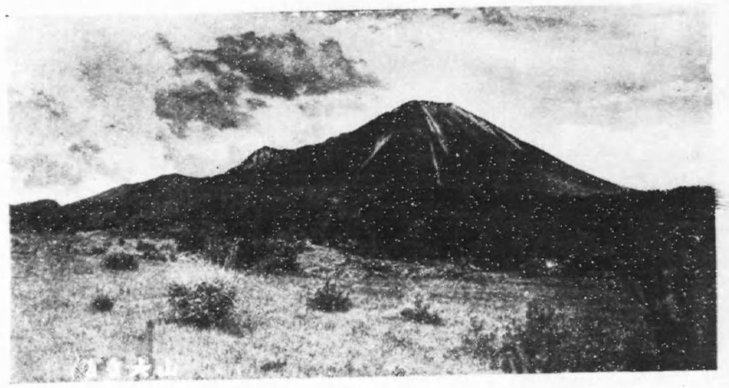
始



郷土室

清水砂丘

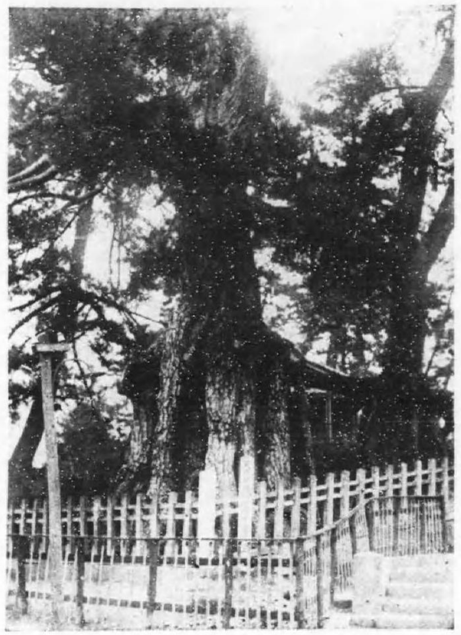
特217
15号



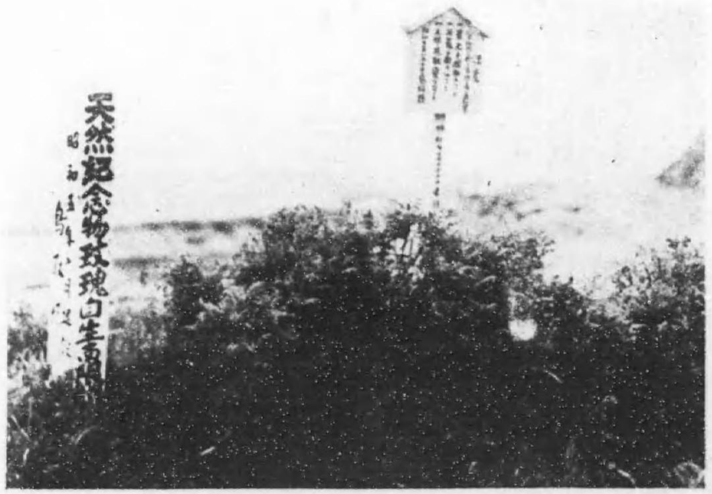
大山全景

大山ヨリ見タル夜景

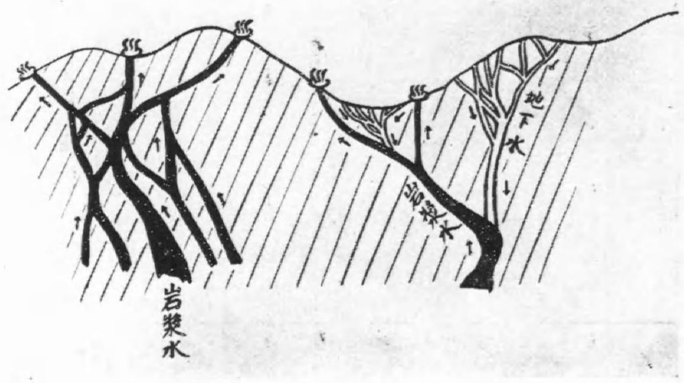
天然記念物



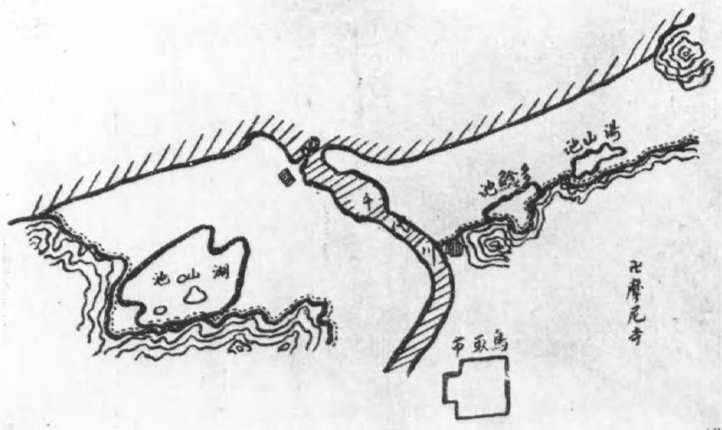
（法城寺連理根上リ松　米子市）



（村恒末郡高氣）　地限南生自瑰玫

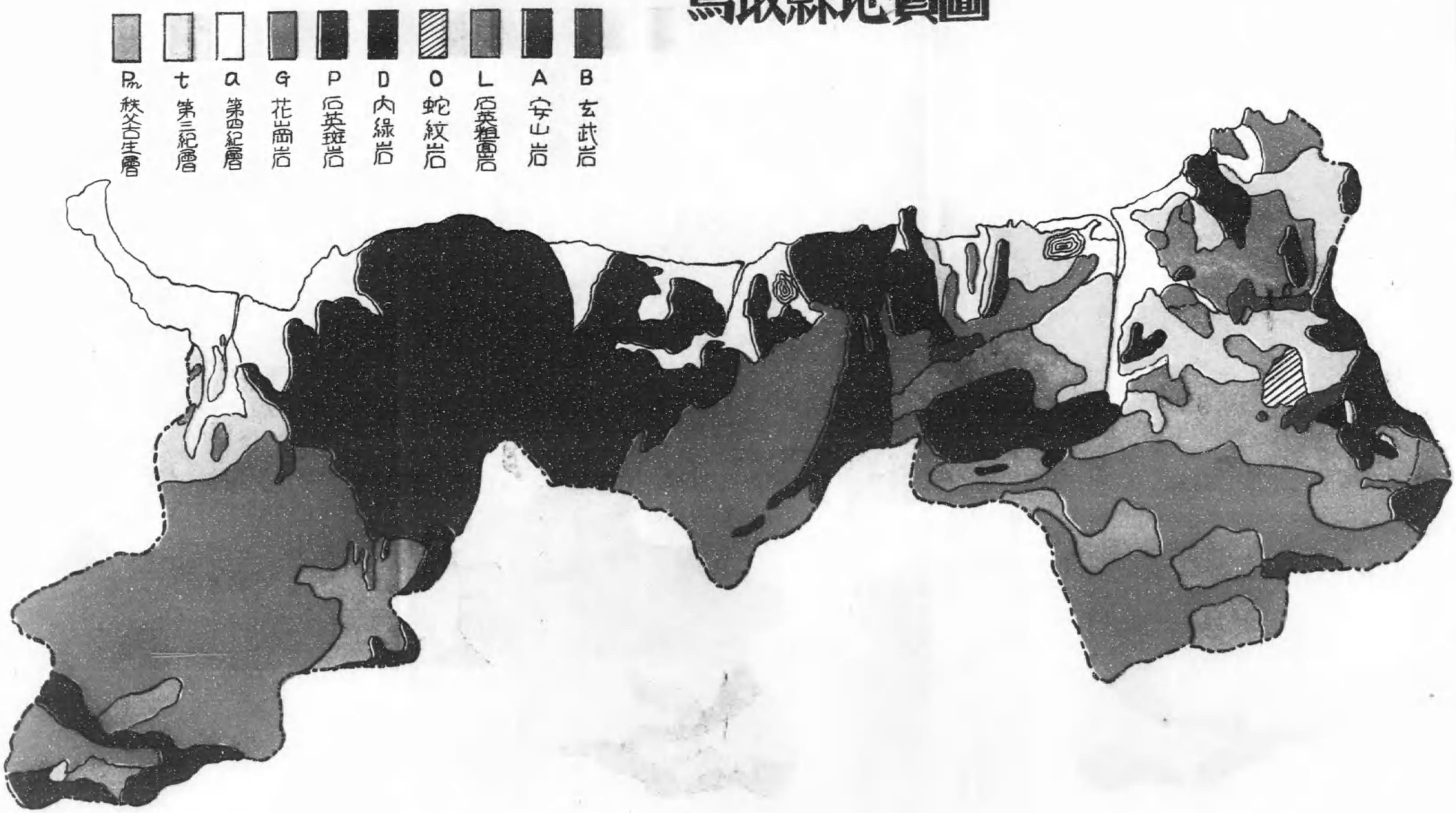


圖因成泉溫
（ルアデ動活ノ期末ノ山火ハ泉溫）



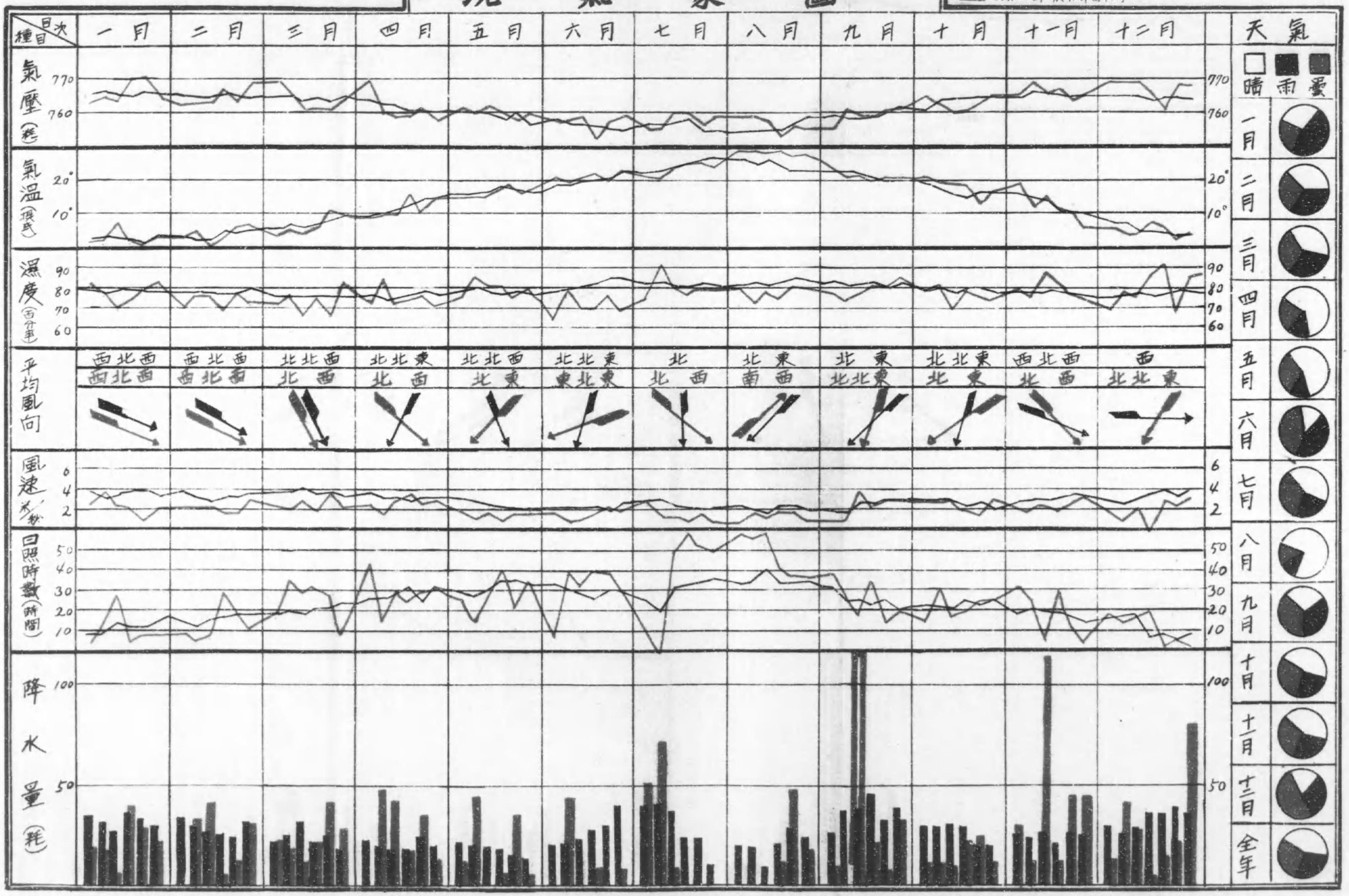
圖像想線岸海舊ルケ於ニ側兩川代千
（點線ハ舊海岸線）

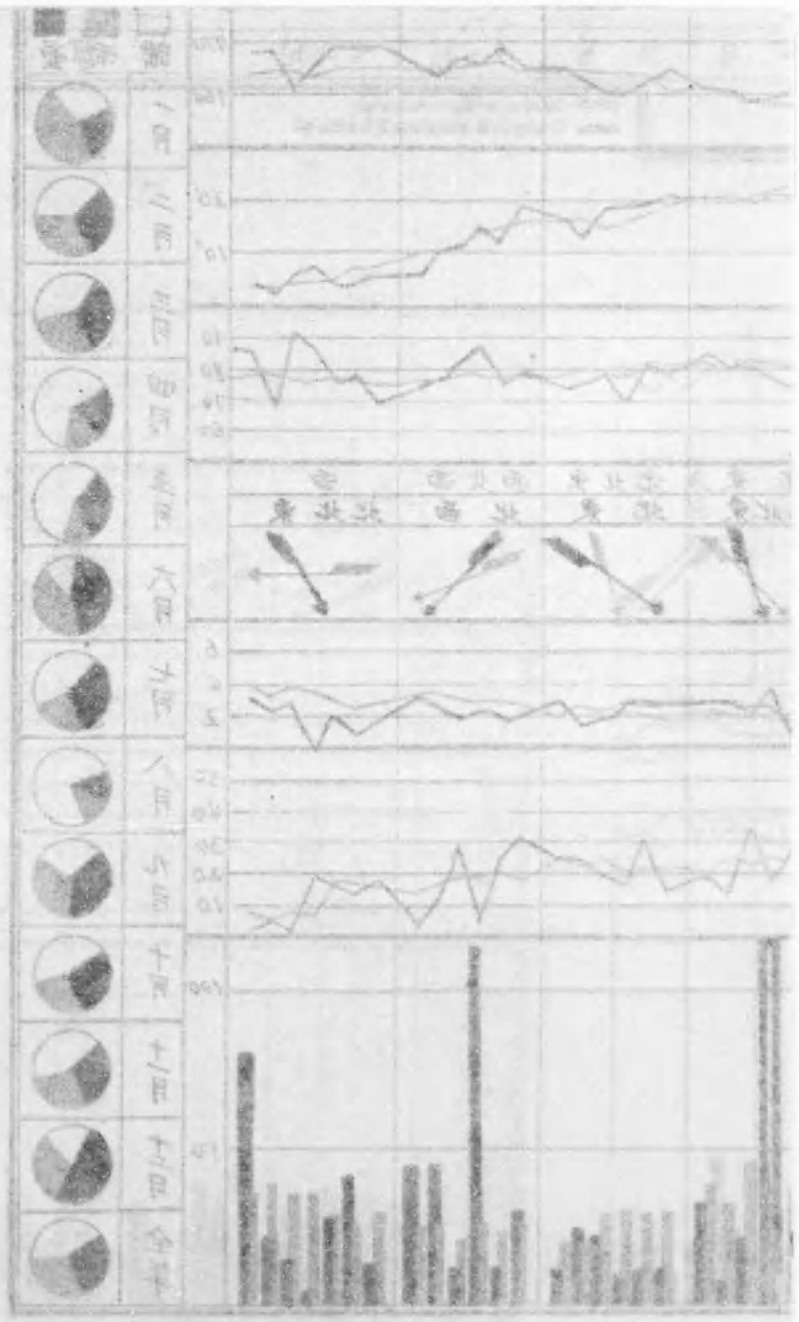
鳥取縣地質圖



境氣象圖

自明治十九年至昭和三年累年半旬平均
昭和四年ニ於ケル半旬平均





凡例

一、本書は文部省より交附せられたる鄉土教育研究費に依り本校に於て研究せるものの並に資料蒐集目錄を收錄せるものなり

一、本書は第一期資料蒐集期を畢り第一次報告に止り、更に研究の結果は第二輯以下の刊行に俟つことゝせり

二、本書は前篇後篇の二部に分れ、前篇は鄉土研究の一部たる自然科學的方面、後篇は本校職員生徒共力に依り蒐集せる目錄を主とし加てゝ研究の一端を示せり

一、本書は本校鄉土研究主任松村太一郎教諭主として之が編纂に當りたるも、原稿整理の中道急病の爲め逝去せり、後同教諭の意志を繼ぎ編輯に當りしも忽卒に際して或は遺漏正誤多からんことを窃に懼る、大方諸賢の叱正示教を祈るや切なり

昭和八年三月

鳥取縣女子師範學校長　川上喜市

鄉土研究第一輯目次

◇前篇

鳥取縣の自然科學的方面の研究……

第一章　地形……（一）

第二章　氣象……（一一）

第三章　地質……（二一）

第四章　植物相……（一〇）

第五章　動物相……（一五）

第六章　大山（國立公園）……（二〇）

第七章　湖沼……（二六）

第八章　砂丘……（三〇）

第九章　溫泉……（四二）

第十章　天然記念物……（四九）

◇後篇

第一章　自然科學的方面……（一）
第二章　地理的方面……（二四）
第三章　歷史並考古學的方面……（二九）
第四章　文學的方面……（六一）
第五章　美術工藝的方面……（七三）
第六章　風俗的方面……（七八）
第七章　產業的方面……（一八）

前篇

鳥取縣の自然科學的方面の研究

松村太一郎

前篇　鳥取縣の自然科學的方面の研究

松村太一郎

第一章　地形

我が鳥取縣は中國山脈の主軸が東西に走り、北は日本海に面してゐる。其の間大山を始めとして船上山、氷ノ山、鷲峰山、扇山等の白山火山脈に屬する一帶の火山がこの主軸の稍々北方に當つて噴出して山嶽重疊起伏し地形急峻を極めて居るから縣内の大部分は山地であつて平地は極めて少い。

河川は何づれも其の源を中國山脈に發し北流して日本海に注ぎ日野川、天神川、千代川は其の著しきものである。平野は是等河川の流域に發達し米子平野、倉吉平野、鳥取平野は其の著しいものである。湖沼には東郷池、湖山池、多鯰ヶ池等が臺地砂丘との間に位置して居る。海岸は頗る單調であつて僅に夜見濱、青谷及尾鼻等の突出を見るだけである。浦富海岸は幾多の大小の島多く青松茂り名勝地（昭和三年三月二十七日内務省指定）である。海岸には砂丘よく發達し其の中でも夜見ヶ濱砂丘、天神川砂丘、千代川砂丘は三大砂丘として他に類例のないものである。

第二章　氣　象

鳥取縣は東西に長く南北に短い。北は日本海に面し、南は中國山脈に依つて明瞭に限られて居るが東は兵庫縣、西は島根縣に連り其の氣候的境界は明でない。所謂裏日本的氣候の特色を表はして居る。

今境測候所氣象調査に基づく明治十九年より昭和三年に至る氣壓、氣溫、濕度、平均風向、風速、日照時數、降水量を示せば別表の通りである。

而して溫度に於ける低極は －7.0° C. で其の起日は明治三十七年一月二十七日である。最高氣溫は 37.8° C. で其の起日は明治二十六年八月四日である。

雨量は平地と山地により又平地でも東部と西部とにより其の地形的影響及季節風並に對馬暖流とにより大いに異なる。今昭和五年に於ける各地の雨量を比較すれば次の如くである。

多里	一〇七一、四	米子	一九六七、三	倉吉	一五三二、八
若櫻	一七七三、三	鳥取	二二六〇、三	大茅	一九六九、五
本庄	二〇三七、三				

第三章　地　質

概　說

本縣は地形の複雜に伴つて地質も亦頗る錯雜であつて、第一に伯耆に聳立する大山は噴出火山岩の堆積したもので其の基底は四粁もあるトロイデ式の火山である。其の安山岩帶は東は小鴨川緣から西は日野川緣までに及び勝田丘や高麗山を含んで居る之等は脆弱なる岩質であるため可なり開析し、且大山の熔岩流とも目すべきものが日本海岸まで延び廣漠たる裾野を作つて居る。

大山の西側を北流する日野川下流域は廣大なる第四紀沖積層にして日野川中流の花崗岩との間には流紋岩を所々に交へて居る上流域の大部分は花崗岩であるが、多里附近に秩父古生層及石英斑岩が可なりの區域を占め、印賀川と日野川本流との間の印賀臺地及根雨附近にも同樣の岩石が露出して居る。

天神川以東因幡に於ては頗る複雜にして、大體に花崗岩が廣區域を占めて居るが八頭郡の富澤、八東、若櫻附近には古生層が基盤をなし、國境の扇ノ山、菅野山の諸高山は安山岩である。又地形圖上特に目立つた褶曲を表はして居る。仙人山が若櫻と丹比との間に古生層を割つて玄武岩を迸出して居る。

三德山から因伯國境近くに花崗岩を破つて四圍の山々と肩並して居るが、安山岩が主で、北方東鄕池畔迄延びて居る。

此の外に千代川。天神川流域に第四紀沖積層が開けて肥沃な良田が續いてゐる。弓ヶ濱地方は最も近代の海成沖積層で砂粒よりなり、海岸一帶には砂丘がよく發達してゐる。

山岳に於ては花崗岩が最も廣區域に亘り發露し、新火山系が之に次ぎ、古生層は第三位を占めてゐる、新火山系は高度にお

いて最も卓越し、多くは百米以上であるが、古生層よりなる山岳は九百米を拔くものは僅かに八頭郡の籠山、穗見山に過ぎない位で一般に低平である。之は地殼構造上古き地層古き岩石程下部にあつて新火山岩は上へ〳〵と堆積される故當然である。

各論

（一）日野郡の地質

石見、福成の兩村界に聳える大倉山（一一一二米）は石見大山の別名を有し伯耆大山に似た相貌で備中との國境近く孤立して新火山岩の形狀を呈してゐるが全山花崗岩より成り、山麓を流れる石見川の沿岸は所謂石霞溪の景勝であつて、花崗岩質の奇岩、怪石が或は屹ち、或は重なり名所となつてゐる。大倉山、妙見山（七二四米）鬼林山（一〇三一米）の諸山に取り圍まれてゐる福榮盆地は第三紀初期には海岸の低地であつたのである。

多里村字新屋の日野川に沿ふ地方は一帶に第三紀層の砂岩、礫岩、粘板岩、頁岩等よりなり其の日野川床及崖岸の第三紀頁岩中からは樹葉、卷貝、二枚貝、松毬等の化石が多數採取される。又新屋附近からは俗に松皮石と稱する黑色松樹皮狀をなし片々に剝がれる石英粗面岩が出る。多里村附近には石英斑岩がかなりの面積を占めてゐる。宮內、山上、多里の各村に亘つては古生統の片成岩卽ち花崗片麻岩、黑雲母片岩、絹雲母片岩等を產す。これ古生代に屬する粘板岩、頁岩等が花崗岩に接觸して變成したものである。

伯耆と出雲との國境に聳ゆる船通山（一一四三米）は附近の窓山（一〇七七米）と共に全山花崗岩質である。

日野川支流印賀川一帶の山上、大宮、阿毘緣の三村を包含する高臺地を印賀臺地と云つてゐる。此の臺地は花崗岩、片麻岩、及古生統に屬する片岩等より成つてゐる。古生層は臺地の南部を占め、花崗岩は其の北外廓部を形成してゐる。臺地の大部分

は花崗岩の風化作用に依つて分解された石英砂で充滿してゐる盆地である。此の石英砂中には花崗岩中に副成分として含有せられた磁鐵鑛が砂鐵となつて多量埋藏されてゐる爲め、嘗つては水力を用ひて砂鐵採取が行はれ諸所に人工的の斷崖が見られる。精製した印賀銅は有名である。山上村部內からは部分的に玄武岩、角閃岩、赤鐵鑛等を產出するところがある。日野川と二部谷川とに圍まれた土地の主成岩は花崗岩で、根雨町附近の古生層の一部が日野川を越へて浸入し、又二部の附近には新火山岩が少量露出してゐる。此の地帶は地壘をなし、北西より南東に走る並行な山脈が域內に起伏し、四つの並行脈嶺を屹つて南部末尾に鵜の池を穿つてゐる。

眞佳、根雨、神奈川の各町村の大部分秩父古生層であつて岡山縣との境に近く石英斑岩及び閃綠岩が存在してゐる。西南方の一部分は花崗岩である。根雨の公園地から樹葉の化石が發見されてゐるが第三紀に屬するものである。米澤、金澤、八郷等各村の東部は大山噴出物である、角閃安山岩、火山灰土であり西部は花崗岩から出來てゐる。鑛物として著しきものは、多里村クローム鐵鑛、二部村蒔屋紫水晶、山上村、日野川沿岸の砂鐵、日野川沿岸の砂金（今は採取せず）

（二）西伯郡の地質

大山を中心とする廣汎なる地域は大山の噴出、及流出物より成り、安山岩である、大山火山の噴出時代は多分第三紀末期頃と思はれる。

西伯郡奧の上長田東長田村は大體花崗岩より成り、賀野臺地は大體に第三紀層であるが所々に流紋岩が噴逃してゐる。臺地續きの二部村地壘と接合する所に玄武岩の一脈が日野川左岸に逃發し、北方は日野川下流帶の河成沖積層に續いてゐる。法勝寺、手間、幡鄕、日吉、縣等の各村の大步分は第三紀層にして、石英粗面岩が所々に現はれてゐる。米子を中心とする平地、弓ヶ濱砂嘴、車尾、淀江町、御來屋町附近は第四紀沖積層である。

宇田川村、高麗村、名和、庄内、光德等の村々には第三紀層が部分的にある。

(三) 東伯郡の地質

天神川以西の山地は大山系統の安山岩である。天神川流域、之に依つて生じた天神川砂丘、加勢蛇川流域は廣汎なる第四紀沖積層である。

倉吉町以南の山地は大部分花崗岩であつて中國山脈の主軸をなしてゐる。

三德山(九〇〇米)は新成火山系たる安山岩が主成體で北方に迄其の影響を及ぼし北方には凝灰質の土壤が深層をなしてゐる。

三德山より日本海岸に至る間も花崗岩、安山岩の並行岩脈が起伏してゐる。

其の他此の地方には玄武岩、流紋岩及花崗岩等の露出をなすものがある。

(四) 氣高郡の地質

東伯郡泊村より續いて氣高郡青谷町、勝部村の大部分は新生火山岩たる安山岩より成り、瑞穗、勝谷、逢坂は大部分第四紀洪積層より成り山地は花崗岩、安山岩等の火成岩及第三紀層である。

郡内の最高峰鷲峰山(九二一米)は玄武岩よりなる孤峰であつて鹿野町の南部に位置してゐる。之を圍繞する四周の山塊の内南方一面に流紋岩、東西兩側に花崗岩、南の一部に高山の安山岩がある。

寶木、末恒、大郷、松保等の丘陵は何づれも第三紀層であり末恒岸海附近には安山岩を礫とする礫岩が著しく目立つてゐる。

末恒沖の青島から第三期の樹薬化石を産出する吉岡、明治、豐實、東郷、大正等の山地は鷲峰山の東部より續いて郡の中部を

東西に貫走してゐる。

美穗、大和、神戸、及大正、東郷の一部分の丘陵は第三紀層よりなり千代川左岸流域及賀露、湖山、末恒、松保等平坦部及海岸砂地は何づれも第四紀沖積層である。

鑛物としては、神戸村に硅化木を産出する外著しいものはない。

(五) 岩美郡及鳥取市の地質

千代川右岸流域の低地卽ち、倉田、美穗、面影、鳥取市及中ノ郷の濱坂砂丘等は第四紀沖積層であつて、所謂鳥取平野の東部を形成してゐる。鳥取市の東部に聳ゆる久松山は、紅色の花崗岩であり、場所に依りては斑狀を呈する所がある。

中ノ郷村、福部村、服部村の砂丘に接する丘陵地及び中ノ郷村字圓護寺地帶は第三紀の凝灰岩よりなり俗に圓護寺石と稱せられ切石として種々使用せられてゐる。

因幡、但馬の國境に安山岩質の扇山(一三一〇米)が聳え北方に延びて第三紀中に浮出し、海岸には駟馳山(三一四米)を最高とする南北に細長い安山岩(玻璃質安山岩)の山岳が連なつてゐる。網代、田後の沿岸には標高二〇三米を最高とする約一粁平方の花崗岩があつて、大岩、本庄、浦富等の第四紀沖積層の低地に依つて取り圍まれ孤立してゐる。

東村は花崗岩よりなり、岩井町の大部分は第三紀層で東部は安山岩より成つてゐる、第三紀粘板岩中より化石が出る、小田村、鹽見村は石英粗面岩より成り所々に安山岩が浮出してゐる。宇倍野、津ノ井、成滝、大茅等は第三紀層の粘板岩角岩、砂岩等よりなり魚類、貝類、植物の化石を埋藏してゐる。成器、大茅には雨瀧街道に沿ひ帶狀をなして玄武岩の露出があり柱狀節理を著しく現はしてゐる。成器村には尙ほ路傍に花崗岩の露出が小區域にある。

岩石の主なるもの。

中郷村濱坂　高師小僧、福部村　碧玉、紫水晶、鈴石、珪化木、小田村荒金（岩美鎭山）自然銅及黃銅鑛。
東村（龍神洞）鐘乳石及石筍、宇倍野村廣西　香盒石。

（六）八頭郡の地質

西郷村奥部に高山（一〇五四米）高鉢山（一二〇五米）に聳へてゐるが共に安山岩で頗る嶮峻な山相を呈し、両山の境界に三瀧の斷崖を存し深谷を穿つてゐる。高鉢山は佐治川方面に急斜面をなし佐治川流谷の古生層に終り、東方は智頭川縁近く迄徐傾し、南部に於ては八頭古生層の西地端を覆隱してゐる。河原町附近の智頭川西岸は第三紀礫岩よりなつてゐる。西郷村字牛ノ戸に一山塊の個別的陷没をなしたるものがあつて其の山狀恰も臥牛を後方より見る樣に彷彿たるものがある。

八頭、岩美兩郡界をなしてゐる鑾石山は第三紀層より成り西部近くに安山岩が貫いて噴出してゐる。

用ケ瀬町附近及び東南方一帶は廣範圍の花崗岩地域を占有し、西部佐治谷は秩父古生層よりなり、用ケ瀬町附近よりの花崗岩は帶狀に北の古生層の南を東西に走つて居る。佐治谷には俗に佐治石と稱し庭石或は盆栽用の裝飾として使用せられる珪質粘板岩が出る。社村の花崗岩は因幡部唯一の良質石材を多量に産出する。鑾山（九〇六米）を中心とする社村の東南地帶より富澤村の北部地帶は古生層より成り、智頭町以南の山地は花崗岩であり那岐山頂上には角閃安山岩が花崗岩を貫いて頂上に露出してゐる。

智頭町と山郷村との境界線上にある穗見山（九七七米）を中心とする地域は古生層である。穗見山は山骨の露出した所は少く僅かに堅密質の巨石が轉々として山脚崖道附近に點在するに過ぎない。

沖ノ山（一三一九米）は新生火山岩たる玄武岩であるが花崗岩の高山で圍繞せられてゐる爲め何等の特相を現はしてゐない。

東山（一三八八米）及池田村吉川地方は花崗岩である。東ノ山は其附近一帶の花崗岩塊中の主腦であつて東は東川縁に急傾

して對岸の古生層に接してゐるが他は頗る緩斜面をなして其の麓足を長く三方に延ばしてゐる。

吉川と八東川との合流點で古生層と吉川地方の花崗岩とは接觸してゐるが其の古生層の山塊に所謂岩屋堂の洞窟がある。

頭巾山は千代川に沿ふ用ケ瀬町の背面に屹立してゐる。花崗岩山は海拔（五一六米）で附近の群小丘陵を秀拔してゐるので特に目立つてゐる。

大村、濟美、隼、八東、若櫻及池田の大部分は秩父古生層にして珪岩、角岩、アヂノール板岩等よりなり、八東村にありては蛇紋岩、玄武岩の露出があり又八東村新興寺附近には石灰岩が産出し燒いて石灰を取つてゐる。又若櫻町には紅條大理石が部分的に産出し我が國特有のものである。

池田の奥部には石英斑岩、安山岩の産出するところがある。若櫻には諸鹿、春米等に第三紀層がある。私都谷は私都川に依つて南北の山地に分たれてゐるが大體に於て山地は第三紀層よりなり中私都村附近に古生層が現はれてゐる。上私都村姫路に至る路傍には砂岩、礫岩等が露出してゐる、姫路より奥部には扇ノ山系の安山岩が板狀節理を現はしてゐる。

主要なる化石の産地

國英村　植物化石、　上私都村字姫路　貝化石、　若櫻町字春米　貝化石、

第四章　植物相

本縣は暖帶に屬し、南に中國山脈あり北は日本海岸に面し、最多雨地方であるから植物はよく繁茂し、其の種類も極めて多數である。本校に於ては約一千五百種以上を採集して居る。而して一々の植物に關して之を記載する事は紙面が許さない。其の著しき點に關して少々記して見たいと思ふ。

本縣の歸化植物――歸化植物進入の傳播は交通機關の發達に密接する關係を有して居る。往時交通不便で全く見る事のな出來かつた外國植物が鐵道の敷設に依り次第に進入し今現では次の如き多種類を見る樣になつた。

(一)ムラサキカタバミ　酢漿草科　(鳥取市採集)
(二)アレチノギク　菊科　(岩美郡中郷村)
(三)ヒメジオン　菊科　(八頭郡賀茂村)
(四)ヒメムカシヨモギ　菊科　(鳥取市)
(五)マツヨヒグサ　柳葉菜科　(岩美郡倉田村)
(六)オホマツヨヒグサ　柳葉菜科　(八頭郡國中村)
(七)タチイヌノフグリ　玄參科　(岩美郡福部村)
(八)オホイヌノフグリ　玄參科　(岩美郡中郷村)
(九)テウセンアサガホ　茄科　(八頭郡國中村)
(十)シロツメクサ　荳科　(鳥取市)
(十一)ウマゴヤシ　荳科　(鳥取市)

(一二)アカウキグサ　荳科　(鳥取市)
(一三)コメツブウマゴヤシ　荳科　(鳥取市)
(一四)ミヅタガラシ　十字科　(氣高郡湖山村)
(一五)オランダガラシ　十字科　(氣高郡湖山村)
(一六)マンテマ　石竹科　(氣高郡鹿野町)
(一七)ヒ　ユ　莧科　(氣高郡加露村)
(一八)ノゲイトウ　莧科　(氣高郡豐實村)
(一九)ハリビユ　莧科　(鳥取市)
(二〇)ヒメスキバ　蓼科　(氣高郡大正村)
(二一)ニハゼキシヤウ　鳶尾科　(鳥取市)
(二二)ヒメタウシヤウブ　鳶尾科　(鳥取市)
(二三)カモガヤ　禾本科　(鳥取市)
(二四)ナギナタガヤ　禾本科　(氣高郡賀露村)
(二五)ヒメコバンサウ　禾本科　(八頭郡船岡村)
(二六)イヌムギ　禾本科　(鳥取市)
(二七)ドクムギ　禾本科　(岩美郡福部村)
(二八)コバンサウ　禾本科　(鳥取市)
(二九)オホスズメノテツパウ　禾本科　(八頭郡國中村)

（三〇）ムラサキウマゴヤシ　荳　科　（岩美郡津ノ井村）

尙ほ此の外觀察洩れのものも多數ある事と思ふ。

食蟲植物――陸上或は水上にありて動物を捕へて榮養物を攝取して生活して居る植物を云ふのである。本縣産の主なるものは次の如し。

（一）タヌキモ　狸藻科　（八頭郡賀茂村）

（二）ミミカキグサ　狸藻科　（氣高郡東郷村）

（三）ムラサキミミカキグサ　狸藻科　（八頭郡大御門村

（四）イシモヂサウ　茅膏草科　（八頭郡賀茂村）

（五）モウセンゴケ　茅膏草科

寄生植物――他の植物に寄生して養分を攝取して生活するもの

ネナシカヅラ　旋花科　（氣高郡湖山村）

マメダヲシ　旋花科　（八頭郡船岡村）

ギンリヤウサウ　鹿蹄草科　（鳥取市久松山）

ナンバンギセル　列當科　（八頭郡國中村）

ハマウツボ　列當科　（岩美郡中郷村）

ヤドリギ　槲寄生科　（八頭郡佐治村）

マツグミ　槲寄生科　（八頭郡智茂村）

ヒキヨモギ（半寄生）　玄參科　（高高郡青谷町）

コゴメグサ（半寄生）　玄參科　（西伯郡大山）

カナビキサウ（半寄生）　檀香科　（八頭郡國中村）

ツクバネ（半寄生）　檀香科　（鳥取市久松山）

天然記念物として保存する價値ある植物。

本縣では天然記念物調査委員に依て多數の植物は已に調査研究濟みであるが、尙多くの價値あるものが殘つてゐると思ふ。余が植物採集中保存の價値ありと思つたもの一二について述べて見たいと思ふ。併し今回は概略丈けを述べて詳細は他日に讓りたい。

（一）、群生せる夫婦松

所在地、　氣高郡豐實村

凡て夫婦松は自然に山地に出生したものでも多くは、神社、佛閣、民家、公園等に移植されてゐて自然の狀態のものは比較的少ない。此の豐實村の周圍三米許りもある黑松、赤松が群生して居るが其の中多分五夫婦が連理をなして居る、根本で或は地上數本の處等で種々な連理の狀態を示し、又黑松と黑松、赤松と黑松と連理の樣は他に見る事が出來ない珍らしいものだ。

（二）、連理のケヤキ

所在――八頭郡池田村

人も知る產の神樣として有名な捶米の權現樣の境內にあるもので四本の樫が束になり大木となつて居る。又其の一方には婦人の乳房狀の突起があつた奇形を呈して居る。參拜する人々は此の乳房狀の突起を信仰する樣子である。

植物の繁殖と環境とは密接な關係を有する者であつて或る殊殊の環境には一定の植物群を生ずるのが普通である。或る場所に於ては同一植物の群落を生じ、又或る他の環境に在りては多種類の群落を見る。

本縣の下の特殊環境と思はれる一二に就いて其の大要を述べて見る。

一、ガマの群落

所在地　岩美郡成器村

蒲生川の上流成器村村内にはガマのみの大群落をなして居る。

一般にガマは諸地方の濕地、河流域、水田附近等に自生するものにして本縣内でも、八頭郡賀茂村、千代川下流、氣高郡末恒白兎海岸附近の溝等に見るのであるが前記成器村の如く河流の眞中に大群落をなすものは稀であつて、而も他の植物を混じて居ない單純群落である、長く保存すべきであると思ふ。

(三) 尻無川植物群落

所在地　岩美郡中郷村濱坂砂丘

後章砂丘の研究の際述べて居る如く、尻無川は砂丘中に存在するに唯一の湧泉にして、此の周圍には數多の植物が群生して居る、其の主なるものは次の樣である。

(一) ウンラン　(二) コウボウムギ　(三) コウボウシバ　(四) ハマハタザヲ　(五) イソノギク　(六) ケカモノハシ　(七) ハマゴバウ　(八) ハマニガナ　(九) ハマヒルガホ　(十) クサヨシ

是等の植物は此の環境によく適應し群落をなしてゐる。

第五章　動物相

本縣は山地が大部分の領域を占有してゐるけれども南北の距離比較的短く、又近年著しく交通が開け伯備線、因備線の陰陽連絡鐵道を始め是等から支線がわかれ且又自動車網も敷かれ、文化の進むにつれて深山幽谷を求めて山地に入る者が多數になり從つて從來は海岸近く迄住所として居た動物も次第に山奥に追ひやられ、其の數も極めて少くなつて今や絶滅に頻する者多數に上らうと云ふ情勢にある。

本縣産の哺乳動物としては、サル、キクガシラカウモリ、コキクガシラカウモリ、カウモリ、クマ（ツキノワマグ）アナグマ（ムジナ）カハオソ、イタチ、テン、タヌキ、キツネ、シカ、キノシシ、ヂネズミ、ハツカネズミ、モグラ、エチゴウサギ、ノウサギ、リス、ムササビ、等である。

クマは八頭郡の若櫻、池田がその有名な産地であり數年前迄は毎年五月頃熊狩をした程であるが今では年に僅か一二頭位しか捕獲されない位になつて居る。テンは岩美郡蒲生、八頭、東伯、日野等の山間部で捕獲されてゐるが其の數は餘り多くない。キクガシラカウモリは日野郡石霞溪にある洞窟内に多數棲息して居る。コキクガシラカウモリは八頭郡賀茂村郡家内にある安藤伊右衛門氏の邸に成る水門洞窟内に多數天井より吊して冬眠を爲して居る。サルは中國山脈主峰近くに住み往々其の群に出會ふことがある。カウモリは嘗つては相當其の數が居たが今では數年間に一頭位しか獵れない。シカは二十年程前の大雪の際には數百頭位の大獵があつたと云ふ事であるが今では殆んど捕獲出來ぬ位に其の數が減つて居る。キノシシは十數年間に一頭位の捕獲はあるが却つて但馬の方が多い。リス、ムササビは深山の樹上に生活し樹木の間を飛翔する如く飛び廻る、エチゴウサギは一般の山地に住んで居て夏季は灰褐色の毛の色をして居るが、冬期は白色となり所謂保護色の代表物的動である。かゝる狀態から推して雪國にのみ棲んで居るものと思はれる。

奥羽、越後等は其の中心地をなし、次第に南下して鳥取、島根の兩縣下が其の南限をなして居ると思はれる。かかる見地より して動物分布上貴重な資料を我々に提供して呉れる。又一月二月の樣な極寒の季節に前肢の前方の一部分のみ、或は頭部額の前方のみ、或は腹部のみに限つて純白色であつてその他のウサギと同樣茶褐色の毛色をして居るものもある。これに關して三つの疑問があると思ふ。

(一) ノウサギが冬期保護色の傾向を現はすのか?

(二) エチゴウサギの一部分が冬期色を現はして居るのか、以上の中(二)と(三)との何れかに眞を置くべきであると思ふが其の中でも(三)では無いかと思ふ、今後の研究に待つべきである。

(三) エチゴウサギとノウサギとの雜交に依つて部分的遺傳を顯はして居るのか、

其の他カウモリ、アナグマ、イタチ、タヌキ、キツネ、ネヅミ、モグラ、ノウサギ等は山地に或は山野に、或は人里に普通のものである。

鳥類に關しては一々上げ盡せない、從つて本校所藏の標本を主として記述することにする。

カラスには本縣產のものが三種ある。卽ちハシボソガラス、ハシブトガラス、ミヤマガラスである。前二者の相違點は名の示す如く嘴の大小に依つて識別せられ、ミヤマガラスは嘴の根本にある皮膚の裸出部に羽毛を生じない事並に體の小形なることによつて前二者と區別される、又ミヤマガラスは山間地例へが八頭郡では八東以奥に住んで居る。

キセキレイ、セグロセキレイ、ヒバリ、タヒバリ、ヒヨドリ、ヒタキ、ルリ、トラツグミ、クロツグミ、ツグミ、シロハラ、アカハラ、コマドリ、ウグヒス、メジロ、ミソサザイ、カハガラス、イソヒヨドリ、レンジャク、モズ、ゴジフガラ、シジフガラ、ヤマガラ、ヒガラ、コガラ、エナガ、カササギ、カケス、ムクドリ、シメ、イカル、カハラヒハ、マヒハ、ウソ、ヌカイスカ、マシコ、アトリ、スズメ、ホホジロ、アヲジ、ノジコ、等の中、ルリ、コマは其の數極めて少なく春三、四月頃山地に出現する。カハガラスは一般に山地に多く岩美郡大茅村八頭郡奥山間部の水田に棲息する。イソヒヨドリは岩美郡浦富、田後等の海岸岩石上に好んで棲む。レンジャク、カケス、ササギは山地を好めども其の數が少ない。

ムクドリは鳥取市附近を中心に多數群をなして居る。其の他の鳥類は普通に見られる。

ツバメは春彼岸頃南方から飛來して當地方に營巢するものであるが主なるものはイハツバメ、アマツバメ、ツバメにしてイハツバメ、岩美郡東村海岸附近の岩石、西伯郡大山頂上の岩石上に群集をなして生活營巢する。アマツバメは主に洋館の壁に德利狀の巢を作り、ツバメは民家に普通である。

アカシウビン、カハセミ、ヤマセミ、フクロフ、ミミヅク、ヨタカ、ヤマゲラ、アヲゲラ、アカゲラ、コゲラ、の中アカシウビン、ヤマセミは山間溪流附近に棲息し、ヤマゲラ、アヲゲラ、コゲラは攀禽類として普通のものである。

クワクコウ、ホトトギスは大山山麓に夏期其の鳴聲を聞くことが出來る。

キジバト、アヲバト、シラコバトの中前者は普通なれども後二者は以前に於ては捕獲可能であつたが今は殆んど其の姿を見る事が出來ない狀態となつて居る。

クヒナ、バン、マナヅル、チドリ、タゲリ、ケリ、ハマシギ、ヘラシギ、クサシギ、ソリハシシギ、ヤマシギ、タシギ、ミヤコドリ、カモメ等は本縣產であるがマナヅルは全く其の影を絕ち、タゲリ、ミヤコドリ等は其の數が少い。

ウヅラ、キジ、ヤマドリ等は山野に普通に見られる。

ワシ、クマタカ、オホタカ、トビ、ハヤブサ、ツミ、等の鷲鷹類の中ワシハ日野郡、西伯郡、氣高郡、八頭郡等の山間地で捕獲せられる。

カハアイサ、スズガモ、ハシビロガモ、ヨシガモ、シマアジ、トモエガモ、コガモ、カルガモ、マガモ、オシドリ、ガン等は秋季より春季にかけ我が縣湖山池を中心に飛來するのであるが、ヲシドリは夏季は山間溪流中に棲息し、冬季平地池水に出る

ウ、ヒメウ、シラサギ、アヲサギ、ゴイサギ、ササゴキ、ヨシゴキ、コウノトリ、トキヘラサギ等の中、シラサギ、コウノトリ、トキヘラサギ等は昔時は相當棲息してゐたものだが今は絶無に近い狀態である。

カヒツブリ、は各地の池沼に普通である。

爬蟲類としては相當多種に渉つて棲息して居ると思はれるが其の主なるものは次の樣である。

龜類――イシガメ、スツボン、

昭和六年の夏タイマイが賀露海岸ヨリ捕獲された事實がある。多分潮流の爲めであらう。

蛇類――ヒバカリ、ヤマカガシ、アヲダイシヤウ、シマヘビ、ヂムグリ、シロマダラ、マムシ（毒蛇）

蜥蜴類――ヤモリ、トカゲ、カナヘビ、アヲスヂトカゲ

兩棲類の中ヤマアカガヘル、モリアヲガヘル、カジカガヘル、は主として山間地に棲息して居る。

無尾類――ヒキガヘル、アヲガヘル、ヤマアカガヘル、アカガヘル、トノサマガヘル、ショクヤウガヘル、ツチガヘル、モリアヲガヘル、カジカガルヘ

有尾類――ハンザキ、ヤモリ、ハコネサンセウウヲ、

魚類に其の數極めて多く我が校に製作せられたものだけでも二百種に達し全部記載する事は紙面が許さない依つて之を省略する事にする。ここには唯淡水魚のみを記述する。

河の極く上流の山間溪流に位むものとしては、イハナ、ヤマメ、アブラハヤであつて前二者には體側に著しい斑紋を有して居る。海と河とを上下する魚としてはサケ、マス、アユ、ウナギ等にしてウナギは東郷池の名物である。

ワカサギ（湖山池の名産である）ナマヅ、ドジョウ、シマドジョウ、タナゴ、ヤリタナゴ、モロコ、カマツカ、ヒガヒ、モツゴ、ウグヒ、オヒカハ（ハエ）、コヒ、フナ、メダカ、イトヨ（トゲウオと稱し水草の間に巣を營みその中に産卵する、平地の河川に普通である）ボラ（湖山池、東郷池には饒産する）ドンコ、マハゼ、ゴクラクハゼ、ヤツメウナギ、アユカケ、

昆虫類は本縣産のものだけでも實に無數に上ると思ふ。本校では其の中千種類餘を採集して標本に製作して居る。一々之を記載する紙面を持たない。其の中著しいもの二三について述べて見る。

モンキアゲハ（鳥取市及岩美郡大岩）。ギフテフ（一名ダンダラテフ、幼虫の食物はウスバサイシン、カンアフヒ、にして鳥取市久松山に産し、特に圓護寺に越す路上に多し）。アサギマダラ（大山頂山）、ミヤマカラスアゲハ（大山）クマゼミ（日本海に面する北日本の土地には殆んど棲息して居ないが我が鳥取縣に於ては極く少數ではあるが之を見る）、エゾゼミ（大山扇山、那岐山等の山地には普通なれども平地には之を見る事が出來ない。）

ミヤマフキバツタ（深山だけに棲息する）。

甲殼類中著しいものは、ズワイガニ、（地方名雄をマツバガニ、雌をオヤガニ、と云ふ）

タラバガニ（北海道地方では饒産し名産となつてゐるが、當地方の海中に於ては其の數少なく多分棲息地の南限近くではないかと思はれる、當地方カニ類中最大である）軟體動物は、日本に海産するタコブネは雌のみ大形の貝殼を着けて居る。

アカガヒ（中海に多數棲息して居る）

本校生徒が鳥取縣の沿岸で採集した貝殼は約百種に上るが省略する。

第六章　大　山（國立公園）

大山は白山火山帶に屬する中國第一の高山であり又名山である。俗に伯耆富士或は出雲富士と呼んで居る。其の容姿雄大にして高さ實に海拔一、七一三米に達し、西は日野川、東は天神川に至る三〇粁、南は旭川、北は日本海に達する二五粁の宏大な楕圓狀の地區を占めて蟠居してゐる。秀麗な姿は何れより眺めても佳であるが米子市、弓ヶ濱、島根半島、松江市方面より望見するが最もよい

大山の今日の形態を構成した火山活動は二期に區別すべきである。其の第一期は舊い獨立火丘建設の火山活動である。即ち大山の周圍に存在する、孝靈山（七五一米）船上山（九七四米）、矢筈山（一三五九米）、烏ヶ山（一三八八米）、鍔拔山（七〇五米）等は此の期に生じた火山であるから、甚だしく浸蝕作用を受けて居る。第二期は即ち主峰大山の噴出した時期である其の爲めに大山から流れ出した泥流其の他の噴出物が舊い獨立火丘に衝き當つて其の後には廻りかね、獨立火丘の南側に大山があれば、其の火丘の北側には水田の發達した平地が出來て居る。淀江の附近に水田の發達して居るのは孝靈山等の舊い火丘が大山からの押出し物の侵入を堰き止めて居るからである。

麓にある大山寺に向つて馬蹄形の山脊をなして山頂部からしきりに山崩れを起し草木の殆んど生育して居ない所は爆裂火口と思はれる。又山頂にある濕地の窪地は恐らく噴火口の趾であらう。

大山火山は火山錐と裾野との境界極めて明瞭にして火山錐は裾野の緩傾斜の部分より突兀として屹立して標式的トロイデ式火山である。

噴出された岩石は第一期のものと第二期のものとは異なり第一期のものは紫蘇輝石角閃安山岩であるが、第二期のもの即ち主峰大山のものは角閃石、黑雲母、及び白い斜長石の斑晶を含む角閃安山岩である。裾野は殆んど火山噴出物である。

山頂の眺望は頗る宏濶で、中國山川歷々と双眸にあつまり、日本海の浩蕩際涯なく遙に隱岐の島を望み、近くは弓ヶ濱の砂嘴長く海中に突出し白砂青松其の間に點綴し偉觀を現出して居る。又南方山陽一帶を一眺の中に收め瀨戸內海を隔てゝ四國を雲霞の中に認むる事が出來る。特に山頂の御來光は一種云ふ可からざる靈感に打たれる。其の壯大なる眺望は實に天下に冠絕すると稱するも過賞では無い。

大山南麓には大山寺村がある。こゝには僧坊の跡があつて國幣小社大神山神社等の歷史的事實等に富み特別保護建物阿彌陀堂並に數多の國寶が現存する。

大山は以上の如く一般民衆の登山地として、又歷史家の研究資料あるのみならず自然科學上研究資料を有つて居る。吾々は鄕土研究の爲め數日間大山寺に宿泊し、貧弱ながらこゝに其の一端を記して見度いと思ふ。

岩石――角閃安山岩、（淡褐白色のものと、淡青白色のものとあり）

石基中に斑晶として、角閃石、黑雲母、短冊形の斜長石を含むで居る。河岸の斷崖をなす邊のものは板狀節理、柱狀節理の著しく現はれてゐる。

植　物　相

植物の豐富なる事、又大山獨特のもの、又中國地方唯一の高山植物地として其の特異性、系統上、分布上等研究すべき幾多のものがある。次ぎに大山の主要植物と思はれるものを垂直的分布によつて列記して見る。

（一）、山　麓　帶

ヤナギタンポヽ、ヤマハハコ、リユウノウギク、シロバナニガナ、ノコギリサウ、クルマバヒヨドリバナ。ツルニンジン
ヒナギキヤウ、キカラスウリ。マツムシサウ。ヒキヨモギ、クロバナヒキオコシ、タヽキマメ、ムラサキシキブ、イケマ、
ヤマチドメ、トチバニンジン、アリノタウグサ、アフヒスミレ、ヤマブダウ。ミヤマシキミ、サンセウ、イヌザンセウ、

フウロサウ。ネムノキ、シロツメクサ、コゴメウツギ、ワレモカウ、ヤマブキ、ウシコロシ、テリハノイバラ、ウメバチサウ。オキナグサ、イヌグサ、フシグロセンノオ、カナムグラ、シヤガ、キクバドコロ、モミヂドコロ、コモチシダ、

(二) 喬　木　帶

カニカウモリ、カノコサウ、ツルカノコサウ、ツルアリドホシ、ミゾホゝヅキ、ミヤマタウバナ、ジヤカウサウ、アキノタムラサウ、オホルリサウ、アケボノサウ、イチヤクサウ。ヤマバウシ、ミヅキ、クマノミヅキ、ウマノミヅバ、フサザクラ、マンサク　カクレミノ、ハリギリ、タニタデ、ネジキ、ナツツバキ、クロソヨゴ、ツリバナ、ミヤマハハソ、カヘデ、イタヤカヘデ、ミヤマカタバミ、トチノキ。ミヤマザクラ、ウラジロノキ、ウハミズザクラ、クサアヂサイ、ミヤマネコノメサウ。ネコノメサウ。ホホノキ、ミヤマタニソバ、カンアフヒ、ヤドリギ、ユヅリハ。ムカゴイラクサ、イタビカヅラ、ブナ、イヌブナ、アラガシ、サハシバ、クマシデ、サハグルミ、ナルコユリ、ヤマホトトギス、チゴユリ、エンレイサウ。タチシホデ、ユキザサ、ツクバネサウ、クルマバツクバネサウ。エビネ、ヌカボシサウ、タニスゲ、クヂヤクシダ、リヨウメンシダ。ジユウモンジシダ、ヤマソテツ、ミヤマノキシノブ、

(三) 灌　木　帶

ソバナ、タニウツギ、ミヤマガマズミ、ハコネウツギ、ヘウタンボク。オホカメノキ、クルマバサウ、ハナイカダ、シシウド、ウド、ミヤマタニタデ、ミヤマイボタノキ、コバノトネリコ、サハフタギ、アクシバ、ホツツジ、ハナヒリノキ、シラタマノキ、ミツバツツジ、リヤウブ、ウリノキ、キブシ、ツルツゲ、ウメモドキ、イヌツゲ、ミネカヘデ、ハウチハカヘデ、ウリハダカヘデ、コマユミ、シモツケ、ハスノハイチゴ、シモツケサウ、ノリウツギ、フナバラサウ。サンカエフ、ヘビノボラズ。ヤマシヤクヤク、クロモジ、シデコブシ、ミヤマハンノキ、ナラ、ヤマハンノキ、ツノハシバミ、ヒメヤシヤブシ、ダイセンヤナギ、キンラン、キヤラボク、マンネンスギ、タカネヒカゲノカヅラ、ホソバノタウゲシバ、クマザサ、トクサ、

(四) 草　木　帶

オトコヨモギ、ヤマアザミ、ミヤマコウゾリナ、コゴメグサ、シホガマギク、クガイサウ。ダイセンクワガタ、イハカガミ、コイハカガミ、イハアカバナ、ツガザクラ、コメバツガザクラ、イハナシ、イハオトギリサウ。シコクフウロ、イハキンバイ、ミヤマダイコンサウ。ダイモンヂサウ。イハハタザネ、ヤマトリカブト、ミヤマカラマツ、トリカブト、ヤマヲダマキ、イハツメクサ、コアカソ、チヤボゼキショウ、ネバリノギラン、ギバウシ、マヒヅルサウ。シユロサウ、ミヤマヌカボ、ウシノケグサ、クラマゴケ、ヘビノネゴザ、イハデンダ、オホバキスミレ、イハオトギリサウ。

以上、山麓帶、喬木帶、灌木帶及草木帶には尚ほ多數の植物があるけれども紙數の都合上比較的普通のものは總て之が記載を省略し、大山の垂直分布の大略を記したのである。但し吾々の蒐集したものゝ中必要と思ふものは大低記載した積りである。他日機會あらば大山植物目錄の詳細なるものを作り度いと思つて居る。

大山の植物の中著しきものについて二三書き添へて置き度いと思ふ。

キヤラボクは天然記念物として内務省より指定せられて採集を禁止されて居る、其の理由は天然記念物の項を參考にされたい

喬木帶の大部分をなして居るブナの自然林は又他に餘り例のない偉觀である、北海道の樣な寒地では平地に繁茂して居るが次第に南下するに從つて山地のみに生育し本縣では大山の喬木帶、氷の山の頂上等に殆んど純林を存して居る。斯樣に植物分布上興味あるものであつて大山のブナ純林は何時までも保護を加へなければならぬ、斯樣にする事によつて國立公園としての異彩を保つことが出來る。其の外ナツツバキは夏季白花の美花を開く。

草木帶には以上の如く多數の植物あれども其の中純高山植物としてはダイセンクハガタ、コイハカゞミ、コゴメグサ、マヒヅ

ルサウ、イハアカバナ、ツガザクラ、コメバツガザクラ、イハキンバイ、ダイモンヂサウ、イハハタザネ、ミヤマオダマキ、イハツメクサ、ミヤマヌカボ、チヤボゼキシヨウ、イハナシ、シコクフウロ、イハオトギリサウ等にして夏季登山すれば頂上の岩間に美しい花を咲かせ特異の情景を呈して居る。

動　物　相――

昭和七年七月吾々は植物採集の際兼ねて昆蟲採集をした。驚くべきは百花咲き亂れてゐる頂上の草木帶は無數の昆蟲が花から花へと忙しさうに飛んで平地では見る事の出來ぬ景觀である。これ平坦地では已に花が終り昆蟲は此の頂上の花を訪づれて居るのである。良く寒い高山で花粉の媒介が如何にして行はれるかと云ふ問に對しては說明する迄も無い事である。今其の採集したものを記載して置く。

蝶類――アサギマダラ、ジヤカウアゲハ、アゲハ、キアゲハ、モンキアゲハ、ヲナガアゲハ、クロアゲハ、アオスヂテフ、カラスアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、アヲバセセリ、ヒカゲテフ、ジヤノメテフ、ルリタテハ、キタテハ、ヒオドシテフ。モンシロテフ、スヂグロテフ、ウスモシロテフ、ルリシジミ、ムラサキシジミ、ダイセンシジミ、ゴイシシジミ、ベニシジミ、モンキテフ、キテフ、ツマクロキテフ、ツマキテフ、ヒメウラナミジヤノメ、キマダラヒカゲ、テングテフ、ウラギンシジミ、アカタテハ、ヒメアカタテハ、コミスヂテフ、コムラサキ、オホウラギンヘウモンテフ、ゴマダラテフ、ウラギンヘウモン、オホチヤバネセセリ、イチモヂセセリ、メスグロヘウモン、ツバメシジミ、ヲナガシジミ、ミドリシジミ、ミドリヘウモン、シータテハ、サカハチテフ、スミナガシ、イチモンジテフ、コツバメ、ヤマトシジミ、キマダラセセリ、シジミテフ、アカシジミ、スヂグロチヤハネセセリ、ダイメウセセリ、ヘウモンモドキ、オホウラギンヘウモン、コヘウモンモドキ、ウラジロミドリシジミ、コジヤノメテフ

雙翅類――キンバヘ、ヒメキンバヘ、クロバヘ、ベツコウバヘ、ヒメベツコウバヘ、シマバヘ、ビロウドツリアブ、ウマバヘ、アシブトハナアブ、ハナアブ、ヒラタアブ、アカウシアブ、ウシアブ、シロウシアブ、キイロウシアブ、ノラハナアブ、クロハナアブ、クロナガハナアブ、ホソヒラタアブ、オホヒラタアブ、アシナガキンバヘ、クロバネツリアブ、アオメアブ、ムシヒキアブ、クロメクラアブ、ブユ、オホハナアブ

膜翅目――ミツバチ、ヒメバチ、ハキリバチ、ヒゲナガバチ、オホハキリバチ、ヤマバチ、アカバチ、アシナガバチ、

有吻類――ヒグラシ、エゾゼミ、ツクツクボウシ、ミンミン、チツチゼミ、アブラゼミ、ニイニイゼミ

直翅類――カマキリ、シヤウリヤウバツタ、クルマバツタ、ツマグロイナゴ、セスヂイナゴ、アオマツムシ、キリギリス、イブキギス、クダマキダマシ

脈翅類――ヤンマ、ノシメトンボ、ミヤマアカネ、ウスバキトンボ

以上昆蟲類の中ダイセンシジミ、アサギマダラ、ヘウモンモドキ、ミヤマカラスアゲハ、ウスモンシロテフ、エゾゼミ、イブキギス、等は他の地方では餘り見る事が出來ないのである。

大山には鳥類としてイハツバメ、山頂の斷崖に住み、谷間にウグヒス樹間にホト、ギス樹の鳴聲を聞くも趣味に富む。其の他數多棲息地として居るのであるが此處に記する事は出來ない。

近時登山熱の盛んなるに伴ひ、又國立公園となつた大山は年を逐うて次第に登山客が殺到する事と思ふ。自然科學上幾多の貴重資料が無理解なる人々に依つて失はるゝは甚だ殘念に思ふのである。相當の保護は已に加へられて居るが特に絶滅しかけてゐる高山植物には一層の保護を加へる必要がある。そして大山の特異性を何時迄も失はぬ樣にしなければならぬ。

第七章　湖沼

本縣に於ける湖沼は海岸線近くに存し、南部は山地に北部は砂丘にて圍まれ其の成因の同一なるを想像するに難くない。卽ち曾つては日本海の灣入した部分が河川により搬出されたる土砂の堆積によりて灣口を閉塞せられたる潟湖である。其の主なるものは湯山池、多鯰ケ池、湖山池、東郷池を數へることが出來る。

(一)、湯山池

湖沼中東部に位し、岩美郡福部村に存す。往時は東海士、南の山湯山の北濱湯山等は何れも湖底であつたが近年次第に縮小せられ水田に化しつゝありしが昭和七年春夏の候砂丘の砂にて埋立て全く水田となり其の趾全く絶へた。而して其の埋立ての際湖底の泥土を搬出した際數千の貝類が現はれ曾つて灣中に生棲したものであつて、海底であつたところを證明してゐる。其の貝類の中主なるものを示すと次の如し。

カキ、ウミニナ、アサリ、サルボウ。

以上の標本は貴重なるものとして本校郷土室に保存してゐる、就中カキ多數湖底より發掘せられ本校には百餘個標本として採取し其の形態の種々なるに驚く位である、或る者は長さ三十糎幅僅かに七糎又或るものは殆んど圓形を呈して居る。

湯山池に埋立て前迄生存せる生物としては、

貝類――カラスガヒ（長徑一尺位の大形のもの、本校に標本として保存して居る）
　タニシ、ニナ、モノアラガヒ

魚類――タナゴ、ヤリタナゴ、フナ、コヒ、モロコ、ワカサギ（アマサギ）メダカ、ドジョウ、シマドジョウ、ウグヒ、

ナマズ、ドンコ、ウナギ

植物――フサモ、キクモ、アブノメ、ヒシ、ヒメヒシ、エビモ、ミヅアフヒ、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、ホツスモ

(二)、多鯰ケ池

多鯰池は湯山池の西部に位し、鳥取市の東にある。松樹茂れる第三紀の丘陵間の凹所に生じ最大深度十五米に達し、山陰地方に於ける湖沼中其の深度第一位に位せり。最深所は湖の中心よりも北部にある。風光至つて良く一日の散策地としての好適地である。南岸は凝灰岩より成り、北岸は粘土層の上部に砂粒を被つて居る、北方より吹き來る海風により砂粒は運ばれ次第に其の面積を縮少しつゝある。

鑛物――碧玉、紫水晶、鈴石（褐鐵鑛）硅化木、植物の葉の化石、（何づれも南岸に產出す、）

動物――沼海綿（祖當の深所に生育し綠色にして其の丈け一尺位、多數の枝を分かつ）カラス貝、ニナ、ハゼ、フナ、コヒ

　ワカサギ（アマサギ）（ハゼの一種類中には體の長大なるものあり、本湖特殊と思はる）

植物――シヤジクモ、ヌハナ、コバノヒルムシロ、ミヅヒキモ、エビモ、ホツスモ、アシ、マコモ、カウホネ、ヒメホタルキ、アギナシ、ヒシ

多鯰ケ池湖畔の岩石には海岸の岩石に見る樣な貝類の穿孔せる孔の存在するにより往時海岸なりし證跡が明かである。

(三)、湖山池

湖山湖は鳥取市の西部約四粁の地點に位し、湖の南部は第三紀層の丘陵なれど東側に第四紀層の低き臺地あり、北は砂丘によりて僅かに海と隔てり。湖中には沖生島、青島、團子島等散在して非常によい景色である。湖の最深部は砂丘近くにあるが此

の方面を以つて湖水が海に連絡したものを示すものである。湖山村附近の平地は千代川の沖積物によりて成生し千代川は思ふに往時灣入せる湖山池に流入せしが海波の嵎め灣口を閉ざし終に湖と化せしめ、千代川の沖積作用尚ほ止まない。漸次湖を西方に縮少させたものである。

動物――カラス貝、たにし、にな、フナ、コヒ、ワカサギ（アマサギ）ベラ（イナ）、ナマズ、ウナギ、ハゼ、湖山蝦）、テナガエビ、タナゴ、ウグヒ、

以上の中、フナ、ボラ、アマサギは相當の産額に達し、湖山蝦は湖山煮として縣外に出す。

植物――マコモ、ヨシ、スキレン、ハス、フサモ、キクモ、エビモ、ホツスモ、コバノヒルムシロ、トチカガミ、イトモ、ミゾワラビ、

湖山池の利用

以上述べたる如く湖山池は淡水の魚業に適するばかりでなく多數の水鳥渡來するから之を捕獲する場所に適し、鳥取市近郊に於ける濱坂砂丘と相待つて唯一の遊覽地である。又近時航空路が開けるやうになつて絶好の着水場として使用されつゝあり、更に進んで云へば賀露港より湖山池に通ずるより良き水路が開け船によつて濱坂砂丘に連絡するならば多數の外客を鳥取市に下車せしむるに充分な遊覽地とならう。

（四）、東郷池

東郷池は海岸線近く縣の略々中央に位し天神川の東部近くにある周圍十一粁ばかりの湖である。南部東部及び北部は丘陵に取り圍まれ、西部のみ開け西北にある橋津村にて湖水の水は海に注いで居る。湖の西北部は低平なる天神川流域の平野をなせりこの低地は東郷池の排水口の成生したる所であつて、今日の田後、長江附近は嘗つて東郷池の排水路であつたところである。

天神川の水も此の方面より東郷池に注いで居たのである。

東郷池はもと橋津附近より入江狀をなして海と通じ囊狀の灣入たりしが天神川の運搬による土砂によりて灣口を閉ざされ成生したものである。そして天神川の三角洲は益々發達し、今日の排水河たる橋津川を東北の山麓に押し移したのである。斯く天神川は一面東郷池の成生に與つて力ありと雖も、一面には之を死滅に導く作用もなしたるものにして、元文年間天神川の川筋を開鑿し直ちに海に注がしめて東郷池の縮少を防止せりと云ふ。

東郷池の深度は約二米にして、湖中に漏斗狀を呈せる窪地ありて其の中央部は七、五米に達するところあり、こゝは以前は湧泉のあるところである。湖中の生物は次の通りである。

動物――ほら（いな）うなぎ（兩者共多數生息して此の地方の名物となつて居る）こひ、ふな

植物――ふさも、いとも、きんぎよも、ひし、とちかゞみ、まこも、よし、えびも、みづあふひ、いばらも、

湖畔には松崎、東郷、淺津溫泉ありて湖上の船遊と共に有名である。

第八章　砂　丘

(一)、成因及地質、岩石

砂丘は我が國諸地方の海岸に存し、我が鳥取縣海岸にも三大砂丘あり。卽ち夜見ヶ濱砂丘、天神川砂丘、千代川砂丘が是である。是等の砂丘は其の成因を同一にし、中國地方を西北に偏し東西に走る中國山脈に其の原料を仰いで急流をなして日本海に注ぐ、日野川、天神川、千代川の三大河川に依りて日本海に流出され、沈積したる砂粒は北方より來る强風に依つて海岸に打ち上げられ上記三大河口の兩翼に廣大なる三砂丘を形成してゐる。

砂丘を形成してゐる砂粒は大部分本縣地質の主要部分を成してゐる。花崗名、秩父古成層、第三紀層の石英粒に其の原料を仰ぎ貝破片等を混じて黃白色を呈して居る。

弓ヶ濱砂丘は其の地形弓狀を呈して居る爲め弓ヶ濱の名稱は與へられて居るのである。此の砂嘴の成因は其の材料を日野川上流の中國山脈を構成する花崗岩の砂粒と、此の地方獨特の風とは其の主要なるものである。境測候所の風向統計に依れば八、十一、十二月を除くと大部分北又は北東の風が多くて、日野川より流出される、土砂は漸く偏東風と北風の共同的の力で海岸線に並行に西に運ばれて行くが其の北方に横はる二三百米の高度の島根半島の爲めに北風は次第に弱められて砂洲は偏東風の獨占的の威力でそれに直角に近く發達して現在の地形を呈すに至つたのである。更に注意すべきは、何故中海の東南隅に幅二、三粁の入海を殘したかは米子市から砂嘴の內側に沿ひて、彦名、安倍附近に石英粗面岩の岩盤の露出することに依つて解決されると思はれる。次ぎに弓ヶ濱は何故完全に島根半島と連結しなかつたか、それは中海美保灣は共に南方に淺く北方に深くなつて居る。この深度の大なる事と潮流の爲めに僅々三百米の幅を島根半島との間に保つて居る。現在では砂嘴は特に半島の海岸線に平行に境港より東方に向つて發達する傾向を示して居る、弓ヶ濱は主として桑園に利用せられて居る爲め濱の日耕が產出せられ年產額數千圓に達して居る。又砂嘴の基部に米子市、先端に境港がある、前者は新興工業都市として著しく發達し、後者は水上交通要所として南方の山地と中海沿岸の各地の連結點として又近くは滿洲、朝鮮等の連絡成り益々人口を增加しつゝある

砂丘の中千代川を中心とする千代川砂丘は最大にして千代川より東部を濱坂砂丘と云ひ西部を賀露砂丘と云ふ。共に下部は第四紀古層に屬し砂を以つて被はれ臺地を形成して居るのである。東部の濱坂砂丘は其の面積四千町歩を占有し起伏の變化に富みオアシスあり、湖沼あり、摺鉢あり其の他砂丘の動植物、砂粒の移動等自然科學上幾多の研究資料を埋藏して居る。

(二)、鑛　物

(一) 高師高僧――濱坂砂丘の脊附近より產出し脊つて植物の根に褐鐵鑛が附着し圓筒形をなして居る。

(二) 三角石――砂丘上に見え三角形を呈せる岩石にして、砂粒の摩察によりて最も安定せる形狀になつたのである。

(三) 砂鐵――日野川砂丘中に見るものであつて日野川上流より運搬せられ製精して、砂鐵を採取する。

(三)、摺　鉢

濱坂砂丘の中には約三十個ばかりの摺鉢形の窪地があつて他の地方に見る事が出來ない奇觀を呈してゐる。此の成因に關してはその說區々なれども主なるもの次の通りです。

(一) 旋風により土砂の捲き上げられたゝめ出來たもの。

(二) 隕石の落下により生じたとの說。

（三）湧水の爲め土砂が搬出され生じたるもの。

（四）、湧泉（オアシス）

濱坂砂丘馬の脊附近の第四紀古層中より多量の水が湧出し砂丘中にて消失してゐる。爲めに俗に尻無川と云つてゐる。四季を通じて略水量を同じくし、夏季炎天打ち續く候になつてもコン〳〵として湧出する點より考察すれば其の水源は廣範圍に及んで居る事がわかる。

（五）、砂丘植物

環境、植物、適應

植物の發芽、生長、開花、結實、冬眠等の生理作用は光、熱、水、空氣、外圍要素が直接に間接に或は強く或は弱く瞬時マして作用しないときはない。是等生理作用に關係する外圍要素の總和を環境と云つてゐる。

環境要素は數多く又種々の性質のものがある。環境異なるに從つて是等の要素は量に於ても又質に於ても變化するから環境と植物との關係は複雑である。植物が其の環境に調和して生活して居る狀態を適應と云ふ。故に適應は植物の環境に適した一つの生理作用の表現である。植物の生理作用が環境に適應して行はるゝ上は其の形態構造も此の環境に適合すべきことが豫期出來る。事實異なる環境に適應した植物は各の其の特殊の形態構造をもつて此の事實を證明してゐる。

氣候温和地味豐かな土地卽ち我等の周圍に展開される自然は多くの場合植物の生育に好適の地で環境要素は最大域にある。卽ち飽和狀態にあるから植物は求むるものを大抵與へられるから自然環境が何れ程植物の構造形態更に其の作用上に働くか目撃し難い。而し特殊の環境では植物と密接な關係あることを知ることが出來る。海岸植物等は其の例である。

植物が或る環境の下に生活するのは環境の働に應じ變化に和して行くからである。一方如何なる環境要素が植物の生理作用に働くかを探究し、他方この要素の働に對し如何なる反應をなすかを精査する必要がある。環境、反應の分析は手段で終局は合成である。個々の要素は全體の働の加何なる役目をなすか、種々の要素中何づれが優れて働くかを知らねばならぬ。

環境要素（次の如く分類する）

（一）氣候要素――光、熱、空氣中の炭酸瓦斯

（二）

（1）土壤の物理的性質――構造、水分、溫度、空氣

（2）土壤の化學的性質――養分含量、酸性度

（3）三土壤中の微生物

（三）地位要素――高度、方位、傾斜等

（四）生物要素――動物、人、植物等

（五）水要素――降水量、大氣の濕度、土中の濕度

以上は便宜上の分類で總ての要素は他の要素と相關聯するもので獨立的要素として働く場合は殆んと無い。

砂丘としての環境要素

（一）水要素――水分少なく特に夏季は乾燥す。

（二）光要素――夏季陽光强し。

（三）風要素――風强し、特に冬季に於て北方よりの風强し。

（四）溫度要素――夏季高溫、九月十日（晴天）砂上六三度C

（五）養分要素――少なし。

（六）土性要素――砂の移動甚だし、特に北より南に向つて。

（七）化學的要素――鹽分を含むこと他より多し。

體制形質と適應形質

植物體の保持する形質が總て其の生ずる土地の環境に從つて變るのではない。

ネーゲリが植物の形態を體制形質と適應形質とに分ち前者は環境の如何に關係なく各種屬に固定した形質で生殖器官である、花果實は其れである後者は環境の如何により變化する形質で榮養器官たる根、莖、葉は其れである。例へば光線强弱に依りて植物の莖葉に著しき變化を來すことは明かなことである。

分類學者は生殖器官を緊要器官と稱し、環境に關係なく其の儘遺傳するから種屬に固定せるものである。榮養器官を不緊要器官と云ひ外圍狀況の如何により一時的にも形態構造を變化するから種屬固有の特徴とならぬ。而し種々の例外がある。

即ち花瓣の色が陽地に生ずる場合と陰地に生ずる場合とによつて、著しく其の濃度を異にすると同じである。

苔類が或る特殊の環境に適應して行く上に適應形質が必ずしも同じである必要はない。一般に植物は種々の形態で同樣の結果を收める。例へば海岸植物に見るのと同じである。

本縣產砂丘植物

（一）砂丘獨特の植物

菊科――ハマグルマ、ハマニガナ、イソノギク

繖形科――ハマボウフウ、ハマゼリ

荳科――ハマエンドウ

玄參科――ウンラン

藜科――オカヒヂキ

十字科――ハマハタザオ

茨藻科ハマビシ

櫻草科――ハマボツス

禾本科――ケカモノハシ、オニシバ

景天科――ハマベンケイザウ

旋花科――ハマヒルガホ

紫草科――スナビキサウ

莎草科――コウボウムギ、ビロウドテンツキ、コウボウシバ

馬鞭草――ハマコウ

ハマウツボ科――ハマウツボ（寄生）

薔薇科――ハマナス（內務省指定天然記念物）

（二）砂丘及び普通の土地に生育する植物

荳科――コマツナギ、メドハギ

菊科――アキノキリンサウ、カハラヨモギ

金絲桃科――オトギリザウ

禾本科ハタガヤ、メヒヂハ、ギヤウギジバ
松杉科――ハヒネズ
アハダンゴ科――シヨウロ
莎草科――チヤボミノボロスゲ
石竹科――カハラナデシコ

砂丘植物の適應形態、構造、生理

(一) 根について

一、髭根型

多數の髭狀の根は四方に常に長く出てゐる。

例　禾本科――ケカモノハシ
　　莎草科――コウボウムギ、バタガヤ、ビロウドテンツキ

二、直立型

一本の直立せる主根は非常に長くこれより側根及び多數の根毛を出す。

例　繖形科――ハマボウフ　　玄參科――ウンラン
　　十字科――ハマハタザオ　　荳　科――コマツナギ
　　藜　科――オカヒヂギ　　櫻草科――ハマボツス
　　蓼　科――ハマビシ

三、地下莖の節より生ずる型

地下莖は一般に非常に長く或る種では三、四米にも達するものがある。其の地下莖の各節から髭狀の根を生ずる。

例　旋花科――ハマヒルガホ　　荳　科――ハマエンドウ
　　禾本科――オニシバ　　紫草科――スナビキサウ
　　菊　科――ハマグルマ、ハマニガナ

何づれの型にせよ。地下器官である根は他の環境のものと比較すれば特によく發達する。かゝる特徴を根に有することは生育上諸種の便がある。卽ち水の吸收を便にし、風の影響に耐へ砂の移動を少くし養分貯藏をする。砂中の水分には一乃至六%の鹽分を含有するから細胞の滲透壓が大きい。根は大部分多年生根である。

(二) 莖について

一、地下莖

非常に長大である。水分の貯蓄、養分の貯藏、植物體の固定、砂の移動を防ぐ用をする。

二、地上莖

砂丘に生育する植物は一般に低く中にはメドハギ、ハマゴウ、等の如く地上を匍匐するものがある。陽光、風の強いためである。中空なる莖を有するものは維管束から發達するから風に對して屈折抵抗が大きい。直莖の1/5乃至1/9中空であれば中實のものより屈折抵抗が大きいと云はれてゐる。

又クチクラ層はよく發達する。是れ水分の發散を防ぎ外傷を減ずるに便である。

(三) 葉について

一般に小形である。小形なれば風が強くても裂かれることが少ない。陽光は強いから柵狀組織發達して自然厚くなり小形となる。反對に陽光弱ければ海綿狀組織發達し葉は大形となる。

クチクラ層よく發達し過度の發散を防ぎ、外部からの刺戟に抵抗し葉肉を保護する。表皮は一層から成るもの又二層から成るものがある。一層のものは大きく發散防止、保强、水液の臨時貯藏等の諸作用を兼有してゐる。二層のものはハマゴウ、ハマニガナ、等であつて表層は發散防止、强保の用をなし次層は貯水の用をなしてゐる。此の此く組織の分化せるものは生存に一層有効である。

密毛を有するものもある。例へばハマゴウのやうである。かゝる狀態にあれば發散を緩和し、又强光、氣溫の急變を緩和する。

柵狀組織よく發達し爲に葉は厚い。これ强光のためである。柵狀組織發達すれば葉は厚くなり、海綿狀組織發達すれば葉は廣くなる。强光であるから葉綠體の數量が多い。柵狀組織は一層乃至六七層あつて二層のものは其の細胞著しく長くて他の環境の植物に見ることは稀である。此の事實は他の地にも生育するコマツナギ、メドハギ、等について明らかに證明するところである。今柵狀組織が幾層の細胞からなつてゐるかを示し他の普通の土地に生ずる植物が多く一乃至三層から成つてゐるのに比較して、如何によく發達して居るかを知ることが出來る。

一　層――ハマエンドウ、ハマビシ

二　層――コマツナギ、スナビキサウ、ハムボツス、

三　層――イソノギク、ハマゴウ、ハマボウフ、ハマヒルガホ、

四　層――ハマニガナ、

六七層――ハマゲルマ、

同化作用――呼吸作用――溫度の關係

正常の場合では晝間同化作用に依つて得た生成分を約半分夜間に消耗する。若し夜間の溫度高ければ結局飢餓狀態となる。海岸植物は夜間高溫でも晝間も又溫度高く柵狀組織よく發達し同化作用盛に行はれるから消耗と生成の平均がとれることになる。此の意味に於て柵狀組織が他の環境植物よりも發達しなければならぬ理由を解することが出來る。一年中に就いて見れば生育中に充分同化物質を作り冬季の消耗を補足する。冬季の高溫で體內物質の消耗の大なることは翌春の活動に利益がない。

單子葉植物の葉の柵狀組織は體制形質と認むべきもので環境の如何で變化しない。

貯水組織を有するものがある。これも環境に適應した形質と見ることが出來る。例へば

ハマゴウ、ハマグルマ、ハマボウフ、ハマヒルガホ等である。晝の高溫時には蒸散盛に行はれ水分の供給不足するからかゝる組織を有することは好適である。

柔組織發達して多肉をなすオカヒヂキ、タイトゴメ等あつて生存するに適するものがある。葉肉內の通氣間隙少く發散を少なくする。

氣孔の數は一粍平方に付き　タイトゴメ　四〇、ハマビシ　八五、ハマグルマ　一八九、ハマボウフ　三二〇

氣孔の位置は下面にあるもの大多數、周圍にあるものはオカヒヂキ、上下兩面にあるものはハマグルマ、であつて下面は上面より遙かに多い。

氣孔の開閉と發散量との關係は從來一致する樣に考へられて居たが最近の研究で餘り關係が無い樣に云ひ出された。中生植物の如くクチクラ發散をなすものには風は影響し更にクチクラ發散主である濕生植物は風に依り支配せられ、乾生植物には殆んど影響しない。午前中に葉が最大蒸發量を示すときは根からの水分吸收が應じて變化せぬため植物體內の水分關係は普く負となり、午後葉は凋萎する。然るに夜間發散は止み、吸收は持續する故負となつた水量は回復され翌朝迄に植物體は膨壓の狀態となる。乾燥地の植物は葉肉の細胞は水を失ひ自然その滲透壓が高まり、氣孔は閉いた儘發散は自動的に著しく減

少し、内部的には細胞の膨脹も減じた狀態にあるが葉は尙凋萎を示さない程度にあるので發散調節上主要な働である。氣孔が發散盛な晝開き發散無き夜閉づるは何を物語るか。氣孔に於ては利益相反する同化作用と發散作用が行はる。未解決の問題である。

結　論

(一) 地中の器官よく發達し環境に適應す。
(二) 細胞の滲透壓大なり。
(三) 多年生の植物多し。
(四) 丈が一般に低く或るものは地上を匍匐す。
(五) 維官束よく發達し堅固なり。
(六) クチクラ層よく發達す。
(七) 表皮細胞には分化せるものがある。
(八) 柵狀組織よく發達す。
(九) 貯水組織のあるものあり。
(十) 通氣間隙少なし。
(十一) 海綿狀組織の發達惡し。

以上の點は植物が砂丘と云ふ特殊の環境に生存するに最も好適である。砂丘に生育する植物には他と比較して特殊の形質のあることが解る。

(六)、砂丘の動物(昆蟲)

盛夏 65°C の高溫を示す特殊の環境にある砂丘を好む獨特の昆虫は凡そ次の通りである。

鞘翅類――カハラハミヨウ
双翅類――メセセタバヘ。シラゲムシヒキ、シラゲムシヒキの一種
直翅類――ヒナバツタ。ハサミムシ(夜)
膜翅類――ハラナガバチ、モンパラナガバチ

(七)、砂丘の利用

縣下の廣大なる砂丘を有する本縣としては之が利用に意を用ひなければならぬ從來も西伯郡弓ヶ濱地方は特殊の綿の栽培をなし、甘藷、桑畑等は主産業をなし之に依りて生計を立てゝ居る者も多數に及んで居る、又天神川砂丘の一部分の葡萄、濱坂砂丘湯山地方のラツキヨウ、各地のハマチヤ、砂丘西瓜等は利用の主なるものである。一般に桑、砂丘西瓜甘藷が主として栽培せられて居る將來は植林或は防砂垣により次第に利用面積が擴大される事と思ふ。又濱坂砂丘の如き鳥取市に近く、風光絶雅なる土地は散筆地として、又冬期のスキー場として保健上、及體育上一定地域は公園とすべきが適當である。『來れよ砂丘、愛せよ森林』は何時までも繼續したい。

第九章　溫泉

本縣には頗る溫泉多く縣下十數ヶ所に湧出する、今其の溫泉名、所在地及溫泉の種類を示せば次の通りである。

岩井溫泉	（岩美郡岩井町）	鹽類泉
吉方溫泉	（鳥取市）	鹽類泉
末廣溫泉	（鳥取市）	鹽類泉
湯谷溫泉	（八頭郡西郷村）	鹽類泉
吉岡溫泉	（氣高郡吉岡村）	鹽類泉
濱村溫泉	（氣高郡正條村）	鹽類泉
勝見溫泉	（氣高郡正條村）	弱鹽類泉
東郷溫泉	（東伯郡東郷湖畔）	弱鹽類泉
淺津溫泉	（東伯郡東郷湖畔）	鹽類泉
松崎溫泉	（東伯郡東郷湖畔）	鹽類泉
三朝溫泉	（東伯郡三朝村）	ラヂウム鹽泉
山田溫泉	（東伯郡三朝村）	ラヂウム鹽泉
關金溫泉	（東伯郡矢送村）	鹽類泉
皆生溫泉	（西伯郡福生村）	弱食鹽泉

岩井溫泉

岩美郡蒲生川の南岸に在る。北方一帶の山は花崗岩で一段低い丘陵地は凝灰岩、頁岩、砂岩、礫岩より成れる第三紀層上部層で第三紀下層部は砂岩、頁岩より成り植物化石を介在して居る。又蒲生川西南の丘陵地は石英粗面岩と輝石安山岩及び其の集塊岩からなつて居る。溫泉は此の地盤の割目に沿ふて列んで居るものらしい。

鳥取溫泉（吉方溫泉、末廣溫泉）

鳥取市の南端に位し、沖積層の粘土、礫層から湧出して居る。東北には久松山あり東南には久松山より南方に連なる石英粗面岩あり、南方には第三紀頁岩層よりなる丘陵がある。久松山の花崗岩は主として石英と淡紅色又は白濁の長石とより成り長田神社入口近くでは花崗斑岩に移化するところがある。

石英粗面岩の斑晶は自形的石英と正長石とである之を要するに久松山の花崗岩塊が核心で花崗斑岩は其の緣邊らしく、第三紀の火山作用旺盛時代に石英粗面岩や凝灰岩が地盤の弱所を破りて噴出したものらしく、溫泉の本源は多分此の石英粗面岩にあるらしい。

吉方溫泉は明治三十七年鐵道暗渠工事の際偶然微溫水の湧出したことありそれに氣附いて鑿井を試みて得たものである。

久松山は急斜面を以つて西南に傾斜し其の麓にある湯所町には數百年前溫泉の湧出した傳說が殘つて居る。

末廣溫泉は吉方溫泉の西方に位し、近年相接近して十數ヶ所より鑿井によりて湧出して居る。西方に位置するもの程湧出量が大である。これ久松山の傾斜に基づくものある、爲めに東方に位置するものは湧出量を減じ中には全く湧出を止めたのもある。

溫泉の溫度は一樣でない。岩盤をなす花崗岩、石英粗面岩の割目より湧出した溫泉は第四紀層に出れば低溫の地下水と混和するから溫度が下がるのであるが割目に近い程溫度が高い筈である。泉源井は何れも深さ八十五尺乃至九十尺で硬い岩盤に達し

て居る。

湯谷温泉

石英粗面岩中に湧出して居る、温度低く加熱しなければ入浴に適せない。

吉岡温泉

此の地方は花崗岩より成る。此の花崗岩は鳥取市久松山のものに類似し黒雲母が少い種類である。温泉は此の花崗岩の裂罅より湧出するものである。

濱村温泉、勝見温泉

濱村温泉は氣高郡西條村海岸砂丘と、第四紀沖積層との境より湧出し暉見温泉は其の西南斑狀花崗岩の丘陵側から湧て居る。温泉地の東西兩側には低い丘陵地が南北に連り、其間に第四紀の狹長な低平地があり、海岸一帶は砂丘である。此の砂丘を浮村砂丘と云つて居る。東西兩側の丘陵の丘質は石英と正長石の巨晶を散點せる斑狀の黑雲母花崗岩で、濱村東方の丘陵上には花崗岩を貫いて角閃安山岩が出て居る。第四紀層は粘土と砂礫より成り、礫には安山岩、凝灰岩、花崗岩が多い。

温泉は砂又は砂礫層中から出るが其の本源は斑狀花崗岩に在ること疑ない。元湯の深さは甚だしい相異は無いのにも拘はらず各家に依つて其の温度を異にするは鑿井の深さに依るものであつて、泉温の高いのは地下岩盤の裂罅に近く、地下水の混入の少い爲である。大正十二年九月關東大震災後温泉に依り其の湧出量を增減したのは岩盤の割目に變動を及ぼした結果である。

湧出温度は 15°C である。

東郷池畔の温泉（東郷温泉、新東郷温泉、松崎温泉）

東郷池は北、東、南の三方山丘に圍まれ西の一方だけ第四紀の低地に接し池の西方約三粁の處を北流する天神川は、嘗て東

に迂曲し、下淺津の南で東郷池に注入した事がある。周圍の山丘は海拔三百乃至五百米で、餘り高峻で無く、基盤は黑雲母花崗岩で、之を貫いて先づ粗面岩、輝石安山岩の噴出があり、其の後更に玄武岩の噴出が起り臺地を作つたものである。温泉は基盤をなす花崗岩の裂罅より出て沖積を過ぎて湧出する。

三朝温泉、山田温泉

三朝温泉は花崗岩地に峽谷を作つて西北に流れる、三朝川の南岸にあり、山田温泉は其の北岸にある。共にラヂウム含有量の多いので有名である。南北の山は急傾斜を以て三朝川に臨み、高さは三、四百米位である、大部分は黑雲母花崗岩で往々石英や正長石の巨晶を含んで斑狀を呈して居る。山頂には玄武岩及び其集塊岩を戴いてゐる。北側の山脚には、第三紀凝灰質砂岩や貢岩が少し露はれ、第四紀砂礫の厚層に被はれてゐる。温泉源は花崗岩又は其岩脈中にあるらしい。温泉は是等の裂罅から湧き出るのである。

三朝には各温泉旅館の外東洋無類と稱すべきラヂウム療養所を有し共同浴室のほか、濕式吸入室及び乾式吸入室の設備があつて、入浴以外吸入によつてラヂウムガスを攝取する裝置になつてゐる。東洋第一のラヂウム温泉としての三朝温泉

世界温泉ラヂウム含有量調査成績對照表

國名	府縣名	地名	源泉温度攝氏	ラヂウム含量
伊太利		イスキヤ	五七、〇	三七二、〇〇 マッヘ
日本	鳥取	三朝	七一、〇	一四二、一四 マッヘ

墺太利	スカタイン	四六、〇	一四〇、二〇 マツヘ
日本	鳥取 關金	四二、〇	三三、五〇 マツヘ
日本	新潟 栃尾又	三九、〇	二五、八六 マツヘ
獨逸	バーテンバーテン	五九、〇	二四、〇〇 マツヘ
日本	宮城 遠刈田	五六、〇	一四、五八 マツヘ
日本	北海道 湯川	四八、〇	一三、二〇 マツヘ

以上の如く三朝温泉はラヂウム含有量に於て世界第二位東洋に於ては實に第一位にして他の追從を許さない。續いて關金は世界第四位東洋第二位を占めてゐる、其の他本縣温泉には勝見温泉、八、七五マツヘ、吉方温泉三、二八マツヘ、東郷温泉、三、〇七マツヘ、吉岡温泉二、八四マツヘ、等何れも本邦温泉中主なるものゝ中にある。

以上に述べた本縣下ラヂウム含有温泉の母岩を見れば、三朝、關金、勝見、吉岡は何づれも花崗岩で吉方、東郷は沖積層であるが、其下の岩盤は花崗岩又は石英粗面岩である。此の事實より押せばラヂウム、エマナチオンの豐富な鑛泉は花崗岩か又は石英斑岩、石英粗面岩の樣な酸性の火成岩から湧き出るのに多く、泉温や成分には關係無い樣である。これは酸性火成岩が他の岩石に比して、ラヂウムを含有すること概して最も多い爲であらう。

三朝温泉は三朝川の清流に臨みて景色よく夏季に於てはカヂカガヘルの鳴聲は雅趣に富んでゐる。

關金温泉

關金温泉は倉吉町から小鴨川に沿ふて八粁程東南に入り込んだ狹い溪谷にある。

地質は三朝と同じく黑雲母花崗岩である。花崗岩の上に第三紀層があつて花崗岩に接する處は圓礫岩、其上は砂質頁岩で山頂や山側に露はれ、殆んど水平層で、岩質は軟弱である。温泉は花崗岩の割目から湧き出てゐる。

皆生温泉

米子市の北部に位し、弓ヶ濱砂嘴の基部海岸近くにある。

從來は低温であつたが、大正十二年鑿井に依つて新湯を得た。其の鑿井の實況によると、地表下深さ十尺迄は砂で、其より二十尺迄の間は角岩、安山岩片を雜ふる礫層があり、地表下五十尺の處に雲母を交ふる砂があつて、貝類を介在し、深さ六十尺の處は粗砂で、八十尺に至りて砂礫となり、九十尺の處は花崗岩、角岩、安山岩片を雜ふる礫で、深さ百尺に至れば、褐色中粒の砂と爲り、百十尺で黃褐色の第三紀頁岩に出會つた。是から三十尺の間は砂と礫とで、深さ百四十尺で粗面樣安山岩に會し其れより以下は岩盤ばかりで、此處に温泉が出た。此の事實に依れば砂礫より成れる沖積層の中は、頁岩、凝灰岩、圓礫岩より成れる第三紀層で、之を貫いて大山火山を構成せる角閃安山岩の大噴出が起つたものらしく温泉源は此の安山岩中にあるのが割目から出て、砂礫又は第三紀層中に入り、其等の地層中を巡環する地表水と混じ、温度が下りて地表に出るものと考へらる。故に井を掘りて岩盤鑽管を入れ、水の混入の成る可く少ない湯を汲み出せば、温度の割合に高い温泉が得られる譯である皆生温泉は東南には伯耆富士なる大山の雄峰巍々乎として雲際に聳えてゐるし北は一碧萬頃の三保灣に接し、煙波縹渺の間に遙に隱岐島を望み、日本海長く斗出せる、島根半島の一起一伏は萬里澎湃たる奔波の偉觀にも優れるものがある。蜿蜒五里に亘れる弓ヶ濱は白砂青松相連なり風光實に絕佳である。

鳥取縣下温泉の特徴

一、海岸近くにあることである。前記の温泉中最も海岸に遠きものは關金で、三朝、山田、湯谷が之に次ぎ何れも海岸から一、六粁以内のところにある。其の他の温泉皆生、東郷、淺津、松崎、濱村、勝見、等は海岸直近く、鳥取、吉岡、岩井

等は海岸より五粁以内にある。

二、火成岩特に花崗岩、又は石英粗面岩の如き酸性岩に本源を有するものが多い。卽ち、三朝、山田、關金、勝見、濱村、等の諸溫泉は何れも花崗岩から湧出し、東郷、湯谷、岩井等の溫泉は石英粗面岩を泉源としてゐる。

三、ラヂウム、エムチオン含有量の多い事である。（三朝溫泉參照）

四、溫泉の種類が鹽類泉である、是は一の活火山も無く、火山活動の時期より遠く年代を經過してゐる事から肯定し得る事項で自然界の靜穩を表徵すると云ふ可きである。

五、閑雅素朴にして靜養に適する事である。

第十章　天然記念物

天然記念物とは一の國、一の郷土の天然物の中で辛うじて今日に殘存して、其國、其の郷土の自然界を記念するものを云ふ。例へば原始林、天然原野、固有種に富んだ植物區系、並に動物區系、其他洞穴、奇岩、火山現象、地震現象、などである。

輓近文化の進むに從つて都市計畫其他の整理が行はれ、水力電氣工業の勃興、汽車、自動車、ケーブルカー、其の他交通機關の發達、原野の開拓、等有らゆる方面に自然界の變化が起つて來た。その爲めに古來存在してゐた鬱蒼たる原始林や樹叢が一朝にして伐られ、又風景の絶佳と稀なる林相で知られてゐた深山幽谷が忽ちにして俗化してしまふ。斯樣に人爲の影響の烈しい爲め近世になつて天然記念物保存の必要が認められ、保存の方法を講ずる事になつた。

天然記念物保存の目的は自然界に於ける國の寶を永遠に遺して、その國その郷土の特色を維持するのである。保存の目的が茲にあるから唯遊覽や保健の爲にするのでなく、又研究や、見學の資料にのみ供するのではない。尤も必要に應じて是等の目的に供する事もあるが、保存の精神は一般國寶の場合と同じく國粹の維持に外ならない。

天然記念物保存の目的は前に述べた通りでるるが、學者の研究に依つて學術上に貢獻する場合には指定物件に就て特に實驗觀察、標本の採集が許される。

天然記念物保存によつて起る効果は少くない。例へば一地域にある珍奇な植物が採集せられ絶滅に瀕したものが天然記念物として指定せられ數年後に立派に舊に勝る景觀を呈したものもある。

尙ほ天然記念物保存の著しい効果は此の事業の進捗と普及とに依つて今迄に世に知られなかつた珍しい植物、動物、地質、鑛物が發見されて一は學問界を益し、一はその國その郷土の特色を發揮する事になる。

本縣には幾多の貴重なる天然記念物子在し調査せられしもの、今後益々調査の進むに從つてその數を增加する事と思ふ。

今本縣産のものにて天然記念物として保護指定を内務省より受けてゐるものは次の三種類である。

ハマナス Rosa rugosa, Thunb　（大正十一年三月八日内務省指定）

指定地　鳥取縣氣高郡末恒村大字内海
　　鳥取縣西伯郡所子村大字福尾

植物分布學では一々の種類の分布の境界を知る必要がある。日本の植物分布上先づ知るを要する事は北方寒地の種類の分布の南限と南方暖地の種類の分布の北限である。天然記念物としては是等の總ての境界線を指定する事は不可能であるから、唯その著しい場合に就て保存を圖る事になつてゐる。

ハマナスの自生地は本邦に於ては樺太、北海道、東北、信越、北陸、山陰等の寒地海岸砂地にして、自生南限地帶は本州の太平洋岸では茨城縣大同村、日本海岸では鳥取縣上記の末恒村、及所子村である。

その他指定地以外の産地としては、

岩美郡東村　東伯郡由良町　東伯郡八橋町
東伯郡長瀬村　東伯郡泊村　東伯郡宇野村

の海岸に自生してゐる。

ハマナスは寒地より南下するに從つて次第にその自生地域及數を減じ、上記鳥取縣海岸以南に於ては自生を見る事が出來ない。

特にハマナスは紅色の美花を開き庭園樹として、挿花として賞揚せられる爲め保護を加へねばその根絶する慮あり、依つて植物分布上價値あるものとして指定せられてゐるのである。

ハマナスは薔薇科に屬し紅色單瓣の美花を五月頃開き花後トマトに似たる果實を生ず、ハマナスの名の起りは之に依るものであらう。

根皮は絹絲を黄褐色に染むる原料とする。羽後、秋田の八丈縞は之を以て染めたるものである。

キヤラボク Taxus cuspidata, Sieb. et zucc. Var. Nuna, Rehd.　（昭和二年六月十四日内務省指定）

指定地　鳥取縣西伯郡大山村大字大山絶頂

天然記念物の中に原始林が揚げられてゐる。原始林は土地の氣候高度その外、植物區系の點からも樹木の種類が一樣でないから隨つて林相が違ふ。日本の植物區系は種類に富んでゐるから、原始林の樹種も多く北海道の如き寒地に於てさへ多數の樹木の種類が混生してゐる。

斯樣な著しい混生林でなく、一の主要樹種が大多數を占めて殆んど純林の觀を成すものがある。本縣伯耆大山キヤラボク原始林の如きはその例である。キヤラボクの自生地は伯耆大山を主とし連峰、彌山、三鈷峰、甲ヶ山、矢筈山、勝田山等に存在す。遠くは日野郡多里村、船通山、八頭郡若櫻町氷の山等の諸高山に見る事が出來る。而してその純林をなす顯著なものは大山絶頂の外に未だ之を認め得ない。

キヤラボクは一位科に屬しイチヰの一變種である。概形イチヰに似たれ共莖は通常根に臥す傾を有し直立しない。春日單性花を雌雄異株に生ず。雄花は葉腋に開き綠褐色の茅荑花にして梢球形である。雌花は葉腋に獨生し初め綠色で、壜狀をなし熟すれば紅色肉質コツプ狀の假種皮を生じその内に綠色の堅果狀種子を生ずる事一位に似たれども一位の果實の横斷面の球狀なるに比してキヤラボクの果實の横斷面は扁平球である。

凡て天然記念物は前に述べた通り原則として絶對保存を要するが、殊に原始林は出來得るだけ天然狀態を維持させる必要があるそれで幹が倒れても枝が折れても其儘にして置くは勿論、林内の草類、蔓植物、蘚苔類等に至るまで毫も取除いてはならない。さうでないと原始林の趣が無い。

連理根上り松

（大正十四年十月八日内務省指定）

指定地　鳥取縣米子市博勞町法城寺境内

人の植えた樹木でも種類の珍奇なもの樹形の立派なもの又は特異なものは何れも名木と云はれる。

松の名木としては根上り松が諸處に指定せられてゐる。鳥取縣米子法城寺の連理根上り松はその例である。根上り松は海濱の砂丘に生えてゐる。松の根が高く地上に現はれ出たもので、太い樹根の分岐の狀態を觀察するには適當な標本である。

法城寺の連理根上り松は大小二株の黑松が並んで立つてをり、大株の周圍五、五米、小株の周圍三、三米ある。根上り松の大株は根の高さが約四、五米もあり、小株では二、七米ある。斯樣に兩株とも著しく根上りとなつてゐるが殊に小株の一根が水平に伸びて大株の根と密に癒着して宛然橋を架けた樣になつてゐて一見何づれの株の根であるか識別し難い位である。これ連理の松の名のある所以である。此の連理根の長さ約二、六米太さ一、五米ある。此の根上り松の大株では一米以上の根の數が一四本、小株では主なるものが四本ある。

斯樣な根上り松は他の地方にある根上り松の中で最も著しいものである。

後篇

郷土研究資料目錄

後篇　郷土研究資料目錄

第一章　自然科學的方面

化石、鑛物、岩石

名稱	産地
カキの化石	日野郡多里村
植物化石	八頭郡國英村
貝化石（五種）	岩美郡福部村
貝化石	八頭郡若櫻町
同	八頭郡私都村
植物化石	岩美郡稻葉村
同	岩美郡宇倍野村岡益
貝化石	岩美郡成器村
植物化石	氣高郡末恒村
珪化木	岩美郡福部村
珪化木	岩美郡成器村
印賀鋼	日野郡大宮村印賀
紫水晶	日野郡二部村、岩美郡福部村
砂鐵	日野郡山上村、同根雨町、米子市
碧玉	岩美郡福部村
黃銅鑛	岩美郡岩美鑛山
鐘乳石	岩美郡東村
石筍	同
香盒石	岩岩郡宇倍野村
クローム鐵鑛	日野郡多里村

高師高僧	岩美郡中郷村
亞炭	東伯郡北谷
自然銅	岩美郡岩美鑛山
砂鐵	東伯郡逢東村
方解石	岩美郡服部村
煙水晶	産地不明
方解石	岩美郡服部村
水晶	氣高郡明治村
鑛滓	日野郡山上村
赤鐵鑛	同
黄鐵鑛	氣高郡明治村
鈴石	岩美郡福部村
黄銅鑛精製物	岩美郡岩美鑛山
黄銅鑛	鳥取市百谷鑛山
花崗岩	八頭郡那岐山、日野郡黑坂村、岩美郡網代、鳥取市久松山、岩美郡成器村、日野郡山上村、岩美郡浦富村、八頭郡社村
安山岩	岩美郡中郷村、氣高郡青谷町、八頭郡私都村、岩美郡大茅村
安山岩（板狀節理）	八頭郡上私都村
角閃安山岩（柱狀節理）	西伯郡大山
玻璃質安山岩	岩美郡駟馳山
石英斑岩	八頭郡池田村
蛇紋岩	八頭郡八東村
孔狀玄武岩	日野郡山上村
輝蛙目	八頭郡佐治村
三角石	岩美郡中郷村潼坂砂丘
玄武岩	岩美郡成器村
輝綠岩	日野郡山上村
石英粗面岩	米子市
同	岩美郡岩美鑛山
閃綠岩	日野郡山上村
松皮石	日野郡多里村
石灰岩	八頭郡八東村
石灰木	同

アヂノール板岩	八頭郡池田村
砂岩	八頭郡上私都村姫路
角岩	岩美郡岩美鑛山
燒	同
凝灰岩	岩美郡中郷村、同浦生村、同服部村
礫岩	八頭郡上私都村姫路
粘板岩	八頭郡笠櫻町、岩美郡成器村
珪岩	岩美郡倉田村
角礫凝灰岩	岩美郡中郷村、八頭郡上私都村
珪質粘板岩（佐治石）	八頭郡佐治村
紅條石灰岩	八頭郡若櫻町
絹雲母片岩	日野郡山上村
黑雲母片岩	日野郡多里村
地質模型	

動物

（一）哺乳類

名稱	産地
リス	八頭郡池田村
イタチ	氣高郡湖山村
テン	岩美郡浦生村
モグラ	八頭郡國中村
タヌキ	岩美郡宇倍野村
アナグマ	岩美郡小田村
カウモリ	八頭郡用瀬町
キクガシラカウモリ	日野郡石霞溪
コキクガシラカウモリ	八頭郡賀茂村
エテゴウサギ	同

（二）鳥類

名稱	産地
カイツブリ（雌雄）	氣高郡湖山池
ウ	氣高郡賀露港
アイサ	氣高郡湖山池
オシドリ（雌雄）	八頭郡池田村
スズガモ	氣高郡湖山村
マガン	同
トモエガモ	同
シマアジ	同
マガモ（雌雄）	同
コガモ（雌雄）	同
カルガモ	同
ヲナガガモ	同
ヨシガモ	同
ゴキサギ	鳥取市外
アヲサギ	八頭郡河原町
シマサギ	氣高郡大正村
シギ	氣高郡千代水村
ヤマシギ	岩美郡宇倍野村
タゲリ	岩美郡美保村
チドリ	氣高郡千代川河原
クヒナ	東伯郡東郷村
タシギ	岩美郡面影村
ハヤブサ（雌雄）	八頭郡大村
ミミヅク	同
フクロウ	八頭郡私都村
トビ	岩美郡中郷村
オホタカ	八頭郡國英村
クマタカ	八頭郡若櫻町
ノスリ（雌雄）	八頭郡國中村
アヲゲラ	八頭郡大村
アカゲラ	八頭郡大井村
ヤマバト	氣高郡大和村
キジ（雌雄）	八頭郡八東村
ヤマドリ（雌雄）	氣高郡松保村
ウヅラ	東伯郡東郷村
カシドリ	八頭郡池田村
モズ　二種	岩美郡中郷村
ツグミ	八頭郡大村
ヒヨドリ	八頭郡八東村
トラツグミ	八頭郡大村
マヒハ	氣高郡松保村
アトリ（雌雄）	八頭郡大村
ウソ（雌雄）	同
スズメ	八頭郡賀茂村
シジユウガラ	氣高郡松保村
ヒタキ	岩美郡福部村

（三）爬虫類

名稱	産地
スツポン	氣高郡松保村
ミヤマホホジロ	八頭郡若櫻町
アヲジ	八頭郡國英村
ホホアカ	八頭郡國中村
ムクドリ	鳥取市
イスカ	八頭郡大村
イカル	八頭郡賀茂村
ホホジロ（雌雄）	八頭郡用瀬町
シメ（雌雄）	岩美郡宇倍野村
ミヤマガラス	八頭郡八東村
ホソハシガラス	八頭郡國中村
フトハシガラス	八頭郡賀茂村
ミソサザエ	岩美郡宇倍野村
カハラヒハ	同
イシガメ	鳥取市
ヒバカリ	八頭郡國中村

ヤマカガシ　八頭郡賀茂村
アヲダイシヤウ　同
シマヘビ　同
ヂムグリ　同
シロマダラ　八頭郡國中村

（四）兩棲類

ヒヶガヘル　八頭郡賀茂村
アマガヘル　同
アカガヘル　同
ヤマアカガヘル　西伯郡大山
トノサマガヘル　八頭郡國中村
ツチガヘル　同
モリアヲガヘル　八頭郡用瀬町

（五）魚類

(1) 淡水産

ナマヅ、カハマス、モツゴ、ワカサギ、アブラハヤ、イワナ、モロコ、メダカ、ボラ、カマツカ、ウナギ、ドジョウ、シマムシ　八頭郡國英村
ヤモリ　鳥取市
トカゲ　八頭郡國中村
カナヘビ　同

六

カジカガヘル　八頭郡八東村
食用蛙　鳥取市
ハンザキ　日野郡多里村
ヰモリ　八頭郡隼村
サンセウウヲ　三種　八頭郡八東村、氣高郡明治村、八頭郡池田村

マドジョウ、カハムツ、ハヘ、ヤマメ、トゲウヲ、アユカケ、フナ、コヒ、ウグヒ、アユ、ドンコ、タナゴ、セイゴ、ベニマス、ヤリタナゴ、ハゼ（五種）

鮎の發生標本（五）ニジマス發生標本（十三）

(2) 海水産

ベラ、マエソ、ボラ、イシダヒ、カナガシラ、カジカウヲ、タラ、アイゴ、トビウヲ（二種）コノシロ、サヨリ、チヨウチョウウヲ、ゲンロクダイ、スズキ、アンコウ、メイタガレヒ、マガレヒ、シマウシノシタ、スナガレヒ、メダマガレヒ、ヒラメ、ウシノシタ、ハタ、シマイサギ、アヂ、キス、ウマヅラ、トクビレ、フグ、シマフグ、カマス、メバル（三種）アマダヒ、ハモ、イシダヒ、イシモチ、マダヒ、アヂ、イハシ（二種）ハマチ、マトオダイ、シイラ、セミホウボウ、カハハギ、コチ、ホウボウ、タカノハ、オコゼ、ヤガラ、サカタザメ、ホシザメ、エヒ、コバンイタダキ、ヒラ、エソ（五種）ゴンズイ、サンマ、サバ、イシモチ（二種）モヨヲハタ、ホシハタ、コモンハタ、アカハタ、マハタ、クロダヒ、チダヒ、ニシキベラ、アイゴ、ハコフグ、ハナオコゼ、ゴマフグ、ハリセンボン、ミシマオコゼ、トヲジン

（六）昆虫類

(1) 膜翅類

ミツバチ、オホマルハナバチ、キイロマルハナバチ、マルハナバチ、クロマルハナバチ、オホハキリバチ、クマバチ、スズメバチ、キイロスズメバチ、モンスズメバチ、アシナガバチ、スズバチ、トツクリバチ、フトフタヲビドロバチ、クロアナバチ、ルリジカバチ、ジカバチ、キオビベツカウバチ、オホモンクロベツカウ、ハラナガツチバチ、セイボウ、イヘアリ、クマアリ、マツキバチ、セグロアヲハバチ、カブラハバチ、ヲナガバチ、ヒメバチ（三種）コンボウアメバチ、

アメバチ

(2) 双翅類

イヘバイ、キンバイ、ヒメキンバイ、クロバイ、ベツコウバイ、ヒメイヘバイ、コアシブトハナアブ、ノラハナアブ、ハナアブ、クロハナアブ、ヒラタアブ、クロナガハナアブ、オホハナアブ、ビロウドツリアブ、ムシヒキアブ、シホヤアブ、アヲメアブ、ヒメムシヒキアブ、クロイシアブ、アカウシアブ、ウシアブ、シロウシアブ、キイロアブ、メクラアブ、ヘウタンバイ、キリウジカガンボ、ベツカウカガンボ、シラゲムシヒキ、メセセリバイ、オホミカドカガンボ、ヌカカ

(3) 鱗翅類

A 蝶類

アカタテハ、モンシロテフ、キタテハ、ヒメアカタテハ、スヂグロテフ、テングテフ、コジヤノメテフ、ヒメウラナミジヤノメテフ、ヒカゲテフ、クロアゲハ、ヲナガアゲハ、ミヤマカラスアゲハ、キアゲハ、ツマキテフ、シジミテフ、キマダラセセリ、ヒメキスダラセセリ、ルリタテハ、ジヤコウアゲハ、ヒオドシテフ、コムラサキ、サカハチテウ、イチモジセセリ、クロシジミ、トラフシジミ、キヤムラシジミ、ゴイシシジミ、ベニシジミ、オホチヤバネセセリ、ミヤマチヤバネセセリ、ミヤスセセリ、オソバセセリ、アサギマダラ、カラスアゲハ、ウスモンシロテフ、ウラギンシジミ、コヘウモンモドキ、ウラジロミドリシジミ、モンキテフ、コミスヂテフ、アゲハテフ、モンキアゲハ、スミナガシ、キテフ、イチモンジテフ、ヘウモンモドキ、キマダラヒカゲ、ジヤノメテフ、アヲバセセリ、オホウラギンヘウモン、ギフテフ、ウラギンヘウモン、コマダラテフ、アヲスヂアゲハ、トスグロヘウモン

B 蛾類

シラフクチバ、クハコ、ユフマダラエダシヤク、キマダニオホナミシヤク、カノコガ、シロオビトモエ、ゴマダラヒトリ

シモフリスズメ、ムクゲコノハ、メンガタスズメ、クスサン、シロヒトリ、オホエグリバ、ブドウスカシバ、トンボダエシヤク、モクメキシタバ、スカシバホウジヤク、ホウジヤクガ、セスヂスズメ、クロホウジヤク、アゲハモドキ、ウメモンスズメ、ノブナガマヒマヒ、オホミヅアヲ、ベニシタバ、カキノハトモエ、モモスズメ、オホスカシバ、マツカレハ、コスズメ、カクモンキシタバ、ゴマフボクトウ、ハラアカヒトリ、シロツバメエダシヤク、イカリモンガ、ヘウモンエダシヤク、ユフモダラエダシヤク、カレハガ、オホケンモンガ、ヤマトトモエ、ヤママコ、オホトモエガ、アヤビコノハ、ホタルガ、ツガケムシ、キンモンガ、オスグロトモエガ、ビロウドトモエ、マヘアカヒトリ、フクラスズメ、シロシタバ、ベニシタバ、キシタバ、ムクゲコノハ、アケビコノハ、ヒトツメコヒメシヤク、チヅモンアヲシヤク、シンジユサン、カヒコノガ、ヒゲナガトビケラ、ムラサキトビケラ、ツマグロトビケラ、エグリトビケラ

(4) 脈翅類

キバネツノトンボ、ツノトンボ、ホシウスバカゲロフ、ウスバカゲロフ、オホウスバカゲロフ、マダラウスバカゲロフ、クサカゲロフ、ヘビトンボ、ヒロバカゲロフ、ハツチヤウトンボ、テフトンボ、シホカラトンボ、カハトンボ、シノメトンボ、ミヤマアカネ、セウジヨウトンボ、シホヤトンボ、ナツアカネ、アキアカネ、コシアキトンボ、オホシホカラトンボ、ウスバキトンボ、サナヘモドキ、カトリトンボ、コシボソヤンマ、モノサシトンボ、イトトンボ、アヲイトトンボ、ヤンマ、アヲハダトンボ、ハグロトンボ、キイトトンボ、ギンヤンマ、サナヘトンボ、コオニヤンマ、ウチハトンボ、ミヤマカハトンボ

(5) 有吻類

チツチゼミ、ハルセミ、エゾゼミ、ミンミン、ツクツクボウシ、ヒグラシ、アブラゼミ、ニイニイゼミ、クマゼミ、ツマグロヨコバイ、イナヅマヨコハイ、トビイロウンカ、オホツマグロヨコバイ、オホヨコバイ、ウンカ、シロオビアハフキ

マツモムシ、コミヅムシ、タガメ、コヲヒムシ、タイコウチ、ミヅカマキリ、コミヅカマキリ、ナガメ、アヲクサガメ、ウヅラカメムシ、ナシガメ、アカスヂガメ、トゲカメムシ、ホソヘリガメ、ハラビロガメ、ホホヅキガメ、オホヘリガメ、オホカハグモ、ヒメカハグモ、シマカハグモ

(6)

鞘　翅　類

ヨツボシシデムシ、カハラハンメウ、七星テンタウムシ、ウリハムシ、シラホシテンタウムシ、ヨモギルリハムシ、ヒメアカボシテンタウムシ、ヒメカメノコテンタウムシ、セアカゴミムシ、ニハハンメウ、コニハハンメウ、ヒメハンメウ、クロニハハンメウ、ゲンジボタル、ヘイケボタル、テンタウムシダマシ、トラハナムグリ、ガムシ、ゲンゴラウ、コガタノゲンゴラウ、シマゲンゴラウ、コシマゲンゴラウ、ハイイロゲンゴラウ、オホミヅスマシ、コガムシ、ヒメゲンゴラウ、ヒメカメノコガムシ、ヒメミヅスマシ、カメノコガムシ、オトシブミ・ナシノチツキリザウムシ、ヒメクロオトシブミ、マツノオホザウムシ、シロコブザウムシ、オジロザウムシ、ザウムシ一種、コクザウムシ、ウヅラカメムシ、アヲドウガネ、ノコギリカミキリ、クハガタシ（雄）クハガタムシ（雌）コガネムシの一種、アヲオサムシ、ミチシルベ、オバタマムシ（二種）、アヲゴミムシ、タマムシ、クロタマムシ、オホコフキコガネ、コフキコガネ、カブトムシ（雄）カブトムシ（雌）ノコギリクハハタ（雌雄）アヲカナブンブン、シロスヂコガネ、ドウガネ、クロコガネ、シラホシオホハナムグリ、センチコガネ、オサムシ、ミヤマクハガタ、クハガタムシ、ノコギリカミキリ、ヒメクハガタ、ヒラタゴミムシ、クロゴミムシ、キマハリ、アヲゴミムシ、コシデムシ、ヘコキムシ、オホアカバハネカクシ、ハネカクシ、エンマムシ、ダイコクムシ（三種）ベニカミキリ、カミキリノ一種、ヨツスヂハナカミキリ、トラカミキリ（一種）、クハトラカミキリ、リンゴカミキリ、コガネムシ、セマダラコガネムシ、マメコガネ、チヤイロコガネ、ハナムグリ、ヒメコガネ（二種）、ハナムグリの一種、ミヤマカミキリ、クハカミキリ、シロスヂカミキリ、ウスバカミキリ、ゴマダラカミキリ、ヨツボシカミキリ、ルリボシカミキリ、ミドリカミナリ、ナカジロサビカミキリ、クロカミキリ、ヤハズカミキリ、セスヂカミキリ、ジヨウカイボン、アヲタマムシ、カミキリムシ（四種）ハムシ、マヒマヒカブリ、オホゴミムシダマシ、ベツカフヒラタシデムシ、ヒラタシデムシ、コシデムシ、ヒメベツカフヒラタシデムシ、カミキリの一種、マルクビツチハンメウ、ツチハンメウ、シデムシの一種、オバタマムシモドキ、サビコメツキムシ、シモフリコメツキムシ、コメツキムシ、ドウハムシ、ヒラタハナムグリ（二種）アカビロウドコガネ、ヨツボシゴミムシ、アカガネハムシ、ミヅスマシ、

(7)

直　翅　類

カマキリ、コカマキリ、ゴキブリ、オホゴキブリ、チヤバネゴブリ、ハサミムシ、ナナフシ、ヒシバツタ、コバネイナゴ、ナキイナゴ、シヤウリヤウバツタ、オンブバツタ、ダイメウバツタ、ヒナバツタ、クルマバツタ、セスヂツチイナゴ、カハラバツタ、イボバツタ、ミヤマフキバツタ、ケラ、エンマコホロギ、ミツカドコホロギ、オカメコホロギ、カネタタキ、マツムシ、スズムシ、マダラスズ、オカマコホロギ、ノミバツタ、キリギリス、ヤブキリ、ウマオヒムシ、クツワムシ、ツユムシ、コバネササキリ、クダマキダマシ、クビキリバツタ、カハゲラ、オホカハゲラ、セスジツユムシ、

△桑の害虫標本

クハカミキリムシ、トラカミキリ、オホヨコバイ、アオバハゴロモ、オホツマグロヨコバイ

△保護色標本

シタベニヒトリ、シロシタバ、キシタバ、ルリタテハ、ヒオドシテフ

△季節的二形（異季兩態）標本

アゲハ、サカハチテフ、コミスヂテフ、キアゲハ、ベニシジミ、

△昆虫擬態標本

アカバチ、アカウシアブ、ハラナガバチ、ムシヒキアブ、クロアナバチ、ヘウタンバイ、ミツバチ、ノハラアブ、クロマルハナバチ、クロイシアブ、アシナガバチ、トラカミキリ、ソトフタオビドロバチ、ブドウスカシバ

△砂丘昆虫標本

カハラハンメウ、シマバヘ、ハサミムシ、メセセリバヘ、ヒナバツタ、シラゲムシヒキ(二種)モンバラナガバチ、ハラナガバチ

△昆虫警戒色標本

毒針を有するもの　ルリヂカバチ、コガタスズメバチ、オウモンクロベツカフバチ、スズバチ、スズメバチ、ベツカフバチ、クロマルハナバチ、キイロマルハナバチ

悪臭を有するもの　ゲンジボタル、アオクサガメ、ヘコキムシ、コガネムシ、アトボシゴミムシ

毒針を有するもの　ハンメウ、ツチハンメウ

△稲の害虫本(二箱)

螟虫の發生順

ハタオリバツタ、オンブバツタ、イナゴ、オホヨコバヒ、ヨコバヒ、ツマグロヨコバヒ

(七)多足類

ウカデ、ゲジゲジ、ヤスデ

(八)甲殻類

クルマエビ、テナガガエビ、タラバガニ、ズワイガニ、ヤドカリ、モクツガニ、シヤコ、シホマネキ、マツバガニ、アカテガニ、ガザミ、ヒラツメガニ、カヒガクレ、サナダミヅヒキガニ、カメノテ、エボシガヒモドキ、オニフヂツボ、クロフジツボ、アカフジツボ

(九)軟体動物

タコブネ、マダコ、イヒダコ、ヤリイカ、アヲリイカ、バウズイカ、コウイカ、スルメイカ、ツメタガヒ、ムシエビ、ナデシコガヒ、スズメガヒ、イガヒ、サルボウ、アマヲブネ、アカガヒ、アマガヒ、ウノアシ、ナミコギセル、アラムシロ、ウミニナ、ツキヒガヒ、メンダカダカラ、エボシガヒ、カラスガヒ、アハビ、カキ、ヒナガヒ、マツムシ、カニモリガヒ、クルスガヒ、レイシ、アラレガヒ、オキシジミ、ヨメガサラ、アサリ、キンチヤクガヒ、オホヘビガヒ、テングニシ、シジミ、サルガヒ、イトマキボラ、バイ、ハマグリ、テツレイシ、スガヒ、マツカハガヒ、メダカラガヒ、トリガヒ、バテイラ、チリボダン、ニナ、サクラガヒ、ナガニシ、アハビ、トコブシ、アカニシ、タニシ、エボシカメノテ、ハナマルユキ、シドロ、ツノガヒ、ヒタチオビ、ヤツシロガヒ、ビハガヒ、カタツムリ、ウラシマ、ナツメガヒ、ウヅラガヒ、カツラガヒ、イクヤガヒ、カサガヒ、ウミウシ、ヒザラガヒ

(十)棘皮動物

アカヒトデ、イトマキヒトデ、クモヒトデ、ナマコ、ムラサキウニ、バフンウニ、其の他二種

(十一)腔腸動物

ミヅクラゲ、ウメボシイソギンチヤク、ビハカライシ

(十二)海綿動物

カイメン、ヌマカイメン

植物

(一) 大山植物
(二) 砂丘植物
(三) 歸化植物
(四) 寄生植物
(五) 食虫植物

自然科學的方面研究の部に記載してゐるから此處には省略する。

△菊科

シロバナタンポポ、タンポポ、ヒメジヲン、ヨメナ、ヤマシロギク、コンギク、シラヤマギク、ノシユンギク、リウナウギク、ヲグルマ、ホソバヲグルマ、カセンサウ、ヲカヲグルマ、サハヲグルマ、ノボロギク、アキノキリンサウ、ヂシバリ、ヒメヂシバリ、ニガナ、ハマニガナ、ヤマニガナ、シロバナニガナ、ムラサキニガナ、ヤクシサウ、アキノノゲシ、ホソバアキノノゲシ、ノゲシ、スキラン、カウゾリナ、ミヤマカウゾリナ、キツネアザミ、マアザミ、ヒメアザミ、ノアザミ、ヤマアザミ、ヒメジヲン、アレチノギク、ムカシヨモギ、ヒメムカシヨモギ、フヂバカマ、ヒヨドリバナ、サハヒヨドリバナ、クルマヒヨドリバナ、ノコギリサウ、ハマグルマ、ガンクビサウ、サジガンクビサウ、ヤブタバコ、センボンヤリ、タムラサウ、ヤマボクチ、タカサブロウ、オホヤマボクチ、オケラ、ツハブキ、オタカラコウ、オニタビラコウ、コニタビラコ、ヤブタビラコ、タウコギ、センダングサ、ヤブレガサ、カニカウモリ、キツカフハグマ、モミヂハグマ、カウヤバウギ、ナガバノカウヤバウキ、フキ、ノブキ、メナモミ、ヲナモミ、トキンサウ、ハハコグサ、チチコグサ、カハラハハコ、ハマハハコ、ヨモギ、ヒメヨモギ、ヒトツバヨモギ、カハラヨモギ、ヲトコヨモギ、イヌヨモギ、カハラニンジン、シロヨメナ

△桔梗科

キキヤウ、ホタルブクロ、ヒナギキヤウ、ソバナ、ツリガネニンジン、ツルニンジン、タニギキヤウ、シデシヤジン、サハギキヤウ、アゼムシロ

△胡蘆科

カラスウリ、キカラスウリ、スズメウリ、ゴキヅル、アマチヤヅル

△まつむしさう科

マツムシサウ

△敗醤科

ヲトコヘシ、ヲミナヘシ、カノコサウ、ノヂサ

△忍冬科

スヒカヅラ、ウグヒスカヅラ、キンギンボク、ガマズミ、コガマズミ、ヤブデマリ、ムシカリ、ゴマギ、ハコネウツギ、ニシキウツギ、タニウツギ、ウツクバネウツギ、ニハトコ、ソクヅ

△茜草科

アカネ、キヌタサウ、ヤヘムグラ、ヨツバムグラ、オホヨツバムグラ、マルバノヨツバムグラ、カハラマツバ、キバナノヨツバムグラ、クルマバサウ、フタババグラ、ハシカグサ、ヘクソカヅラ、ツルアリドホシ、アリドホシ

△車前科

オホバコ

△蠅毒草科

ハヘドクサウ

△きつねのまご科

キツネノマゴ、ハグロサウ、ヲギノツネ

△狸藻科

タヌキモ、ミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ

△苦苣苦科

イハタバコ

△列當科

ナンバンギセル、ハマウツボ

△胡麻科

ヒシモドキ

△玄參科

イヌノフグリ、タチイヌノフグリ、オホイヌノフグリ、カハヂサ、ダイセンクハガタ、クガイサウ、サギゴケ、シロバナサギゴケ、ツルサギゴケ、ヒキヨモギ、コゴメグサ、ウンラン、ミゾホホヅキ、オホバミゾホヽヅキ、アブノメ、シソクサ、ママコナ、アゼナ、アゼタウガラシ、シホガマギク、キクモ、キリ

△茄科

イヌホホヅキ、ヒヨドリジヤウゴ、イガホホヅキ、ホホヅキ、タバコ、テウセンアサガホ、クコ

△唇形科

フドリコサウ、ホトケノザ、クルマバナ、タフバナ、ミヤマタフバナ、アキチヤウジ、シロバナアキチヤウジ、ヒキオコシ、ウツボクサ、キランサウ、ジフニヒトヘ、タツナミサウ、ナミキサウ、ジヤカウサウ、コトヂサウ、ハルノタムラサウ、アキノタムラサウ、カキドホシ、シロネ、コシロネ、ヤマジソ、メハヂキ、ミヅトラノヲ、ナギナタカウジユ、テンニングサ

△馬鞭草科

クマツヅラ、クサギ、ハマクサギ、ムラサキシキブ、ヤブムラサキ、ハマゴウ

△紫草科

ムラサキ、ヤマルリサウ、タビラコ、ハナイカナ、スナビキサウ

△旋花科

ヒルガホ、ハマヒルガホ、マルバルカウ、ネナシカヅラ

△ががいも科

ガガイモ、カモメヅル、コバノカモノヅル、イケマ、スズメノオゴケ、スズサイコ

△夾竹桃科

テイカカヅラ、チヤウジサウ

△龍膽科

リンダウ、ハルリンダウ、ツルリンダウ、センブリ、アケボノサウ、ミヤマアケボノサウ

△馬錢科

フヂウツボ、ヒメナヘ

△木　犀　科

モクセイ、イボタノキ、ネヅミモチ、コバノトネリコ

△灰　木　科

サハフタギ

△柿　木　科

カキ

△櫻　草　科

コナスビ、クサレダマ、ヲカトラノヲ、ヌマトラノヲ、ハマボツス、ツマトリサウ

△紫　金　牛　科

ヤブカウジ、マンリヤウ

△岩　梅　科

イハカガミ

△石　南　科

ツクシシヤクナゲ、モチツツジ、ミツバツツジ、ヤマツツジ、アクシバ、ウスノキ、シヤシヤンボ、ナツハゼ、コケモモ、ホツツジ、ベニドウダン、ツガザクラ、コメバツガザクラ、アセビ、ネヂキ、アカモノ、イハナシ、ハナヒリノキ

△鹿　蹄　草　科

イチヤクサウ、ギンリヤウサウ

△令　法　科

リヤウブ

△山　茱　萸　科

アオキ、ミヅキ、ゴゼンタチバナ、クマノミヅキ、ハナイカダ、ヤマバウシ

△繖　形　科

セリ、ミツバゼリ、オホゼリ、ヤマゼリ、シシウド、ハマゼリ、シラネニンジン、ノダケ、ハマバウフウ、チドメグサ、ヤブジラミ、ヤブニンジン、ハナウド、ウマノミツバ

△五　加　科

ウコギ、ハリギリ、コシアブラ、タカノツメ、キヅタ、カクレミノ、ウド、タラノキ、トチバニンジン

△蟻　塔　科

アリノタウグサ、フサモ、ホザキノフサモ

△柳　葉　菜　科

マツヨヒグサ、オホマツヨヒグサ、アカバナ、イハアカバナ、チヤウジタデ、ヒシ、ヒメミソ、タニタデ、ミヤマタニタデ、ミヅタマサウ

△瓜　木　科

ウリノキ

△千　屈　菜　科

ミソハギ、カキシグサ、サルスベリ

△胡頽科
ナハシログミ、ナツグミ、アキグミ、ツルグミ
△瑞香科
ミツマタ、ガンピ、コガンピ
△きふぢ科
キフヂ
△菫々菜科
スミレ、シロバナスミレ、タチツボスミレ、ツボスミレ、シハイスミレ、マルバスミレ
△溝繁縷科
ミゾハコベ
△金絲桃科
オトギリサウ、ヒメオトギリサウ、コケオトギリサウ、ミヤマオトギリサウ、イハオトギリサウ、キンシバイ、ビヤウヤナギ
△山茶科
ツバキ、ナツツバキ、サカキ、ヒサカキ、モクコク、マタタビ、ミヤママタタビ
△田麻科
ボダイジュ、カラスノマゴ
△葡萄科

ヤマブダウ、エビヅル、ノブダウ、ヤブカラシ、ナツヅタ
△鼠李科
イソノキ、クマヤナギ
△鳳仙花科
ツリフネサウ、キツリフネ、ミヤマツリフネ
△清風藤科
アワブキ、ミヤマハハソ
△七葉樹科
トチノキ
△槭樹科
カヘデ、ヒトツバカヘデ、ウリカヘデ、ウリハダカヘデ、ミネカヘデ、イタヤカヘデ、ハウチハカヘデ、コハウチハカヘデ、ミツデカヘデ
△省沽油科
ミツバウツギ、ゴンズキ
△衞矛科
ニシキギ、マユミ、コマユミ、マサキ、ツルマサキ、ツリバナ、ツルウメモドキ
△冬青科
ソヨゴ、クロソヨゴ、モチノキ、ウメモドキ、イヌツゲ、ツルツゲ、アオハダ

△漆　樹　科

ウルシノキ、ツタウルシ、ヤマウルシ、ヌルデ、ハゼノキ

△水馬齒科

ミヅハコベ、アハゴケ

△大　戟　科

ノウルシ、ニシキサウ、エノキグサ、ヒメミカンサウ、コミカンサウ、イモノキ、ヤマアキ、アカメガシハ、シラキ

△遠　志　科

ヒメハギ

△楝　科

センダンノキ

△芸　香　科

マツカゼサウ、サンセウ、イヌザンセウ、フユザンセウ、キハダ、ミヤマシキミ

△蒺　藜　科

ハマビシ

△かたばみ科

カタバミサウ、ミヤマカタバミ、オホヤマカタバミ、ムラサキカタバミ

△ふうろさう科

フウロサウ、シコクフウロ、グンナイフウロ

△荳　科

スズメノエンドウ、カラスノエンドウ、ツルマメ、ヤハズエンドウ、ツルナシヤハズエンドウ、クサフヂ、エビラフヂ、ヨツバハギ、ミヤコグサ、クズ、ウマゴヤシ、ムラサキツマゴヤシ、ゲンゲ、ムラサキツメクサ、シロツメクサ、ハマエンドウ、ヌスビトハギ、ミソナホシ、ヤブマメ、ハギ、マルバハギ、キハギ、ネコハギ、メドハギ、ヤハズサウ、ネムリグサ、クララ、タヌキマメ、タンキリマメ、トキリマメ、ノアヅキ、コマツナギ、フヂキ、サイカチ、ジヤケツイバラ、ネムノキ、フヂ、ナツフヂ

△薔　薇　科

ノイバラ、ハマナス、テリハノイバラ、ヤマザクラ、イヌザクラ、ウハミヅザクラ、ナンキンナナカマド、ズミ、シモツケ、シモツケサウ、コゴメウツギ、キイチゴ、ニガイチゴ、カヂイチゴ、ナハシロイチゴ、クサイチゴ、フユイチゴ、ハスノハイチゴ、ウラジロイチゴ、ミヤマフユイチゴ、ヘビイチゴ、シロバナヘビイチゴ、ヲヘビイチゴ、キジムシロ、カハラサイコ、ミツモトサウ、ヤマブキ、カナメモチ、ウシコロシ、ボケ、シヤリンバイ、ザイフリボク、キンミヅヒキ、ヤマブキシヤウマ、ダイコンサウ、ミヤマダイコンサウ、ウラジロノキ、ワレモカウ

△金縷梅科

マンサク

△海桐花科

トベラノキ

△虎耳草科

ユキノシタ、ダイモンジサウ、ネコノメサウ、ウメバチサウ、シラヒゲサウ、チヤルメルサウ、トリアシショウマ、クサ

アヂサイ、イハガラミ、ベニガク、アマチヤノキ、ノリウツギ、ガクウツギ、ウツギ、ヒメウツギ

△景天科

シマベンケイサウ、キリンサウ、ヲノマンネングサ、タイトゴメ

△茅膏草科

マウセンゴケ

△十字科

ワサビ、ナヅナ、イヌナヅナ、タネツケバナ、コンロンサウ、オホバタネツケバナ、ミヅタガラシ、イヌガラシ、ナガミノイヌガラシ、スカシタゴバウ、ハタザネ、イハハタザホ、ヤマハタザホ

△けし科

キケマン、ムラサキケマン、クサノワウ、チヤンパギク、ヤマキケマン

△樟科

クスノキ、ヤブニツケイ、アブラチヤン、クロモヂ、シロモヂ、ゲンカウバイ、イヌグス、シロダモ

△木蘭科

モクレン、ハクモクレン、コブシ、シデコブシ、ホホノキ、サネカヅラ、シキミ

△防己科

アオツヅラフヂ、カウモリカヅラ、ハスノハカヅラ

△小蘗科

ヘビノボラズ、イカリサウ、サンカエフ

△木通科

アケビ、ミツバアケビ、トキハアケビ

△毛茛科

キンバウゲ、キツネノボタン、バイクワモ、イチリンサウ、ニリンサウ、オキナグサ、ミスミサウ、シウメイギク、ヲダマキ、ヤマオダマキ、ヤマシヤクヤク、ヱンコウサウ、クサボタン、ハンシヨウヅル、ミヤマハンシヤウヅル、ボタンヅル、センニンサウ、ヒメウヅ、カラマツサウ、ミヤマカラマツ、トリカブト

△桂科

カツラ

△雲葉科

フサザクラ

△金魚藻科

キンキヨモ

△睡蓮科

ヒツジグサ、ハス、ジユンサイ、カハホネ

△石竹科

カハラナデシコ、ハマナデシコ、ハコベ、ツルハコベ、ウシハコベ、イハツメクサ、ノミノフスマ、ツメクサ、ガンビ、フシグロセンノウ、マンテマ、ミミナグサ、ノミノツヅリ

△馬齒莧科

スベリヒユ、タチスベリヒユ

△蕃　杏　科

ツルナ、ザクロサウ

△商　陸　科

ヤマゴバウ

△莧　科

ヒユ、イヌビユ、キノコヅチ、ヤナギキノコヅチ

△藜　科

アカザ、コアカザ、ヲカヒジキ

△蓼　科

イヌタデ、オホイヌタデ、タニソバ、ミヤマタニタデ、ヤナギタデ、ミゾソバ、サデクサ、トゲソバ、ウナギヅカミ、アキノウナギヅカミ、ヤノネグサナ、ガバノウナギヅカミ、ミチヤナギ、イタドリ、イシミカハ、ミヅヒキグサ、マダイワウ、スキバ、ギシギシ、ヒメスキバ

△馬　兜　鈴　科

ウマノスズクサ、カンアフヒ

△槲　寄　生　科

ヤドリギ、マツグミ

△檀　香　科

カナビキサウ

△蕁　麻　科

イラクサ、アカソ、マヲ、ヤブマヲ、ヤマソ、ミヅ、カテンサウ、ウハバミサウ、ムカゴイラクサ

△桑　科

イヌビハ、イタビカヅラ、カナムグラ、クハクサ、カウゾ、カヂノキ

△楡　科

ニレ、ムクノキ、エノキ、ケヤキ、ブナノキ、カシハ、オホナラ、コナラ、ミヅナラ、イヌガシ、アラガシ、クヌギ、クリ、シヒ

△樺　木　科

シデ、クマシデ、サハシバ、イヌシデ、ハンノキ、ヤシヤブシ、ツノハシバミ、ハシバミ

△胡　桃　科

サハグルミ、ノグルミ、オニグルミ

△楊　柳　科

ネコヤナギ、コリヤナギ、カハヤナギ、ミヤマヤナギ、ヤマナラシ

△金　粟　蘭　科

フタリシヅカ

△三　白　草　科

ドクダミ、ハンゲシヤウ

△蘭　科

トンボサウ、ヤマサギサウ、エビネ、シユスラン、シユンラン、ミヅトンボ、サギサウ、キンラン、スズラン、ネヂバナ

△鳶　尾　科

シヤガ、ニハゼキシヤウ、ヒアフギ

△薯　蕷　科

ヤマノイモ、オニドコロ、キクバドコロ、ウチハドコロ

△石　蒜　科

マンジユシヤケ、キツネノカミソリ

△百　合　科

コオニユリ、ヒメユリ、ササユリ、ウバユリ、ヤマユリ、ノビル、ヤマラツキヤウ、ナルコユリ、アマドコロ、ミヤマナルコユリ、ミヅギバウシ、ギバウシ、ユキザサ、オホバユキザサ、ヤマホトトギス、サルトリイバラ、シホデ、ヤブクワンザウ、ユフスゲ、ツクバネサウ、チゴユリ、アマナ、シユロサウ、ジヤノヒゲ、シヤウジヤウバカマ、ソクシンラン、ノギラン、ネバリノギラン、ツルボ、シライトサウ、エンレイサウ、キチジヤウサウ、ヤブラン、マヒヅルサウ

△燈　心　草　科

キ、クサキ、カウガヒゼキシヤウ、スズメノヒエ、ヌカボシサウ

△雨　久　花　科

ミヅアフヒ、コナギ

△鴨　距　草　科

ツユクサ、ヤブミヤウガ、イボクサ

△殼　精　草　科

ホシクサ、イヌノヒゲ

△浮　萍　科

ウキクサ、アヲウキクサ

△天　南　星　科

カラスビシヤク、テンナンシヤウ、マムシグサ、ミヅバセウ、シヤウブ、セキシヤク

△莎　草　科

ハマスゲ、カヤツリグサ、アゼガヤツリ、タマガヤツリ、イガガヤツリ、ナキリスゲ、ウマスゲ、アゼスゲ、ガウソ、コウボフシバ、コウホフムギ、ナルコスゲ、アゼナルコスゲ、タガネサウ、カハラスゲ、イヌノハナヒゲ、ミカヅキグサ、テンツキ、アゼテンツキ、ヒデリコ、ヤマキ、ハタガヤ、クログワキ、ハリキ、マツバキ、アブラガヤ、ウキヤガラ、フトキ、ホタルキ、ヒメホタルキ、カンガレキ、ヒメクグ、ヒンジガヤツリ

△禾　本　科

カモジグサ、ヤマカモジグサ、ドクムギ、スズメノチヤヒキ、イヌムギ、キツネガヤ、トボシガラ、ウシノケグサ、ナギナタガヤ、イチゴツナギ、ミヅイチゴツナギ、スズメノカタビラ、ササクサ、コバンサウ、ヒメコバンサウ、コメガヤ、ミノボロ、スズメガヤ、カゼクサ、ニハホコリ、テウセンカリヤス、ヨシ、クサヨシ、アゼガヤ、カモガヤ、ムツヲレグサ、ドジヨウツナギ、チカラグサ、ミノゴメ、チヤヒキ、スズメノテツパウ、オホスズメノテツパウ、エノコログサ、キンエノコログサ、ムラサキエノコログサ、コアハガヘリ、オホアハガヘリ、セトガヤ、ハルガヤ、シバ、オニシバ、チカ

ラシバ、トダシバ、カモノハシ、ケカモノハシ、ネズミノヲ、ヒエガヘリ、ミノゴメ、ヒエ、ノビエ、ヌメリグサ、ハヒヌメリ、メヒジハ、ヌカキビ、サヤヌカグサ、アイアシ、ウシノシツペイ、トボシガラ、ウシノケグサ、チヂミザサ、カラスムギ、ジユズダマ、コブナグサ、チゴザサ、カニツリグサ、カリマタガヤ、ギヤウギシバ、スズメノヒエ、ナルコビエ、ウシクサ、ヲガルカヤ、メガルカヤ、チガヤ、コメガヤ、アブラススキ、ススキ、マコモ、クマザサ、オカメザサ

△とちかがみ科

トチカガミ、スブタ、ヤナギスブタ、クロモ、セキシヤウモ、ミヅオホバコ

△澤瀉科

オモダカ、クワヰ、ウリカハ、アギナシ、サジオモダカ、ヘラオモダカ

△茨藻科

イバラモ、ホツスモ、ヒルムシロ、コバノヒルムシロ、エビモ、ミヅヒキモ、イトモ

△黒三稜科

ミクリ

△香蒲科

ガマ

△松杉科

スギ、スギ、ヒノキ、アカマツ、クロマツ、ネヅ、モミ、ハヒネヅ

△一位科

イチヰ、キヤラボク、カヤ、イヌガヤ

△公孫樹科

イテフ

△卷柏科

イハヒバ、カタヒバ、クラマゴケ、タチクラマゴケ

△石松科

ヒカゲノカヅラ、マンネンスギ、タウゲシバ、ホソバノタウゲシバ

△木賊科

トクサ、スギナ、イヌスギナ

△蘋科

デンジサウ

△槐葉蘋科

サンセウモ、アカウキクサ

△瓶爾小草科

ハナヤスリ、フユノハナワラビ、ナツノハナワラビ

△薇科

ゼンマイ

△海金砂科

カニクサ

△裏白科
ウラジロ、コシダ
△水龍骨科
ノキシノブ、ヒメノキブシ、シノブ、ワラビ、キノモトサウ、オホバキノモトサウ、ヘビノネゴザ、イヌシダ、イタチシダ、ヒメシダ、ホシダ、ハリガネワラビ、カウヤワラビ、ザジラン、ミツデウラボシ、イハヤナギシダ、マメヅダ、オホバノハチジヤウシダ、クジヤクシダ、キジノヲシダ、タチシノブ、イハガネゼンマイ、イハガネサウ、シシガシラ、トラノヲシダ、コタニワタリ、シケシダ、イヌワラビ、ホラシノブ、ジフモンジシダ、キノデ、ツヤナシキノデ、イハデンダ、ヒメカナワラビ、リヤウメンシダ、ゲジゲジシダ、ベニシダ、ミゾシダ、クサソテツ、ヒトツバ、ミヤマノキシノブ、ヤマソテツ、オニヤブソテツ、チヤセンシダ
△苔葱科
コケシノブ
△蘚苔類
ゼニゴケ、ジヤゴケ、ミヅゴケ、オホカラカサゴケ、コウヤノマンネンスギ
△菌類
マツダケ、シヤウロ、マヒタケ、カウタケ、ベニタケ

書籍

鳥取縣天然記念物

大山の生物觀察
鳥取縣產鳥類目錄

圖表

千代川兩側に於ける舊海岸線想像圖
溫泉成因圖
溫泉分布圖
本縣主要鑛產地分布圖
天然記念物分布圖
鳥取縣地質圖
化石採取分布圖
鳥取縣三大砂丘圖

寫眞

大山（國立公園）　二〇枚
天然記念物（內務省指定）　三枚
植物寫眞　一八枚
動物寫眞　二枚
地質寫眞　三枚

第二章　地理的方面

書籍

大日本地誌　第六　山崎直方　佐藤傳藏
日本地理大系　中國、四國篇　改造社
日本地理風俗大系　中國地方　新光社
山陰鐵道案内　小松原眞琴
山陰道の觀察　矢田竹雄
千代川葛藤記　佐藤白雨
山陰の旅　伊谷博藏
鳥取縣統計書　土地、人口　學事　勸業　鳥取縣
鳥取縣輸移出入統計　鳥取縣
鳥取縣生産力早分　鳥取縣
鳥取縣氣候要覽　境測候所
統計上ヨリ見タル鳥取縣ノ地位　鳥取縣
氣象年報　境測候所
鳥取縣管内降水量調査　境測候所
鳥取縣之産業　鳥取縣内務部
鳥取縣産業案内　鳥取縣内務部
境港情勢要覽　渡邊宿鳳
境港案内　川端幸治
倉吉案内記　柴田文次郎
鄕土小觀　足立長一
鳥取及其附近　鳥取高農校友會
鳥取縣産業組合要覽　鳥取縣
新鳥取案内　福田秀太郎
地理教材研究　第七輯　地理教材研究會
地球　第五卷、第四號　地球學團
地理學評論　五―一一　日本地理學會

地圖類

八頭郡産業地圖
鳥取市地圖
陸地測量部地圖　約五五〇枚
五萬分一地形圖　香住、村岡、大屋市場、濱坂、吉櫻、坂根、賀露、鳥取、智頭、津山東部、津山西

部、奥津、倉口、青谷、赤碕、大山、湯本、勝山、美保關、米子、根雨、上市、多里、横田、松江、境

二萬五千分一地形圖　美保關、米子、母里、境、楫屋、廣瀬

二萬分一地形圖　岩井、蒲生、源門寺、細川、鳥取市、郡家、用瀬、吉岡、上原、曳田、寶木、鹿野

二十萬分一帝國圖　鳥取、姫路、松江、高梁

模型

鳥取縣模型　水平五萬分一、垂直四萬分一

鳥取近傍模型　二萬分一

製作圖表、地圖

本校中心日本各地方向明示圖

鳥取縣雨量圖　年雨量圖　一

鳥取縣市町分布圖　各月雨量圖　一二

縣内鐵道等時線圖

鳥取縣地理區　試案　六

鳥取縣河川流域圖

鳥取縣郡別人口密度圖

鳥取縣郡別人口比較圖

鳥取縣市町村別人口密度圖

鳥取縣史蹟名勝天然記念物指定分布圖

鳥取縣山岳分布圖

鳥取平野聚落分布圖

智頭川、八東川合流附近聚落分布圖

米子平野土地分布圖

鳥取平野土地分布圖

鳥取縣製糸工場分布圖

八頭郡耕地案分圖

本縣人海外渡航者分布圖

因美線各驛發送重要生産品ノ到着驛ヲ示ス圖表

米子運事管内十ヶ年間總貨物發着數量及收入

本校中心道路等距離圖（本縣東部交通圖）

八頭郡自動車交通圖

本校中心等時交通圖

淀江町附近舊海岸線想像圖

鳥取縣溫泉分布圖

女子師範學校生徒出身地分布圖

八頭高等女學校生徒出身地分布圖

女子師範學校八頭高等女學校通學生分布圖

寫眞繪葉書

寫眞　百五十枚　繪ハガキ　約三百枚

陶器

因久山燒

木葉形菓子器、象形香爐、煎茶器

牛戸燒

煎茶器、製作過程ヲ示ス一揃

法勝寺燒

手桶形花瓶、壺形花瓶、香爐

米城燒

煎茶器

玉伯燒

菓子器、德利

第三章　歷史並に考古學的方面

鳥取縣鄉土史年表

年代	
神代	比婆山ノ傳說（西伯郡賀野村御內容（ひばがいち））日野郡阿毘緣村大菅（御墓山））
	八岐大蛇退治ノ傳說（日野郡多里村萩原『船通山』）
	稻羽ノ素兎ノ傳說（氣高郡末恒村內海『白兎神社』）
	稻羽ノ八上比賣ノ傳說（八頭郡八上村曳田『賣沼神社』）
	伯伎國手間山ノ傳說（西伯郡手間村寺內）
	少彥名命ノ傳說（西伯郡彥名村『粟島神社』）
孝靈	惡鬼ヲ退治スルタメ天皇孝靈山（かわら山）ニ行在セラレシ傳說（日野郡宮內村宮內）
七三　崇神十年	丹波道主命丹羽ニ派遣セラル
	コノ頃彥坐王玖賀耳之御笠ナル土酋ヲ誅ス（岩美郡東村陸上カ）
五四　垂仁二十三年	譽津別王鳥取ノ姓ヲ賜フ鳥取市ノ鳥養部等ヲ定ム
景行	因州人路山ノ禰宜野ニ土蜘蛛アリ
成務	彥多都彥命ヲ稻葉國造ト定メ給フ
	大八木足尼ヲ伯伎國造ニ定メ給フ

五三　仲哀　二年　神功皇后角鹿ヨリ穴門ニ進マル時寄泊セラレシ傳說（因幡ノ湯山西伯郡所子村）

二七　仁德五十五年　武内宿彌稻羽國ニ來ルノ傳說（岩美郡宇倍野村宮ノ下『宇倍神社』）

六七　推古十五年　因幡國八束郡三蒼村ニ屯倉ヲ置ク

八　孝德大化四年　法美郡因幡ノ一宮社建ツ

十四　白雉五年　智頭郡醫王山大安興寺建ツ

五八　文武二年　三月因幡國銅鑛ヲ獻ズ

六六　慶雲三年　役小角美德山ニ堂宇ヲ建ツ後慈覺大師伽藍ヲ建ツ

六八　和銅元年　伊福吉部德足比賣卒ス　火葬ニ附ス

七四　七年　八上郡靈石山最勝寺建ツ

同　八東郡安井村新興寺建ツ

コノ頃慈住寺座光寺等ノ寺院文化アリシモノト想定サル

七五　靈龜元年　五月伯耆國ニ甘露降ル

七六　靈龜二年　從五位下山上臣憶良伯耆守トナル

七七　養老元年　伯耆其他諸國司近江ノ行在ニ土風ノ歌舞ヲ奏ス

七九　三年　初メテ按察使ヲ置キ伯耆ハ息長直人臣足、因幡ハ小野朝臣馬養

八三　七年　因幡國ニ驛四處ヲ加置ス（因幡驛ハ既ニ開カレキタルモノヽ如シ）コノ頃金蓮上人大山寺ヲ創建ス

九一　天平三年　初メテ鎭撫使ヲ置キ藤原臣麻呂山陰道鎭撫使トナル

一　十三年　諸國ニ國分寺建立ノ詔出ズ

九　天平勝寶元年　十一月大嘗アリ因幡ヲ以テ由機國トナル

一八　天平寶字二年　從五位上大伴宿彌家持因幡守トナル

三一　寶龜二年　高草采女從五位下國造淨成女等ニ姓ヲ因幡國造ト賜フ

同　十一月大嘗因幡ヲ須岐國トナス

三九　十年　六月廿九日因幡國暴雨、山崩レ水溢レ人畜漂流シ田畑損害シテ飢饉セル百姓三千餘人

コノ頃玄賓大山ニ阿彌陀堂ヲ建ツ

奈良朝人口推定因幡十萬五千六百人　伯耆七萬八千二百人（澤田吾一氏）

四二　延曆元年　大學頭從四位下沒海三船ヲ兼ネ因幡守トナス

六九　大同四年　智頭郡豐乘寺建ツ

コノ頃大和朝廷ノ時ノ如ク播磨ヨリ因幡ヘノ交通路賑ハシカラズ

七六　弘仁七年　因幡浮因京ニ入リ事ヲ越訴ス國吏譴責ヲ受ク

コノ頃會見郡ニ大原安綱ナル鍛冶アリ

弘仁式公廨稻數因幡三十五萬束伯耆三十五萬束

九六　承和三年　八幡郡出身春苑陰陽道ヲ以テ朝廷ニ重ンゼラル

一　八年　慈覺大師大日寺ヲ創建ス

五　十二年　邑美郡摩尼寺建ツ

九　嘉祥　二年　勅シテ慈覺大師ニ三佛寺ヲ建テシム

二三　貞觀　五年　新羅國人五十七人因幡荒坂濱ニ來ル糧ヲ給シテ歸ラシム

二六　八年　新羅ニ備フルタメ因伯ノ國ニ會シ諸神ヲ祀リ殊効ヲ祈ラシム

二七　九年　伯耆等五國ニ四天王寺ヲ設ケシム（東伯郡社村）

三八　天慶　二年　宇倍神社ニ正三位ヲ授ク

四〇　四年　伯耆國白鷺一ヲ護テ獻ル

四二　六年　因幡出雲兩國ノ正稅穀三千斛ヲ伯耆國ニ賜フ（天災ノ窮乏）

四三　七年　因幡國白龜一ヲ護テ之ヲ獻ズ

六五　延喜　五年　近喜式神名帳ニヨレバ式内神社因幡五十座伯耆六座

天慶　年間　平將門ノ黨大呂將監因州ニ逃レ來ル。

七　天曆　元年　伯耆國ニ於テ藤原是助タルモノ四百餘ノ兵ヲ率イテ騷亂ス

三五　天延　三年　和泉式部高草郡湖山村ニ生ル

六四　寛弘　元年　高麗人因幡ニ漂着ス

六七　四年　因幡國守橘行平介因幡千里ヲ殺害シ百姓朝廷ニ愁訴ス

七二　長和　元年　高草郡吉岡溫泉入湯初セル

一七　天喜　五年　阿倍頼時伏誅シ殘黨因幡ニ逃レカクル

五九　康和　元年　因幡ノ人高僧源算叡山ニ於テ逝ク

六三　五年　河村郡東郷庄一宮大明神御前ニテ僧京尊如法經ヲ供養シ奉リ神社東南ノ山ニ埋納ス（倭文神社境内附近ヨリ發見ノ經筒ニヨル）

四〇　治承　四年　佐々木高綱伯耆因幡等七國ノ守護ニ任ズ

同　以仁王ノ御謀ヤブレ長谷部信連日野郡下榎村ニ配流セラル

四四　壽永　三年　三德山ニ法皇ノ子ト稱スルモノアリ兵ヲ集メ伯耆美作ヲ劫掠シ平氏ノ討タントス奏ス

同　木曾義仲ノ愛妾巴前高草郡服部村ニ逃レカクル

同　參議平經盛ノ一族八東郡岩屋堂ニ逃レ來ル

四五　四年　安德天皇賀露浦ニ御上陸岡益ヲ經テ八東郡姫路村ニ御遷幸遊バサル

五二　建久　三年　二位尼薨シ法美郡泉谷ニ葬ル

五三　四年　源範頼八上郡最勝寺ニ逃レ敎頼法師ト云フ

同　大江廣元ノ報ニヨリ頼朝梶尾景寺ヲシテ範頼ヲ討タシム

五七　八年　敎頼法師寂ス、子範國門尾村中山ニ居城ス

五八　九年　曾我祐成ノ妾虎御前八上郡能引寺ニカクル

八一　承久　三年　後鳥羽上皇隱岐ヘ御遷幸遊バサル

九四　文曆　元年　朝廷岩清水八幡宮ヘ因幡國ヲ神領トシテ與ヘラル

九九　延應　元年　後鳥羽上皇隱岐國苅田郷ニテ崩ゼラル

八三　元享　三年　通幻禪師巨野郡浦富村ニ生ル

九二　元弘　二年　後醍醐天皇隱岐ニ御遷幸、皇女瓊子内親王從ヒ給ヒシガ警固ノモノニ發見セラレ伯耆ニ留リ給フ

九三　三年　天皇隱岐ヲ出デ伯耆ニ着カセ給フ、名和又太郎義兵ヲ起シ天皇ヲ船上山ニ守護シ奉ル

九四　建武　元年　五月名和長年、金持大和守左右ノ守リ奉リ天皇船上山ヨリ京都ニ御還幸
九六　延元　元年　名和長年京都大宮ニ戰死ス
九七　二年　鹽谷高貞尊氏ニ應ジ、雲但ノ勢三千餘騎ヲ兵船五百艘ニ乘セテ海上金ケ崎ニ向ヒ、新田義貞ヲ討ツ
九九　四年　懐長親王九州ニ入リ給フ特名和顯長外一族二百餘人供奉シテ八代庄ニ入リテ留ル

○　興國　元年　山名時代因伯守護トナル
五　六年　日野中將伯耆ニ流サレ阿布緣郷ニキル、日野殿ト稱ス
一二　正平　七年　山名師義因伯雲ノ諸將ヲ降シ出雲ヲ奪フ
一九　十四年　時代久米郡三明寺村ニ山名寺ヲ建ツ
二六　正平二十一年　山名氏伯耆田内ノ城倉吉町城ノ巖城因幡ノ岩常ニ上城岩美郡小田村ニ據ル
四三　弘和　三年　南條貞宗河村郡羽衣石城ヲ築ク
五一　元中　八年　長慶天皇御讓位後丹波ヨリ因幡ノ國法美郡面影村ニ入リ行在セラレテ此ノ地ニ崩御ノ傳說
一　嘉吉　元年　山名滿幸足利氏ニ叛シ逃レテ青谷ニ至ル（明德ノ亂）
二六　文正　元年　山名熊高因伯ノ兵ヲ率ヰテ赤松滿祐ヲ攻ム
二七　應仁　元年　山名勝豐高草郡布施天神山ニ築城ス
應仁ノ亂參加因幡伊達南條村上進氏伯耆小鴨

四六　文明　十八年　從二位權中納言柳原景光卿法美郡百谷村ニ來リ住ム
八四　大永　四年　尼子經久伯耆ニ攻メ入リ米子淀江尾高天滿不動岳ヲ陷ル
羽衣石城南條宗勝流浪ノ身トナル（五月崩トイフ）
○　天文　九年　宗勝因幡軍ヲ率ヰテ尼子氏ノ橋津川ニ戰ヒテ大敗ス
四　十三年　尼子晴久因幡ニ攻メ入リ大崎鹿野城ヲ陷ル
秋伯耆大洪水　天文ノ水トス
五　十四年　山名誠通鳥取久松山ニ築城但馬ノ見張トナス
六　十五年　八東郡私都城主毛利豐元勢アリ草苅長砂氏等利アラズ
八　十七年　但馬山名氏誠通ヲ攻ム　誠通戰死ス（布勢ノ中歲崩）
一三　二十三年　尼子晴久船上山智積寺其ノ他寺院ノ復興ヲ行フ
一九　永祿　二年　武田高信久松城ニ古居ス
二三　六年　山名源七郎鹿野城ニ移リシガ武田高信ニ殺サル
毛利氏弓ケ濱ニ於イテ尼子氏ノ兵糧輸送ヲ妨ゲ之ヲ苦シム
二五　八年　吉川元春杉原盛重ヲシテ日野江美城ヲ攻メシム城陷リ、八橋城大江城モ陷ル
二六　九年　尼子氏亡ブ毛利氏茲ニ於イテ元春月山城ニ入リ杉原盛重ヲシテ尾高城ニ南條宗勝ヲシテ羽衣石城ニ伯耆一國ヲ治メシム
十二年　山中幸盛出雲ヲ復ス
三一　元龜　二年　吉川元春幸盛ヲ降ス幸盛逃レテ再興ヲハカル

同　羽倉孫兵衛米子入城ノ毛利勢ヲ攻メ後戰死ス

三一　三年　山中幸盛因幡ニ入リ山名豐國ヲ助ケ法見郡甑山城ニ據ル武田高信之ヲ攻メテ敗走ス（タノモ崩）

三三　天正元年　吉川元春因伯ヲ降シテ富田城ニ歸ル幸盛ト豐國共力シテ毛利ノ城ヲ攻メ降スコト十有三

三四　二年　私都城主大坪甚兵晴毛利ノ將ニシテ數次幸盛ヲ苦シム

三五　三年　毛利氏因幡ニ攻メ入ルニ備フルタメ龜井茲矩私都城ニ勝久幸盛ハ若櫻鬼ケ城ニ據ル豐國コノ時毛利ニ與シ私都城ヲ攻メシモ失敗ス毛利勢元春隆景至ルニ及ビ幸盛鬼ケ城ヲ逃レテ京ニ向フ

三八　六年　南條元續元清兄弟吉川氏ニ叛シ秀吉ニ款ヲ通ズ

三九　七年　元春羽衣石城ヲ攻ム城主龜井荒木ト議シ秀吉ノ援ヲ乞ヒ之ヲ恢復ス

四〇　八年　羽柴秀吉播磨三木城ヲ陷レ因幡ニ入リ若櫻城ヲ取リ荒木氏ヲシテ之ヲ守ラシメ進ンデ鹿野用ケ瀬浦富諸城ヲ攻メ取リ龜井磯部垣屋氏ヲシテ之ヲ守ラシム

同　鳥取城主山名豐國款ヲ秀吉ニ通ジ長臣森下中村等之ヲ諫メシニ逆ニ降ル

四一　九年　經家石州福光ヨリ來リテ鳥取城ヲ守ル秀吉之ヲ攻メテ御本陣山ニ陣ス城兵防戰克ク力メシモ糧盡キテ落城ス經家切腹秀吉其ノ他ノ諸城ヲ降シ又摩尼寺最勝寺等ノ寺院モ灰燼トナルモノ多シ

秀吉南條ヲ援クントシテ伯耆ニ進ミ御冠山ニ陣シ馬ノ山陣ノ元春ト對抗セシモ南條ニ守ラシ播メテ磨ニ歸ル元春モ亦安藝ニ歸ル宮部善祥坊鳥取城ニ入ル

四二　十年　秀吉毛利輝元ト和スルニ及ビ伯耆東三郡（久米　河村　八橋）ヲ南條氏西三郡（日野　會見　汗入）ヲ吉川氏ノ治スル所トシ境界ヲ定ム

四七　十五年　秀吉九州征伐南條元續先鋒タリ龜井宮部モ從フ

四八　十六年　吉川隆久米子湊山ニ築城シ倉吉城ノ天守ヲ移ス

五二　文祿元年　宮部木下龜井垣尾南條ノ諸將朝鮮ニ出陣ス

五三　二年　巨濃郡荒木村三ケ月山等ノ銀鑛ヲ採出ス、コノ頃龜井茲矩產業ニ力ヲ盡ス

六〇　慶長五年　茲矩關ケ原合戰ニ家康ニ從ヒテ功ヲ立ツ宮部木下垣屋南條等ハ西軍ニ與シテ亡ブ

六一　六年　池田長吉鳥取城ニ入ル邑美法美巨濃八上四郡六萬石中村一忠米子城ニ入リ伯耆十八萬石山崎家盛智頭八東等二萬五千石ヲ領ス

六三　八年　伯耆ノ人南條宗鑑醫書撮要集ヲ著ス

六九　十四年　龜井茲矩邏羅國渡海ノ朱印ヲ受ク

同　中村一忠卒斷絕トナル翌年伯耆ヲ三分シ加藤貞泰ハ米子市橋長勝ハ八橋關一政ハ黑坂ニ治ス

七五　元和元年　會見郡石田村吉五郎衞門長者開墾ヲ企ツ

七七　三年　池田光政因伯三十二萬石ニ封ゼラル池田長幸備中松山ヘ山崎家治成鳥ヘ龜井治矩津和野ヘ加藤貞泰大洲ヘ轉封セラル

同　米子ノ人大屋甚吉竹島ニ漂著セル產物ノ豐富ナルヲ發見ス

七八　四年　大屋甚吉村川市兵衞竹島渡航ノ免許ヲ受ク

同　開一政家士ノ爭論絕エズ五萬石ヲ收セラル

（因州赤瓦ノ祖）

コノ頃播州高砂ノ池内某ノ子孫因州ニ來リ酒造業ヲ開ク（澄酒ノ祖）浦富村小谷某赤瓦製造ニ長ズ

九二　寛永九年　池田光政備前ニ轉封シ池田光仲備ヨリ因伯侯トナルコノ頃ノ人口因幡十二萬三十人伯耆十三萬千三

九八　十五年　荒木又右衛門歿ス、玄忠寺ニ墓アリ
同　島原亂以來海邊警備浦富加露泊等ニ見張所ヲ設ク
三　二十年　伯耆車尾村深田益信中河原荒蕪地ヲ開墾ス
九　慶安二年　樗谿東照宮廟社成リ鎭祭ス
一二　承應元年　醫侍小泉友賢稻葉民談記ヲ著ス
寛文四年　郡代一人ヲ定制トシ由宇勘平郡代トナル
二五　五年　光仲侯備前ノ白魚ヲ湖山池其ノ他ニ放養ス
三〇　十年　各郡ニ宗旨庄屋ヲ置ク一郡ニ一人乃至二人
三三　延寶元年　大洪水被害七萬石
三六　四年　軍ノ調練ヲ試ミルタメ湖山池ニ追鳥獵ヲ催ス
同　銀札ノ發行初マル
三九　七年　伯州夜見村森治郎兵衛新田開發ヲ出願許可ナル
四五　貞享二年　仲澄二萬五千石ヲ分知サレ別家ヲ作ル、東館ノ祖
四六　三年　氏殿瀧現祉ヲ修シ水戸儒者森尙謙ヲシテ碑銘ヲ撰セシメシモ故アリテ果サズ
同　辻晩菴儒官ニ擧ゲラレ之ヨリ掘河學派藩内ニ起ル
元三　元祿六年　法美郡奥谷村ニ池田家墳墓ヲ營マル、光仲山清源寺建立
五七　十年　請免法ノ制定ヲ了ヘ米村廣次ヲシテ西伯郡ニ實施セシム

同　古海ニテ初メテ操芝居アリ
六〇　十三年　清定一萬五千石ヲ分知サレ別家ヲ作ル、西館ノ祖
六八　寶永五年　因州母木村出身兩國梶之助死ス
七一　正德二年　鳥取眞教寺出火、市大半燒失ス
七七　享保二年　伯州ノ農民群集シテ鳥取ノ下堀端ニ近ミ訴狀ヲ呈ス
八〇　五年　石黑火事
八二　七年　米子町强訴四百名鳥取ニ押寄ス
八三　八年　鳥取城下物騷ニツキ三十三ケ町ノ界ニ木戸ヲ建テ夜中警戒ス
八四　九年　村田半太夫大阪ニ赴キ一萬七千両ヲ調ヘ藩ノ財政ヲ救フ
同　黑川火事
八五　十年　藩主親ラ米村廣次ヲ訪ヒ財政整理ヲ懇囑ス
十年　コノ頃物價騰貴
八六　十一年　伯耆大山ニ於テ牛馬市ヲ開始ス
日野會見汗入二群ノ百姓群集シテ藩主ニ强訴セントセシモ吉群源八郎之ヲ斡旋シテ靜ム
九〇　十五年　保護政策ノタメ具足師弓矢師等ノ商人諸國ヨリ入ルヲ禁ズ、享保札發行
コノ頃木村所平ノ經營ニナル伯耆米川ノ開鑿成ル
九六　元文元年　町方願出ニヨリ正金銀ノ流通許可銀札自然ニ已ム
九九　四年　八東郡東村勘右衛門等先頭トナリ奸吏ヲ斥ケ苛政ヲ除キ窮民ヲ救濟スルタメ因伯ノ百姓訴ヲ起シ各

郡ノ大庄屋ヲ壞シ安長河原ニ群集ス

二　寛保　二年　松岡布政伯耆民談記ヲ著ス

四　延享　元年　大江盤代君誕生光格天皇御母ナリ

五　二年　佐藤長健因州ニ聘セラル因府錄ヲ著ス

六　三年　藩士等家祿ヲ借上セラレ生計困難ヲ訴フ

同　岩井銅山ニテ因幡錢ノ鑄造ヲ行フ

一〇　寛延　二年　松尾芭蕉因幡ニ來ル

同　佐治谷ノ福島利平日野郡ニ移住シテ荒田紙ヲ初ム

一四　寶曆　四年　安田成信ノ獻策ニヨリ藩札ノ再興藩末迄繼續ス

一五　五年　上野忠親歿ス陟岠語林雪窓夜話等ヲ著ス

一六　六年　藩學尙德館創立セラル箕浦文藏學館奉行トナル

二八　明和　五年　香川景樹生ル十五歳ニシテ歌書ヲ著シ後京ニ遊ブ

コノ頃京都ノ陶土六兵衞御室燒ノ法ヲ傳フ（因久山焙ノ祖）

三四　安永　三年　法美郡無量光寺山ニテ伊福吉部德足比賣ノ銅銘藏骨壺ヲ掘出ス

三八　七年　藩ノ財政窮乏三十年間非常儉約ノ布告ヲ發ス

五〇　寛政　二年　稻村三伯蜘和書ハルマ和解ヲ編ス

五一　三年　書家中村元儀江戸ニテ卒ス

五五　七年　安倍恭菴因幡志ヲ完成シ宇倍神社ニ奉納ス。片山楊谷光格天皇ノ御前ニテ揮毫ノ榮ヲ蒙ル

五八　十年　土方稻領齊邦侯ニ繪師トシテ召出サル

六四　文化　元年　八上郡佐貫部波只知神社祠管國本道男ハ聘スル衣川長秋鳥取ニ來リ國學ヲ弘ム

六九　六年　日野郡印賀村青戸孫左衞門印賀銅ノ名聲ヲアグ

七二　九年　佐橋火事齊稷侯古海茶屋ヘ避難

八〇　文政　三年　八上郡郡家村安藤伊右衞門通谷灌漑事業ヲ私財ヲ拋チ數年ノ日子ヲ費シテ水田十五丁新田十二町ヲ開墾ス

八五　八年　民間奢侈ニツキ銀札所有者ハ封印シテ五ケ年間開封セシメザルコトヽス又御手掛工業保護ヲ廢止ス

八六　九年　最勝寺本應寂ス因幡大師ノ稱アリ

八七　十年　鳥取御藥園創設

八九　十二年　岡島政義鳥府志ヲ著ス

久米郡圓谷村山口屋清右衞門洪水ニ陸地トナリシ土地ノ開墾ヲ企テ內海新田ヲ得タリ又コノ頃久米郡下田中村出水屋長次郎ヲ新田ヲ開キ甘庶ノ栽培試ミルコト七年失敗ニ終ル

九七　天保　八年　夏疫病流行シ死者因伯ニテ二萬人

二　十三年　幕命ニヨリ浦富、賀露、泊浦、赤碕、境浦等ニ番所ヲ置ク、境ニ鐵會所ヲ設ケ日野會見ヨリ出ス鐵ヲ集メテ交易ス

六　弘化　三年　鯉魚ノ繪ヲヨクスル黑田稻皐歿ス

六月調査人口因幡十二萬七千七百九十七人伯耆十七萬三千五百六十八人（約九十年間）

一〇　嘉永　三年　慶德寺大守トナル水藩弘道館ニ倣ヒ尚德館ノ刷進ヲ計リ其ノ名ヲ天下ニ高カラシム藩士子弟ノ奬學ヲハカリ正墻熏塙庄次郎等ヲ登用シテ諸政改革ヲ助ケシム

一四　安政　元年　水練稽古場ヲ濱坂御茶屋ノ下ニ設ク

同　鳥藩木牧海岸警備ニ付キ軍勢二千人

一八　五年　安政ノ大獄ニ本藩富田織部連坐ス

一九　六年　伯州ニ於ケル新田開發事業盛ナリ、江北新田開發事業盛ナリ

二二　文久　二年　門脇重綾名和氏紀事ヲ著ス

二三　三年　朝廷ヨリ慶德ニ大阪海軍假總督ヲ命ゼラル

同　因幡二十二士ノ變、翌年黑坂泉龍寺ニ幽セラル

同　平野國臣等ト生野ニ事ヲ擧ゲシ横田友次郎

同　大村辰之助捕ヘラル、大和義擧ニ與セシ尾崎健藏、石川一等モ捕ヘラル

同　伊藤宣堂日野郡溝口宿ニ私塾ヲ開キ鄕校トイフ

同　鳥藩ノ守ル天保山砲臺英國船ヲ砲擊シテ賞セラル

同　武信潤太郎武宮丹治海岸ニ砲臺建設、由良、橋津、赤碕、淀江、境、濱坂、加露、浦富

二四　元治　元年　飯田年平、小谷古陰等伯耆誌編纂ヲ命ゼラル

同　長州追討ノ命下リ鳥藩石州ニ入、翌々年再征

二八　明治　元年　西園寺中將山陰鎭撫使トシテ來ル慶德退隱ノ意强キニ總督之ヲ慰留ス

同　丹波國山國庄ノ鄕士農民鳥藩ニ附屬シテ山國隊ト號ス

二九　同　征東ノ軍起スルヤ鳥藩東山道先陣ノ命ゼラレ各地ニ轉戰ス

三〇　二年　慶德鳥取藩知事ニ任ゼラル

三一　三年　會見郡森岡村濱田次郎吉棉作ノ改良ニ着手初メテ藩内ノ生糸ヲ京都ニ廻送スルニ至ル

三二　四年　因幡國一圓伯耆國一圓ヲ以テ鳥取縣ヲ置ク、河田景與鳥取縣權令トナル、隱岐國ヲ鳥取縣管轄トス

三四　五年　鳥取ニ民衆娯樂場ヲ開ク（衆樂園）尚德館閉校

三五　七年　本縣師範教育ノ最初タル小學校教員傳習所ヲ置ク

三六　八年　蓮月尼歿ス

三八　九年　鳥取縣ヲ廢シテ島根縣ニ併合セラル

四〇　十一年　氏殿神社別格官幣社ニ昇格セラレ名和神社トイフ

四一　十三年　足立長鄕ノ共斃社ノ生治十五年ニ解體ス

十四年　鳥取縣再置運動猛烈トナリ委員上京シテ建白書ヲ提出ス、山縣參議實情視察ニ來ル、遂ニ鳥取縣再置セラレ山田信道縣令トナル

四二　十五年　最初ノ縣會開カル、岡崎平内議長トナル

四五　十八年　此ノ頃ヨリ幹線道路ニ大土木事業起サレテ改修サル

四九　二十二年　鳥取市制實施

五六　二十九年　鳥取ニ歩兵第四十聯隊新設サル

五七　三十年　岩美郡岡益石堂安德天皇御陵參考地ニ指定サル、境測候所新設

舊藩士河田景與薨ズ、子爵從二位勳一等ナリ

六四　三十七年　須知中佐戰死
六七　四十年　東宮殿下山陰道行啓
七〇　四十三年　韓國皇太子山陰御巡覽
七二　四十五年　山陰本線開通鳥取市ニ於テ開通式擧行サル
七五　大正　四年　大暴風雨被害三百餘萬圓ニ及ブ
同　鳥取縣生產共進會ヲ鳥取市ニ於テ行フ
七六　五年　日置默仙永平寺貫主ニ就任明鑑道機禪師ノ號ヲ賜フ
七七　六年　文部大臣東京市長ニ歷任セシ奧田義人薨ズ
同　俳人坂本四方太歿ス
七八　七年　大水害
八一　十年　鳥取高等農業學校開校
八六　十五年　鳥取縣女子師範學校鳥取縣立八頭高等女學校開校
八七　昭和　二年　米子市制ヲ布ク
九〇　五年　畵家前田寬治歿ス前年帝展出品畵院賞ヲ受ク
同　若櫻線開通
九二　七年　因美線全通津山市ニ於テ開通式擧行サル
同　大山國立公園指定

圖書

因幡誌　和三九冊　安陪恭菴
稻葉民談記　和四不完　小泉友賢
鳥府志　和一一　岡島正義
伯耆志　和四不完　景山　肅
舊壘擊覽　和四　岡島正義
因士敎訓書　和一　文化五年寫
因幡國平家御舊跡實錄　和一　明治廿三年寫
名和氏紀事　和一　門脇重綾　昭五　名和神社版
家持宗門帳　二階町四丁目　和一　安政六年
家持根帳　二階町四丁目　和一　明治二年
各家甲冑標繪　和一
因州私都物語　和一　文久二年
因府夜話　上下　和二
鳥取大火記　和一　天保三年
本藩雜記　和一
因府錄　系圖の部　卷二十　和一　佐藤長健
南條民語集　中下　和二
因伯史料平家物語　和一
鳥取縣鄕土史　洋一
關西陰德太平記　合本洋四　香川正矩
鳥取縣史蹟勝地調査報告
第一冊　因伯二國に於る古墳の調査
第二冊　鳥取縣下に於る有史以前の遺跡　鳥取縣
鳥取池田家文書　第一　洋一　日本史籍協會發行
船上山史　洋一　鳥取縣敎育會
日野郡史　上下洋二　古橋幸吉
西伯郡自治史　洋一　西伯郡町村長會
岩美郡史　洋一　楢柴竹造
八頭郡史考　和一　楢柴竹造
氣高郡史考　和一　楢柴竹造
鳥取縣再置秘史　洋一　吉村撫骨
陰陽八郡郡勢一斑　洋一　埈　雨村
裏日本　洋一　久米邦武
因伯紀要　洋一　鳥取縣

伯耆民談記　洋一　松岡布政
因伯歴史地理資料　洋一　河尻重直
國史參照　因伯大年表　和一　楢柴竹造
近世城下町の研究　洋一　小野　均
鏡と劍と玉　洋一　高橋健自
鳥取島根兩縣官民肖像錄　洋一　遠藤永吉
出雲風土記　洋一
雲陽軍實記　洋一　河本隆政
松江藩祖直政公事蹟　出雲文庫　第四編　洋一
　　桃好裕著　谷口爲次校訂
和譯出雲私史　出雲文庫　第三編　洋一
　　桃好裕著　谷口爲次　譯
山陰線寫眞帳　洋一
鹿野小誌　洋一　瀧川菊太郎
境興町五十年史　洋一　小泉憲貞
境港沿革史　洋一　小泉憲貞
鐵道開通山陰の栞　洋一　宮地竹峰
因藩二十士傳、同附錄　洋二　青木壽光

因伯人情と風俗　洋一　因伯史話會
楊谿記紀　池田慶德公略傳　洋一　梶川榮吉
船上山遺事　洋一　正墻薫原著　佐伯元吉校補
神代の日本　洋一　小谷德幸
有名なる鄉土模範人物　洋一　因伯史話會
皇太子殿下山陰道行路鳥取市奉迎誌　洋一　鳥取市役所
新撰名勝地誌　卷八　山陰道之部　洋一　田山花袋
鳥取縣書畫百藝名人集
壯烈二十士　洋一　鈴木德治
因幡伯耆に存するアイヌ語の地名　洋一　山桝晴次郎
通齋玄談集　上下　和二　僧忠源　文政十二年版
因伯飢饉の實際　和一　梶川正溫
考古學講座
　瓦
　經　塚
　鏡
　埴輪及裝身具
　梵　鐘
金刀史、刀劍
　史蹟と考古學　板碑
　石製品、日本陶磁器史概況
安德天皇因幡御潛幸史論　洋一　楢柴竹造
米子風土記　洋一　山田久藏
岡益石堂並新井石船緣起　和一　文久二年
摩尼寺緣起書　和一
伯耆の大山　洋一　池田喜市郎
戊辰役鳥取藩戰歴の概要
因伯立志偉人傳　洋一　岩田勝市
因伯及因伯人　雜誌合本一
大家名士　山陰道の觀察　洋一
因伯昔語　洋一　因伯史話會
名和長年公　洋一　小松原眞琴
大山高麗山と安養寺　洋一　小松原眞琴
山陰道昔語　洋一　岩田勝市
建國偉神　大國主命　洋一　海野忠禮
山陰史蹟
　(一)山陰の史蹟と遺物
　(二)美保號
　(三)
　(四)
　(昭和六年)伯耆大山號
三德　創刊號
特建國寶目錄　洋一　黑板勝美
日本石器時代地名表　洋一　東京帝國大學
日本青銅器時代地名表　洋一　森本六爾
歴史と地理　二五——二
考古學雜誌　二二——五
名和長年　洋一　小松原眞琴　雄山閣發行
大江盤代君　洋一　尾崎忠平
伯州　上灘村の傳說　洋一　峰地光重
成器の傳說　洋一　谷口徹美
藤岡吉平傳　洋一　佐伯元吉
長通寺由來記　洋一　牛尾得明
巍石山最勝寺要錄　和一　鶴井　胤藏

古　繪　圖

因伯古繪圖
山陰道因幡國八郡五百五十五ケ村圖
伯耆國大繪圖
鳥取太閤陣取圖
因州高草郡加露浦港繪圖
河村郡泊浦小湊繪圖
鳥取城圖
米子城圖
因幡國鳥取古繪圖
鳥取地下圖
八上郡山論繪圖
布施天神山城圖
河村、久米　八橋三郡全圖

拓本

船上山之碑
尙德館之碑
名和神君碑
元弘帝着船處碑
安藤伊右衞門頌德碑
古代巴瓦唐草瓦　金石文等　約四十葉

製作圖表等

諸家紋章圖　十三葉
池田侯、山中鹿之助、龜井茲矩、吉川經家、荒木又右衞門
名和長年　以下
因幡國古墳分布明細圖　五萬分一地形圖
史蹟分布圖
特建國寶分布圖
古代傳說發生地分布圖
史前人類住居地想像分布圖
石器出土地分布圖
青銅器時代遺物出土地分布圖
因伯古墳分布圖
岩屋式古墳分布圖
奈良時代頃寺院分布圖

舊郡制區劃圖
式內神社分布圖
古城塞砦趾分布圖
鳥取市附近舊海岸線想定圖
淀江町附近舊海岸線想定圖
西伯郡宇田川村福岡向山岩屋古墳石室測圖
東伯郡倉吉町三明寺古墳石室測圖
八頭郡賀茂村郡家寺山古墳石室測圖
八頭郡散岐村大平露出古墳石室測圖

寫眞　約百枚

年表　鳥取縣鄉土史年表

古文書　田畑證文、水死人屆書、吟味書其他

蒐集遺物

石器　石斧同破片　一八、出土地（西伯郡宇田川村北尾／八頭郡下私都村山田／氣高郡松保村高住／氣高郡湖山池青島等）
石鏃　十　鳥取市外濱坂砂丘、湖山池青島等
凹石　一　西伯郡大和村百塚原出土
石錘　一　西伯郡高麗村妻木出土
石鎌　一
砥　一　八頭郡國中村久能寺出土
須惠器坩　一〇
高坏　七
坏　一三
甕　二
横瓮　二
甑　三
提瓶　一
手瓶　五
同破片　多數
彌生式土器、同破片
埴輪　圓筒　西伯郡宇田川村福岡出土　一
破片　西伯郡高麗村長田方墳出土　三
同　八頭郡賀茂村郡家出土　多數
玉　曲玉、切子玉　日野郡山上村笠木出土

管玉、小玉　八頭郡賀茂村郡家
曲玉、硬玉　八頭郡國英村山手出土

鏡

漢式時代　禽獸葡萄鏡　一　徑一六、三糎
德川時代　蓬萊山鏡　一　徑一二、三糎
同　小形圓鏡　一　徑五、四糎
八頭郡國英村山手出土
同　菊花紋柄鏡　一　徑九糎、柄長七、六糎
同　柄鏡（大形）四
同　方鏡　一

古錢、古札

八頭郡大御門村出土古錢　一九一
各時代通貨、同模造品　一二四
藩札（享保札）　七
明治初年紙幣種類　九

瓦

巴瓦、同破片　出土地　伯耆國分寺趾、八頭郡慈住寺趾、西伯郡宇田川村、上淀廢寺、西伯郡幡郷村久松山等
平瓦破片　出土地　慈住寺趾、本校附近、氣高郡勝谷村、伯耆國分寺趾、因幡國分寺趾、岩井廢寺趾等
丸瓦　慈住寺趾
鳥取城棟瓦　二

武器、武具、刀劍　忠國作　一
兼先作　一
壽格作　一
甲冑　一
弓　一
槍　二
長卷　一
刺股　一
種子ヶ島　一

風俗資料　陣笠　一
陣羽織　一
獅子舞道具、スリガネ、締太鼓、鈴、牝獅子
鏡臺
化粧道具
髮飾品、櫛等

第四章　文學的方面

江戸明治時代ヲ中心トセル因伯文學年表

紀元	天皇	年號	作家	年	作品	備考
二二八五	後水尾	寛永　元年	俳人卜阿	沒す		
二三三〇	靈元	寛文　年	（漢）杉村壽全			
		延寶　年	（國）宮城孝庸			
二三四四	同	貞享　年	（漢）竹內治安			
二三五一	東山	元祿　四年	伊藤文庵	貞享元年七月	玄忠寺八景詩	
二三五二	同	同　五年	小泉友賢	元祿四年正月	江戸藩邸八景詩	
			岡西惟中	元祿五年八月	因幡民談記	
					因幡神社考	
					枕草紙傍註	
					徒然草直解	
					砂金草紙	
					續和歌秘密抄	
					無名抄	
					眞字徒草	
					俳諧蒙求	
					近來風體いづれの都	
					次郎太郎三千句	
					俳諧三部抄	
					十百韻	
					澁團扇返答	

枕草紙春曙抄成る（延寶三）
萬葉集代匠記成る（延寶四）
光仲公に仕ふ
のさらし紀行出す
熊澤蕃山歿す
猿蓑集成る

二三五三	東山元祿六年	池田光仲	元祿六年七月七日	名所題林式子内親王家集校破邪顯正返答評判問答自註俳諧風體集閑々堂和訓消閑雜記光仲公歌集（光仲公史料玉枝集）	西鶴置土置出す井原西鶴歿す
二三六一	同十四年	（漢）本内意愼	同十四年		
二三七三	正德正德三年五月	（漢）辻晩庵			
二三七六	中御門享保元年	（畫）片山楊谷	元年八月廿四日		折焚柴の記成る
二三九〇	同十五年	（漢）鵜殿長春	同十五年	鵜殿家史鵜殿入隅長春遺稿餘稿	各務支考歿
二四〇五	櫻町延享二年	松岡布政	寛延三年	伯耆民談記	
二四一〇	桃園寛延三年	（漢）辻信敏	寛延三年		
二四一四	同四年	河田東岡	同四年六月	周易鵞註周易新疏並別錄司馬法解	
二四一五	同五年	上野忠親	寶曆五年	異本池田系圖	雪窓夜話雪窓閑話

二四一七	桃園寛延七年	（漢）岩本有宿	同七年	勝見名勝誌開卷可笑武士談攪睡劇談雨夜筆談木鼠翁蹇筆井蛙語海	冠辭考成る
二四二九	後櫻町明和六年	佐藤長健	同六年	因府錄並附錄	加茂眞淵歿
二四三一	後桃園同八年	佐善禮耕	明和八年	池水記	青木昆陽歿
二四三七	同安永六年	（漢）山田仙藏	安永六年		加藤美樹歿
二四四〇	光格天明元年	安藤箕山	元年	仁說仁義禮智信說箕山先生說周易	常山紀談成る
二四四三	同三年	難波玄生	同三年八月五日	難經解	與謝蕪村歿
二四四七	同七年	（漢）辻信成	同七年	稻葉和歌集編撰	鶉衣成る
二四五一	寛政三年	（書）中村元儀	同三年		
二四五三	同五年	（漢）山口敏	同五年		
二四五四	同六年	鷲見慶明		孝經大意	玉勝間成る
二四五五	同七年	安陪惟親	文化五年	因幡誌	葛葉集略解成る
二四五六	同八年	稻村三伯	同八年	波留麻和解	群書類從成る
二四五八	同十年	乾孝	同十年	大道微言大學變通乾註表記尙書論	古事記傳成る

二四六一	同	享和元年	(歌)林 濮園	神代樂略解 春秋和微 長孝志
二四六二	同	二年	伊藤祐胤	中庸私說
二四六三	同	三年	箕浦世亮	大學說 尚書典謨說 周易新疏の校勘
二四六六	文化	三年	(儒者)田中由古	省齋垣文稿
同	同	(同)	屁省齋	文化三年十月
二四七七	同	四年	(畫家)土方稻嶺	稻葉和歌集
同	同		清水貞固	十一月
二四七二	同	九年	(儒者)河田希傑	九年三月
二四七三	同	十年	(史家)鈴木惟忠	十年
二四七六	同	十三年	(儒者)野崎謙藏	土肥鹿鳴

同	同		土肥鹿鳴	同
二四七六	同	同	熊谷道仲	同
二四七九	同	文政二年	(儒者)佐善元齡	文政十三年八月
二四八二	同	同五年	依川長秋	同五年二月
二四八七	仁孝	文政十年	沖探沖	龍象論
二四八八	同	同十一年	細田富延	同十一年一月
二四八九	同	同十二年	伊良古大洲	同十二年九月
二四九〇	同	天保年	掘庄次郎	天保元年八月
同	同		國本道男	同六月
二四九一	同	同二年	谷百年	同二年五月

本居宣長	殁			
膝栗毛成る				
伴蒿蹊	殁			
藤寅卯子成る				
椿說弓張月成る				
山本北山	殁す			
賴春水	殁			
山東京傳	殁			

易學示蒙	易學俚解	易學韻字句讀考	易象發揮	易象辨疑
易學要領	易學手引草	鹿鳴易話	周易卦主論	周易卦變談
易爻彖闡				

神代正語常盤草	聖代考	うき橋考	冬の詠歌	谷かけはし
論語影響人洲集	四十六士論	仁說	意見書として	獻芹部策
皇國明辨	歌人傳歌	天朝史鑑	天朝史略	經典餘師

塙保己一	殁			
永眠安友(畫歌人)	殁			
式亭三馬	殁			
太田南畝	殁			
富士谷御杖	殁			
日本外史完成				
太田錦城	殁			
一茶	殁			
田舍源氏出づ				
松平定信	殁			
鶴屋南北	殁			
良寛	殁			
法師	殁			
十返舍一九	殁			

二四九三	同	四年	池田冠山	同	天朝鬼神論 六經用字例 校正七書正文 四十八種三百八十八卷著 あり
二四九六	同	七年	(儒者)箕浦節山 (天文家)山本文之進	同	賴山陽歿 (二年)
二四九八	同	九年	建部樸齋	同	漢土史略ヲ撰ス 四月
二五〇三	同	十四年	香川景樹	同	柳亭碩彦歿 百首異見 桂園一枝拾遺 十四年 三月
二五〇六	同	弘化三年	(畫)黑田稻皐	弘化三年 十一月	米艦浦賀に來る
二五〇七 孝明	同	四年	鷲見安款	同 四年 三月	平田篤胤歿 僧契沖寂 右古今集正義 土佐日記創見 新學異見 話言考 中空日記 またぬ青葉 六十四番歌結 うす氷 大幣 折々草 萬葉集拙解 江戸紀行 紀游
二五〇八	同	嘉永元年	中山太叔	嘉永元年	曲亭馬琴歿
二五一一	同	四年	堀靜軒	同 四年	靜軒堀先生文
二五一三	同	六年	芝田溫	同 六年 一月	性善筆話 人洲集

同	同	臼井治堅	同	十二月	論語述義 獻暗瑣言 銀香の落葉 萱窠の枕 文机の塵 (何れも歌集)
同	同	土佐惟則	同	六年	
二五一八	同	五年	景山肅	同	五年 隱岐伯耆志成る 隱岐巡狩錄 隨筆拔書
二五一九	同	六年	三谷泰作	同	因府年表正續 舊墨鑿覽 因府歷年大雜集 竹島考
同	同		飯田秀雄	同	藩邸年表 藩邸考 化政嚴秘錄 天保嚴秘錄 霜眉隨記
二五一八	同	安政四年	(畫)二熊一笑 (種痘學研究家)	安政四年	梁川星巖歿
同	同	五年	岡島正義	同	五年 六月 舊墨鑿覽 鳥府誌
二五二一	同	文久元年	(畫)沖一蛾	文久元年 六月	樟齊集
			青木圖南	同 六年	佐藤一齋歿

同	同	同	同	二年	八月	修道館を鹿野に建つ
同	同	同	同	三年	九月	
同	同	同	同	元治元年		異星考
同	同	同	同	慶應二年	十一月	
同	同	同	同	二年		初野善藏（漢）米原豐秋（歌）篠田惟成（歌）坂田潤藏（漢）
同	同	同	明治元年	十二月		
同	同	同	同	三年	五月	松乃屋集 大茂遺篇
同	同	同	同	八月		
同	同	同	同	四年		
同	同	同	同	五年	八月	蠖國瑤重統人紀書紀集傳編纂名和氏紀事東京日日創刊
同	同	同	同	七年	三月	周易包蒙約解周易包蒙海人の刈藻
同	同	同	同	八年十二月		蓮月尼全集後輯
同	同	同	同	三	月	海防私議十二策杞憂錄

同	同	同	同	二年	八月	漫遊詩章 淚餘夢卷 研志堂遺稿 研志堂詩抄 慶德公歌集
同	同	同	同	十年		
同	同	同	同	十二年	十一月	
同	同	同	同	十五年	三月	六杉園集 鯢玉集 擯輯 藥効錄
同	同	同	同		五月	
同	同	同	同	十六年		
同	同	同	同			
同	同	同	同	十七年		
同	同	同	同		十二月	飯田俊子歌集
同	同	同	同	十八年	一月	
同	同	同	同	十九年	一月	
同	同	同	同		六月	訂正祝詞式 祝詞捷徑 新姓氏辨 啓蒙大旨 駁異

二五四六	同	同				外患通論
同	同	同				石園歌話
同	同	同				石園集
二五五三	同	二十六年	(畫)小畑稻升	同	十二月	續石園集
二五五四	同	二十七年	中島宣門	同	二十七年一月	石園隨筆
同	同		飯田輝子	同	年五月	犬年平翁詠草拾遺
二五五七	同	三十年	菅楯彦	同	三十年	國學由來物語
二五五九	同	三十二年	新貞老	同	三十二年三月	意見書として斬奏趣意書
二五六二	同	三十三年	(漢)土肥實臣	同	三十三年八月	賑恤の書。氏殿神祖御處分建言書。宛口米減額建白書。鳥取縣再置議書
二五六二	同	三十五年	(畫)牧野芝石	同	三十年	類題稲葉和歌集。回水園集原田輝子歌集
同	同			同	三十二年	稲葉集摘英新釋。催馬樂辨。柿園詠草拔萃傍註。歌集直木園稿
二五七〇	同	四十三年	信夫恕軒	同	四十三年十二月	石齋小稿
						誠忠錄

書名	著者	冊數		
尚書	尚德館點本	三	放哉書簡集	一
因伯碑文集		一	阪田詠草拾遺	一
因伯詩存		一	年平翁	一
易象發揮	土肥鹿鳴	四	樗溪清興	一
百人一首峰のかけはし	衣川長秋	二	類題稲葉集	一
蓮月尼全集	村上素道	一	類題鰒玉集	一
俚謠集拾遺		一	樗谿慶德公略傳	七
俚謠集	文藝委任會	一	配祀記	一
白龜民談		五	因伯 地理唱歌	一
歸苑仁說	河田八助	一	溪川句集	一
司馬法解	河田孝成	二	神社寺札一途（御規則書）	一
大學說	箕浦世亮	一	大三輪之社鎭座次第	一
山陰土產其他	島崎藤村	一	因伯寺院帖	一
正覺石	岡田機外	一	摩尼寺略緣記	一
一蓼一笠	大町桂月	一	加露大神記	一
大空	尾崎放哉	一	大因伯	八
鳥翁俳句集	鳥翁古仙庵	一	文字扇	一
			因伯童話	一
			俳諧傳	一
			四十六士論の志黑に題す伊良子大洲	一

生田春月全集　右刊行會編　一〇
六十四番歌結　香川景樹　一
周易新疏　河田孝成　五
柱園一枝　香川景樹　一〇
百首異見　香川景樹　五
名士列傳　香川景樹　一
新學異見　香川景樹　一
桂花餘香　香川景樹　一
またぬ青葉　香川景樹　一
作文講話及文範　杉谷代水　一
書簡文講話及文範　芳賀矢一　杉谷代水　一
宮廷女流日記文學　池田龜鑑　一
性善筆話　芝田溫　一
石園集　飯田年平　一
香川景樹翁全集　二
香川景樹歌集　平田良平　一
因幡揚善集　鈴木惟忠　一
研志堂詩鈔　正墻適處　二

喬松先生遺稿　森本喬松門下　一
柿園詠草拔萃傍註　新貞老　一
方言輯錄　岩田勝市　二
神代正語常磐草　細田富延　三
經典餘師　谷百年　五二
古今集正義　香川景樹　四
藩政時代
讀書の教材　三〇冊
習字の教材　一〇冊
明治十年までの讀書教科書　六六冊
明治十年以後三十年までの讀書教科書　一〇冊
同　習字教科書　二〇冊

第五章　美術工藝的方面

書畫短冊之部

國本　道男　短冊一　飯田　年平　短冊一　飯田　秀雄短冊一
太田垣蓮月　同一　香川　景樹　同一　小谷　芳蔭　同一
小谷　古蔭　同一　中島　義門　同一　牧野　芝石　同一
加須屋武義　同一　鷲見　安鼓　同一　林　洪園一
卜　阿　同一　大　蕉　同一　寸　風　同一
佐伯　友光　同一　政　達　同一　田中　俊民　同一
隆　普　同一　敦　信　同一　晴　光　同一
輝　一　同一　百　丈　同一　邦　廣　同一
卜山　俳句　同一　鈴木　正臣　同一　小林　大茂　同一
墨　園　書幅一　山內　篤處　畫贊幅一　其他十六枚
建部　樸齋　額一　御來屋玉立　書幅一　正墻　適處書幅二
小畑　稻升　畫幅一　土方　稻嶺　同一　大野　竹窓畫幅一
佐善　元立　同一　中村　元儀　同一　香川　景樹書幅一
正　聲　同一　池田　治道　同一　卜　阿　同一
龍　巢　書幅一　伊良子大洲　同一　池田　冠山額一
溪　百　年　同一　牧野　芝石　同一　飯田　俊子書幅一
衣川　長秋　同一　片山　楊谷　畫幅一　黑田　稻皐畫幅一
飯田しほ子　同一　貞　彥　同一　林　魯　翁畫幅一
幽蛾外四名　書幅一　橋本　秀峰　同一

鄉土玩具三部

鳥取市

一、きりん獅子　一
二、手さげ　一
三、小バスケット　一
四、おやま人形　四
五、流し雛　一組
六、きびがらねえさん(ばんばさん)　二
七、面かぶり
八、あねさま人形　四
九、ようぞうでこ　五

一〇、雛　一組
一一、多智雛　同
一二、多慶雛　同
一三、萬喜雛　同
一四、おどろ雛　同
一五、鹿　二組
一六、わにと山兎　一
一七、獨樂　一
一八、ひねり獨樂　二
一九、挽物玩具　五
二〇、まつかさ細工鶴　一
二一、竹鹿　二組
二二、手毬　一　花島靜子氏寄贈
二三、貝人形　二
二四、ペン臺　一

岩美郡岩井町

挽物玩具

一、白木手遊　昭和七、八　一
二、小鳥ガラ〳〵　五　一
三、巴ガラ〳〵　大正一三　一
四、鳩車　昭和六　一
五、起上り　大正一三　一
六、手提人形菓子入同　一五　一
七、ラッパ　同　一二　一
八、ダンス人形　同　一四　一
九、豆人形　昭和五　三
一〇、ひねり駒　大正一二　一
一一、水道具　同　一二　一組
一二、臺所道具　大正一二　一組
一三、茶道具　昭和六　同
一四、輪抜達磨　大正一二　一
一五、輪投げ　昭和七、二　一組
一六、湯冠り人形　同七、七　一
一七、祝ひ雛　A　同六、一　一組
一八、同　C　同　一組
一九、同　D　同七、三　同
二〇、犬　同六、五　一
二一、猫　同七、五　一
二二、虎　同　一
二三、白兎　同　一
二四、子守ガラ〳〵　同六、八　一
二五、太鼓たゝき　大正一二　一
二六、人形菓子入　昭和四　一
二七、摘菓人形　大正一四　一
二八、唐人形　明治初年　一
二九、德利笛　同　一
三〇、なりごま　明治三十年　一
三一、獨樂
三二、ひねり駒
三三、う　す
三四、つ　ぼ
三五、おひつ
詳細不明なるも元祿頃には既に祖先が挽いてゐたらしく此の彩色は百年前位のものなり

東伯郡倉吉町

一、めんか　七
二、はこた人形　一
三、竹馬　二
四、木刀　一
五、獅子　一

米子市

一、うさぎのもちつき　一
二、帽子かぶり　一

日野郡山上村

一、雛人形　一　佐伯幸子寄贈
二、同　二　白根雪枝寄贈

西伯郡法勝寺村

一、藁馬　一　佐古道子寄贈

八頭郡八東村

一、大吉獨樂　一　千本榮寄贈

氣高郡岡村

竹細工

一、チャツブリン　一
二、象　一
三、小猫　一
四、兎とポスト　一
五、西郷さん　一
六、青蛙　一
七、海老　一
八、子供　二
九、黒猫　一
一〇、狸　一
一一、落葉かき　一
一二、角兵衛獅子　一
一三、竹鹿　一
一四、權兵衛　一
一五、ダンサー　一
一六、トンボ　一
一七、かに　一
一八、鶴　一
一九、自雷也　一
二〇、大石良雄　一
二一、定九郎　一
二二、獅子舞　一
二三、馬上武士　一
二四、落しざし　一
二五、加藤清正　一
二六、赤垣源蔵　一
二七、三人吉三　一
二八、腰掛武士　一
二九、新田義貞　一
三〇、海老　一
三一、捕物　一
三二、桃太郎　一
三三、兒島高德　一

岩美郡福部村

一、大名行列　一二

西伯郡淀江町

一、雀追ひ
二、舞子
三、娘

民謡小唄童謡レコード

一、（一枚）伯耆小唄　山陰音楽聯盟選歌　中山晋平　作曲
二、（同）岩井音頭　阪井　正一　作歌作曲
三、（同）若櫻小唄　野口雨情　藤井清水　作詩　作曲
四、（同）因幡節　湯かむり歌
五、（同）A兎が來い　B因幡の白兎　野口雨情　藤井清水　作詩　作曲
六、（同）鳥取小唄　鳥取會選定　黒田進　作曲
米子小唄　葛原しげる　杉田良造　作詩　作曲
七、（同）三朝小唄　野口雨情　中山晋平　作詩　作曲

第六章　風俗的方面

一、衣服

1、歴史的に見たる調査

禮服（古品）　七

男子服　袴　一
羽織　一
袴　一
帶　一
女子服　紋付模様附　一
同　無模様　一
同　小紋　一

2、地方的に見たる調査

イ、作業服　九

男子服　厚司　一
ハッピ　一
上着　一
股引　一
脚伴　一
山着　一
女子服　上着　一
前掛一　手甲　一

ロ、特殊服　六

子負用袴纏　一
同　帶　一
同　袖無　一
抱着　一
おくるみ　一
大人袖無　一

ハ、仕入服　八

ズボン　一
ズボン下　一
サルマタ　一
シャツ　一
前掛　一
靴下　二

ニ、寢具　五

敷布團　一
掛布團　二
たんぜん　一
帶　一

3、服裝改善上より見たる調査

婚禮衣裳一揃　一七

裾模様上着　一
白下着　一
赤長襦袢　一
丸帶　一
肌襦袢　一
腰紐　一
伊達卷　一
帶揚及芯　一
帶締　一
足袋　一
手袋　一
草履　一
重掛　一
箱迫　一
扇子　一
風呂敷　一
クッション　一

二、調度

古鏡　七
臺鏡　一
鏡立　一
髮飾　一〇
髮油　一

三、家具

機織道具一式　二組
縞帖　二
染色刺繍下繪　一八
秤　一
桝　二
墨さし　二

おはぐろ道具一式　三組
かつら　一
化粧品入　五
文箱　一

燈臺　一
燭臺　一
アンドン　一
ランプ　一
德利　四
自在鉤　一

四、寫眞

風俗寫眞　二〇

第七章　產業的方面

鳥取縣農會及稻作年表

年次	農會沿革	稻作年表
明治八年		縣下大に旱魃す。士族は家祿を奉還す。
同九年		布達京桝に改めらる。大に稔る。政府田租を改正し地價百分の二個半とす
同十年		豐作。西南の役起る。
同十一年		凶作。縣下蟲害甚しく、燒棄田二百四十餘町歩に及ぶ
同十二年		各種產業勃興せんとす。各地稻蟲發生す。
同十三年		戰後の影響を受け、米價騰貴著しく一石代九圓に達したる事あり。
同十四年		久米、河村農學校を創設す。
同十六年		旱害あり。農家金融逼迫を告ぐ。
同十七年		物價大に下落す。久米、河村農學校を久米、河村八橋郡立倉吉農學校とす。久米河村八橋三郡組合輸出米檢査を始む。
同十八年	私立因伯勸業會を起し、一時盛會に達したりしが亞て中央勸業會の創立に伴なひ遂に之を解散せり	久米、河村、八橋郡立農學校を縣立倉吉農學校と改む。

同	十九年	是れ本縣農會の前身たり
同	二十年	洪水あり、老農林遠里を聘し米作改良を鼓吹す。縣令を以て稻米改良組合準則を發布し各村に組合を設けしむ。
同	二十一年	各郡に稻作改良傳習所を設く。
同	二十二年	三重、山口その他各縣より種子を需めて試作す。風雨の害あり、凶作。
同	二十三年	豐作此年より地方費にて手當を支給し、稻作改良試驗を行ふ、縣下水害あり。九月風害あり。
同	二十四年	本縣勸業諸問會規則を發布す、豐作。
同	二十五年	大洪水あり、全國凶作、稻作試驗此の年迄繼續す
同	二十六年	風水害あり、日清戰役起る。
同	二十七年	本縣勸業會を組織す、日清戰役平定す。
同	二十八年	縣下豐作す、害蟲驅除豫防法出づ。
同	二十九年	因伯米改良組合取締規則を發布し組合を組織し、因伯輸出米檢査所を置き檢査施行せり、各郡に農事試驗場を設く。
同	三十年	豐稔、外國米の輸入多し。米價騰貴す。
同	三十一年	各郡市代表者協議の上中央勸業會を設立し會長野村政明、副會長石谷董九郎を推し發會式を擧ぐ。役員改選し會長石谷董九郎副會長山瀨幸人就任す是れ本縣に於ける系統團體成立の嚆矢なり。勸業施設綱領の所定に基き、實業界規則發布せらる。組織を改め中央實業會となし各郡市實業會を統轄することゝなれり。
同	三十二年	法律第一〇三號を以て農會法發布あり。
同	三十三年	鳥取縣農會と改稱し規則を改正し、農商務大臣の認可を受く、その結果郡市町村實業會々則變更の必要を生じ茲に農會を設置するに至る。役員滿期改選を行ふ施設事業の主なるは機關雜誌實行の發行、農事視察及調査、巡敎師設置、選種奬勵、農會事業費補助等なり。
同	三十四年	本會谷口瀧藏技手を設置す、會長辭任す、七月臨時總會に於て後任選擧を行ひ寺田祐之就任。
同	三十五年	正副會長任期滿了に付改選す、會長山瀨幸人副會長藤岡直藏就任當時選種短冊苗代正條植等を奬勵す。
同	三十六年	耕地整理事業を奬勵し本會技手之に當り又臨時測量手を雇入る、農事講話には幻燈を使用し聽講者多し。
同	三十七年	郡農會技術員設置奬勵費を置き、爲に漸次其數を增加し此年郡市農會技術員協議會を開き爾後春秋二期開會することゝす、繼續事業選種短冊苗代正條植耕地整理を奬勵し又産業組合設置を奬勵し農産品評會を開催す、勅令第二二五號を以て農會令改正。
同	三十八年	
同	三十九年	規則の幾部を改正し役員の改選を行ひ會長山瀨幸人、副會長岡島正潔就任。乾燥調製俵裝の改良を行はしむ。
同	四十年	郡市農會長會議を開く、桑植桑園設置を奬勵し魯因伯米改良組合、米穀檢査成績大に擧る。重要物産同業組合法發布せらる、山陰地方浮塵子發生す、北清事變起る。前年より一般金融逼迫す
		海岸地方に浮塵子發生す、夏季米價昇上す。
		岩美郡美保村に縣立農事試驗場を開設す、因伯稻米改良組合取締規則を廢し縣令を以て地廻り米取締規則を發布す。重要物産同業組合法に由り因伯米壽出同業組合を組織し、三月より輸出米の檢査を開始す。稻作豐稔、日露戰役起る。日露戰役治る、滿洲及樺太の南半日本領土となる米價稍下落す。
		各郡市農會に産米督勵員を設け地廻米取締規則を勵行せり。縣令を以て苗代田設置規則を發布す。

同　四十一年　桑種子購入を町村に交付し苗木を養成せしめたりしがその結果百餘町歩の新設桑園を見るに至れり

同　四十二年　七月臨時總會を開き役員選擧を行ふ、會長山本春藏副會長加賀田哲一郎就任。

同　四十三年　各地に講談會を開き共同苗代設置産米改良の爲稻架設置を奬勵し、八頭郡農會は實地指導を開始す雜種プリースロツクレグホン、ミノルカ名古屋の種卵を配布す。

同　四十四年　農會令の改正に伴ひ再び本會規則の幾部を改正す

臨時總會を開き役員を改選す、會長山本春藏、副會長井關幸藏就任、此年本會技師を講師とし町村農會主務員講習會を開き共同苗代品評會を開催す

大正元年　本務事務所は縣廳内に設けられしも獨立の議決し地を鳥取市東町に相し八月起工翌年二月竣成す、工費總額四四三九圓餘なり。

同　二年　産業組合の設數增したるを以て産業組合聯合會設立の要あり、創立總會を開き成立す、稻原種育成に就き縣の委託あり縣内六ヶ所に原種田を設け各郡市農會を經て當業者に配付す。副會長辭任し、補缺選擧を行ふ、船越英一當選。

同　三年　役員任期滿了改選せり會長山本春藏副會長船越英一當選、稻作增收品評會及第一回園藝品共進會開催。

同　四年　西伯郡に圃地を借受け本會技術員監督日本綿に關する特性調査純系分離經濟調査を行ふ。

氣候適順にして未曾有の豐作たり。

戊申詔書下る。

生育の初期氣候不順なりしがじ月中旬より回復し開花適順なりし爲豐作となる。

各郡地主會聯合會を鳥取市に開き、米穀檢査縣營の實施を促せり。

豐作にして米價騰貴せり、此年十一月より縣營米穀檢査施行せらる。

山陰道全通す、九月洪水あり。

各郡被害甚だし、浮塵子發生す。

土用中旱天續き水論諸所に起りしも濕度低く秋季旱冷葉枯病多く黑穗となりしもの多し、農事試驗場を廢す、稻採取事業を縣農會に委託す。

氣候適順にして發育良好なりしも出穗期暴風あり幾分收穫に影響せり、米價大に下落す。

發育良好なりしも九月暴風襲來し、著しく收穫減少せり、縣立農事試驗場再興す。

同　五年　町村農會技術員養成を目的とし本會に常設農事講習を置き卒業生を得。

同　六年　三月役員滿期改選會長佐竹義文（知事）副會長船越英一重任。

同　七年　關西府縣農會聯合農産物販賣斡旋所設立、本會之に加入し農産物販賣斡旋を開始す。

同　八年　四月會長辭任六月補缺選擧を行ひ、阿部壽準（知事）當選す、町村農會技術員設置奬勵費を置き設置を助成し設置二十五ヶ町村に達す、米穀共同販賣助成の爲農會倉庫聯合會技術員設置費に對し奬勵金を交付す。

同　九年　役員任期滿了八月役員選擧を行ふ結果、會長阿部壽準、副會長船越英一何れも重任す、九月阿部壽準辭任、十一月通常總會に於て補缺選擧の結果會長岩田衛（知事）當選、農事講習會を開く

同　十年　町村農會經營研究會を鳥取市公會堂に開き爾後毎年一回鳥取倉吉米子輪番開會に決す。

同　十一年　四月十一日農會法を廢し新に農會法發布せらる此の年勤力機を主とする改良農具展覽會を東伯郡上井に於て開會、十月會長岩田衛辭任十二月補缺選擧の結果會長西谷金藏當選す。

同　十二年　八月役員任期滿了臨時總會に於て會長西谷金藏重任、副會長石谷源十郎當選す、農業營經改善指導及び農家現狀調査定經營指導に當る。

同　十三年　産米乾燥法を懸賞募集す、優等には賞金贈與す。

挿秧以來氣候適順にして蟲害なく平年に比し二割一分五厘の增加を見る。

挿秧以來天候適順發育良好なりしも成熟期に至り天候不順降雨の爲平年に比し一割八分六厘ノ增收ヲ得

豐作を豫想せしに水害のため田の流失、埋沒、浸水のため平年に比し一割三歩弱減少す。

挿秧以來氣候適順且病蟲害の被害なく收量は平年に比し一割九分二厘の增收をなせり、此年高等農學校の敷地起工。

此の年螟蟲夥しく發生のため收穫高減少せると雖も平年作に比し一割七厘の增收あり。

挿秧以來雨量により螟蟲發生被害のため減收を見る。

降雨少きため旱害を受けたるものあるも螟蟲害少く未曾有の豐作なりし平年作に比し一割四分五厘の增收。

旱天のため苗の生育良好なりしも稻熱病發生多く洪水のため平年作に比し二割七厘減。

旱魃のため縣下を通じ植付不能を來すも潤雨により收量には比較的影響尠し。

同　十四年　農業經營共進會及び全國優良農具展覽會開催十一月本會事務所增築を議決十二月起工、翌年完成に至る。

同　十五年　郡役所廢止の結果縣廳舍狹隘を告げ縣は仁風閣を提供す、六月二十八日本會事務所を仁風閣に移す本會に農村大學開講。

昭和二年　採種組合なるものを作らしめ縣内需要に應ずると共に縣外に販賣す此年八月役員任期滿了臨時總會を開き會長西谷金藏、副會長石谷源十郎重任す。

同　三年　御大禮記念事業として柿栗の接木及び苗木植付を縣下各郡市に奬勵す、前年末事務所移轉工事進み十二月一日鳥取市東品治村合併地に移轉し十二月十三日移轉落成式をあぐ。

同　四年　移出農産品扶植奬勵を行ふ、財團法人富民協會の施設に呼應し水稻多收穫競作會を開き農業經營改善事業として農村電化を奬勵す。

同　五年　農産物價激を落農村不況其の極に達せるを以て農會運動を起し一方農家自衞作を講じ養兎業を奬勵す。風水害並に稻熱病發生のため被害を蒙り約一割の減收を來す、穀物檢査規則改正等級檢査實施。氣候寒冷稻熱病浮塵子のため被害を蒙り約一割强減收すを見る。苗生育良好、挿秧期旱天打續き平年作に比し約八分增收。田代期氣候適順なりしも移植後旱冷其の他局部的に穗首いもち發生。陸稻は旱害のため減少を示すも水稻は挿秧以來適順にして平年作に比し六分九厘の增收あり。苗代期間氣候適順にして好良なる發育を遂げたるも土用前より炎天打續き六分二厘强の增收を見る

農業一般

1、圖表類

統計上ヨリ見タル鳥取縣ノ位置　一（土地、人口、産物）
鳥取縣昭和五年度生産價格　一
鳥取縣農産物出荷狀況　一
鳥取縣ト北鮮ニ於ケル主要作物耕種季節表　一
鳥取縣生産價格累年比較　一

2、調査物

鳥取縣農會及稻作年表　二（明治八年ヨリ昭和五年マデ）
鳥取縣農業案内　一
八頭事跡抄（勸業之部）　一
鳥取縣農業偉人及篤農家名簿　一

農業經濟ノ部（圖表類）

本縣耕作田畑ト經營戶數　一
氣高郡中流農家見取圖　一
本縣農家ノ耕地所有面積ト耕作地面積トノ比較　一
農産物出荷團體所在地　桑苗ノ部　一
同　養蠶畜産　木炭　種苗ノ部　一
同蔬菜ノ部一同農産加工ノ部　一
鳥取縣農産物分布圖　一
農業關係諸機關分布圖　一
本縣産業組合分布圖　一
鳥取縣農業者經營別人口比較　一

同　（調査書類）

調査書類本縣農家經濟日誌（縣農會刊）
昭和六年八頭郡船岡村事務報告及財産表
同　西伯郡法勝寺村事務報告
農業經營調査成績（縣農會）（二冊）
鳥取縣農業經營調査

米穀之部

標本類
粳米標本（各品種）　四九（但シ籾及玄米）
糯米標本（各品種）　一三（同　）
鳥取縣標本準米　一六（同　）
調査書
米ノ統計　一
鳥取縣穀物檢査所報告　一
乾燥奬勵資料　一（第二十報）
八頭ノ米作　一
圖表類
鳥取縣米收量ト日照及氣溫トノ關係

水稻一反當收量年表
因伯米移出仕向地比較表
鳥取縣市、町、村、別產米高
稻作付反別收量累年比較

禾穀類ノ部

標本類

裸麥標本　五（品種別）
皮麥標本　五（同）
小麥標本　五（同）
其他麥類標本　四
蕎麥標本　二
黍標本　二
玉蜀黍標本　二（浸漬及種子）
粟標本　一
高粱標本　一

圖表類

郡市別麥生產高作付反別表　一

園藝之部　果樹標本類

富有柿（甘）　一
花御所柿（甘）　一
次郎柿（甘）　一
新平柿（澁）　一
富士（澁）　一
西條柿（同）　一
二十世紀梨　一（日本梨）
晩三吉梨　一（同）
長十郎梨　一（同）
明月梨　一（同）
今村秋梨　一（同）
バスクラサン梨　一（洋梨）
萊蘆慈梨　一
蘋梨　一
無花果（ブラウンタノキン）　二
無花果（在來種）　一
桃（田中早生）　一
李（油桃）　一
ハヂンケフ（油桃）　一

圖表

鳥取縣主要果樹生產額　一
鳥取縣果實出荷狀況　六組（鳥取二種平均）
本縣果樹園藝組合商標　一
果樹病及適用藥劑　一
果實出荷團體所在地分布圖　一
本縣二十世紀梨施肥標準量表　一
日本梨生產高收量反收比較表　一
郡市別柿收量作付反別反當收入比較　一

調査類

花御所柿ノ調査　一

同　蔬菜標本類

米子蕪菁　一（浸漬標本）
甘藷（湖山白）　一（同）
甘藷（伯洲赤）　一（同）
同（千葉赤）　一（同）
同（元氣）　一（同）
馬鈴薯　一（同）
葱頭　一（同）
大山西瓜　一（同）
干瓢　一（製品標本）
干瓢　一（浸漬標本）
防風　一（同）
田ノ島南瓜　一
朝鮮南瓜　一
大江百合根　一
山葵　一
黑大豆　三
青大豆　一
小豆　二
菜豆　七（各種）
豌豆　二（同）

蠶豆　四
落花生　二
豇豆　一

圖表類

蔬菜病害及適用藥劑　一
郡市別甘藷作付反別、收量、反收表　一
十字花科作物交配難易一覽表　一
本縣重要蔬菜品種、反當收量　一
昭和五年度園藝統計表　一
南瓜ノ統計　一
オ米ノ緊縮オ芋ノ奬勵　一
大根ノ統計　一
茄子ノ統計　一
西瓜ノ統計　一
里芋ノ統計　一
葱頭密植栽培成績　一
本縣農試場西伯分場ノ事業要項　一

養蠶及蠶糸關係（標本類）

繭標本　五六
本縣產繭時代別標本　二桙　約百種（明治十四年ヨリ昭和七年マデ）
屑繭製品　五個　眞綿製品類
改良島田式簇　二
織藁簇　一
給桑臺　一
蠶網　一
稚蠶掃立用紙　二

圖表

鳥取縣ニ於ケル最近六ケ年ノ飼養戶數、掃立枚數、收繭數比較　一枚　大正十五年ヨリ昭和五年マデ
鳥取縣蠶品種別掃立枚數　一　昭和五年度

調査書類及印刷物

鳥取縣蠶業取締事務成績　一冊　鳥取縣蠶業取締所
養蠶統計　一

林業之部

標本類

篠ノ子　一（浸漬標本）
1　木材標本　二二
2　木炭標本　九〇　原料對比
3　杉皮　一
4　カヤノ實　一
5　トチノ實　一

圖表類

本縣主要林產關係副業品　二
八名式白炭竈地割圖　二
鳥取縣公私合林伐採價格表　一
同　加工用材一覽　一
同　伐採價格狀況　一
同　林產加工用材一覽表　一
調査表
八名式白炭製造法

畜產ノ部

標本類

因伯牛標準體型模型　一
蜂密　一

調査書類

鳥取縣ノ畜產　一（印刷物）
家畜改良ニ對スル經營方法及其ノ成績　一（印刷物）

圖表類

類別畜產組合數組合員並ニ飼養頭數表　一
本縣畜牛飼養頭數　一
本縣畜牛生產頭數　一
本縣牛ノ移出頭數　一
本縣牛ノ斃死頭數　一
本縣牛ノ屠殺頭數　一
八頭郡畜牛改良組合　一
本縣馬匹累年表　一
本縣郡市別家畜家禽現在數　一
畜牛市場所在地分布圖　一

副業ニ關スル標本

山ノ芋標本　二　栽培種、野生種（各浸漬標本）

蒟蒻薯標本　一（浸漬標本）
黄蓮標本　二（浸漬標本　乾根）
トロ、アフヒ　一（同）
三極種子標本　一（瓶　詰）
菜種標本　二（大朝鮮、小朝鮮（瓶詰）
麻　實　一（白瓶詰）
紫雲英種子　二（同）
和紙製造標本　一四（瓶詰浸漬）
和紙標本　（打譯別紙）
茶　（打譯別紙）
三極標本　一
三極黑皮標本　一
三極白皮標本　一
楮黑皮標本　一
楮白皮標本　一
雁皮黑皮標本　一
雁皮白皮標本　一
煎茶標本　一三種（用ヶ瀬、打譯別紙）

桑　茶　二
濱茶標本　二
ハブ茶標本　一
伯州綿標本　一（浸漬）

紙標本內譯

半切紙　一束　原料——三極
卷　紙　三種　黄、白、筋入　原料——三極
障子紙　一束　原料——楮
書院紙　一　原料——三極
未酒障子紙　一　原料——楮
傘　紙　一　原料——楮
インキ止紙　一　原料——三極
塵　紙　一　機械漉　原料——マニラ麻
半　紙　一　原料——三極
傘用紙　一　原料——楮　產地、氣高郡日置村山根
生漉美濃紙　一　原料——楮　同　同
塵　紙　一　原料——黑皮滓　同　氣高郡明治村小原
美濃紙　一　原料——三極　同　氣高郡神戸村岩坪
障子紙　一束　原料——三極　同　八頭郡佐治村
油　紙　一枚
卷　紙　三本　原料——三極
平　紙　一　原料——三極
美濃紙　一　原料——楮
生漉障子紙　一　原料——楮　同　氣高郡日置村山根
厚階田紙　一　原料——三極　同　氣高郡神戸村上砂見
美濃紙　一　原料——楮　同　氣高郡日置村山根
同　一　同　同　同　郡青谷町
半　紙　一　原料——三極　同　同　郡同町
半　紙　一　原料——　同　同　同　郡日置村河原
五倍子標本　一

調　査　物

鳥取縣副業調査（昭和五年度マデ）

農產加工ニ關スルモノ（標本類）

副業織物標本　九　農家工藝

樫木製作標本　四
樫木眞田標本　五
疊表標本
莚標本　一
スゲ傘　二
編　傘　二
淀江傘　二
蛇目傘　二
柿　渋　一
弓張提灯　一
線　香　二
林　香　一瓶
賣藥標本　五　行商販賣藥
本縣產清酒レッテル　八組　一組約八類ヲ含ム

農業副業ニ關スルモノ（圖表）

鳥取縣副業生產額　三　昭和四年度
同　副業品（水產關係）

同　（加工品）　一
藥百貫匁ニ對スル加工別價格表　一
金ニ成ル野生藥草　一

特用作物之部

標本類

伯州棉標本　一
全棉花標本　一
煙草茗標本　二
葉煙草標本　八
製麻標本　六
マニラ麻標本　一
銀香標本　一

圖表類

1　棉花ノ利用　一

農具ノ部

標本類

東田式梨和模型　一
太一東　一
千刄稻扱　一
棉實繰機　一
棉打槌　一
踏込　一足
ワラジ　二足　平時用及雪期用
草履　一
アシナカ　一
足輪　一
捕兎網　一
箕　一
自在鉤　一

圖表類

本縣使用耕耘用具　二

調査書

本縣農具略歷

工業品標本類

盛花籠　一個　米子產
活花用籠　一　鳥取產
柱掛花籠　一　米子產
同　一　鳥取產
竹籠類　二　米子產
飯櫃　一　鳥取產
筆筒　一　米子產
會席膳　一組　米子產
吊花活　一　鳥取產
斑竹花生　一　鳥取產
小口　一
花活　一　鳥取產
文庫　一　米子市西大谷
提籠　二　鳥取產
籠　一
ゴム靴　一足　產業組合聯合會扱品
硝子標本　二二
紡績順序標本　一組　倉吉大正紡績株式會社
屋根瓦標本　七

家庭工業品

織機用　オサ　二
同　サイ　二
地機用　サイ　二
同　ヒ　二
織物見本帳　一冊
同　見本標本　二枚
德利　三個　大、小、中
中流農家見取模型　一戸　本校ニテ研究作製
雨戸ノ戸締　一
門ノ戸締　一

自然物利用品

珊瑚海松細工　七種
同右　製品　一輪挿　一個
同カフス釦　二
同ペン軸　一本
同箸　三束　小箱入　附楊枝三本

露光量違いの為重複撮影

同右　五　大箱入　附楊枝十一本

食料品

柚餅子　一箱
御山ノ雪　一
萬歳餅　一
味淋干　一
きざみ鯣　一
錦ノ波　一
栃餅　一
よもぎ　一
ラジューム飴　一
土當歸羊羹　一
モナカ　一
倉吉羊羹　一
山葵餅　一
白羊羹　一
防風糖　一
お山のあられ　一
ラジューム煎餅　一

魚具類

糸卷　一
受玉網　一
海中眼鏡　一
浮木　一
ヤス　三種
錘　一
釣針　一把
網針　一把
魚入　二　大、小
道糸　一把
鮎釣道具入　一個
縄　一把

寫眞

寫眞　一二〇枚

大正四年八月印刷
大正四年八月十日發行
昭和八年四月十日發行
（非賣品）
編纂兼發行者　遠部義良
鳥取市東町一番地
印刷者　吉田雄太郎
鳥取市東町一番地
印刷所　吉田印刷所
鳥取縣八頭郡國中村
發行所　鳥取縣女子師範學校

露光量違いの為重複撮影

同右　五　大箱入　附場長十一本

食料品

柚餅子	一箱
御山ノ雪	一
萬歳餅	一
味淋干	一
きざみ鰯	一
錦ノ波	一
柄餅	一
よもぎ	一
ラジューム飴	一
土當歸羊羹	一
モナカ	一
倉吉羊羹	一
山菜餅	一
白羊羹	一
防風糖	一

お山のあられ	一
ラジューム煎餅	一

魚具類

糸卷	一
受玉網	一
海中眼鏡	一
浮木	一
ヤス	三種
錘	一
釣針	一把
網針	一把
魚入	二　大、小
道糸	一把
鮎釣道具入	一個
縄	一把

寫眞

寫眞　一二〇枚

昭和八年四月八日印刷
昭和八年四月十日發行

（非賣品）

編纂兼發行者　遠部義良

鳥取市東町一番地
印刷者　吉田雄太郎

鳥取市東町一番地
印刷所　吉田印刷所

鳥取縣八頭郡國中村
發行所　鳥取縣女子師範學校

終